
開花日和 -Memory With You-

水音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

開花日和 - Memory With You -

【Nコード】

N4270W

【作者名】

水音

【あらすじ】

純白の花が舞う中、少年は確かな温もりを感じていた。

胸に秘めた想いの蕾を、少女たちは開花させる日を待ち望んでいた。

あの十年前の悲劇から、今もずっと。

六月も半分が終わる頃、一人の少年が育ての祖父の遺言に従って

光陽の地に足を下ろした。

そこで出会ったのは、「自分」とは違う「種類」の人間。

そこで巡り会ったのは、複雑に絡み合った「過去」。

そこで知ったのは、誰も知ることのないはずの「未来」。

それらすべてが、誰かの描いた「運命」だとしても。

Blackout (前書き)

プロローグにしては長すぎるかもしれませんが、早速色々危ないシーンもあります。どうぞお楽しみください。

Blackout

草木も数えるだけになるほど荒れ果て、極度の乾燥にひび割れた大地。

水底だった場所に水棲生物の死骸を残す、涸れて干からびた河川や湖。

鼻に突き刺さるほど強烈な悪臭を放つ、黒く淀み腐った海。

乾燥した大地から巻き上げられた砂で覆われ、常に黄土色にかすんだ空。

暖かみなど微塵もない、有害な放射線や紫外線を降らせるだけの太陽。

青や緑、白という色はどんな色かも忘れてしまった。

人間が何世紀もかけて築き上げてきた文明もみな崩壊し、消滅した。

古くに記された終焉まで、あと。

盛大に蒸気を吐き出す大型機械や唸るタービンの放つ重低音に、アルミ缶を叩いたように軽い二つの規則的な靴音が混じる。所々切れている上からの照明よりも下から漏れる光を頼りに目の細い鉄網でできた作業用通路を抜け、ともに白の半袖シャツとジーンズとい

うラフな格好をした青年と少女は所々錆びかけた鉄製の階段を下りていく。

「どうした？」

先を歩く青年は振り返ることなく、幾度と来ているにもかかわらずいつも視線がどこか落ち着かない少女に尋ねた。

「大したことではありません。ただ無駄にアメリカナイズされていますね、と」

客観的な少女の指摘に、相変わらずの効率優先の癖だと青年は小さく笑う。こういうものはえてして人生と同じ。後々に時折感じるような無駄もあれば、必要性のある遠回りも求められ、たまには退化的成長もしてしまう。だが、そうやって人間は少しずつ前へと進んでいくものだ。急激な進化はかえって己の身を滅ぼすことを、青年は深く知っている。

そう。それはまるで、十年前から人間が辿ってきたような。

「そうだな。あれはあれで仕方なかったとはいえ、これだけスペースを食う馬鹿でかいものを作る必要はなかった」

とはいえ、ここで少女の言うことを真っ向から否定する理由も必要性もない。青年は少女の言葉を受容しつつも、話の筋を施設の巨大さにすり替えるだけに留めた。

それからさらに二人が歩を進めると、人一人すれ違つのもやつとなほ道幅は狭くなり、大の男は身をかがめなければいけないほど天井も下がってきた。今までは見えないように片づけられていた無数の配線や配管も剥き出しになってきたが、さらに通路の奥に歩を進めるとその突き当りに小さな部屋が見えた。

「どうだ？ 首尾のほうは」

開け放しになっていたドアをノックして、中で一人パソコンに向かって作業をする少女に青年は進捗状況を問う。

「上々ですね。あとは細かな調整くらいで」

「そうか。ならもう幕を開けよう」

「畏まりました」

期待どおりの答えに満足した青年の指示に、作業していた少女は了解の印として小さく頭を下げると再びパソコンに向かい、マウスを最も新しく更新されたアイコンに移動させた。

『Cunning Strain?』　パソコンに向かっている少女が一から構築したプログラミング言語の羅列がしばらく上へと自動でスクロールされていく。相変わらずこの少女は機械系には強いと青年も同行してきた少女も感心した。過去、調子が悪くなった青年宅の冷蔵庫をこの少女が修理・改造するという犯罪行為を目の前でやってのけられたときは驚いたが、実際その冷蔵庫は未だ現役で、青年と同行する少女の二人だけの家族の食材を冷やし続けている。

「さて、十年前の悲劇の続きでも見ましようか」
プログラムが完全に立ち上がり、最後に「GO」と書かれた項目が選択されているのを確認すると、少女は歪んだ笑みをエンターキーに叩きつけた。間もなくモニターに彼らのいる日常の外の世界が映しだされると、そこには何の変哲もないとある街の夜景が広がる。バックライトに照らし出される少女の隣で、青年と、青年に同行してきた少女も小さな笑みを浮かべていた。

白い。

一面の純白が最も奥底に眠る記憶の中、少年は隣にいる誰かに尋ねた。白雲も無くどこまでも等しく青い空からひらひら舞い降りてくるこの白い欠片は雪かと。

「違うよ。雪じゃないよ」
少年の隣にいてくれて、優しくその手を握り返しているその誰かは微笑んで答えた。

「でも、こんなに白いよ？」
「これね、全部花なんだよ」

少年が尋ねると、その誰かは目の前に欠片を舞い降りてきた欠片を掴み取り、少年の目の前で手を広げて見せる。

「ほらね」

「あ、ほんとだ」

誰かの手のひらの上、今も二人の周囲にひらひら舞い降りているそれは確かにチューリップの花弁ほどの大きさと形があった。

この舞い降りる白い花と一緒にいるその誰か。それが当時の少年が心の拠り所としていたすべてだった。

そして今も。

「……………」

焚かれた甘ったるい香の匂いに紛れ、汗と栗の花と牝の臭いが漂う部屋の中、彼は目を覚ました。明かりが行燈ほどの強さしかないために底無しの暗さを覗かせる天井に、誰かの吐いた紫煙が漂い、溶けていく。

懐かしい夢を見るほどいつの間に寝てしまったのか、彼が頭を押さえながら上体を起こすと、次第に覚醒してきた耳に粘液の擦れ合う音と複数人の喘ぎ声が届いた。

しかし夫婦間の倦怠期や恋人間のマンネリどころか、恋も愛も理解していない彼はただ「そういう仕来り」や「その場の流れ」の感覚でここにいる。もちろん、今ではこの空気の中で呼吸できる彼とて最初の頃はこの性欲に溺れ、身も心も墮落して汚らわしい光景に吐き気すら催したが、あれからもう五年以上が経過し、今や彼もすっかりこの空気にも慣れた。たとえるなら常識的な外界から遮断された深い海の底、水の流れもなくどろどろとひしめき合う淀みの中にすっかり心まで浸かってしまった。

「よお、目え覚めたか？」

妙齢の二人の女性を両脇に侍らせていた男性が彼に声をかけてきた。暗がりだが、背格好や外見的な年齢は彼とほぼ変わらない。

「まだどこかぼうつとしてる」

「魔されてたからな、お前」

「だろうな」

もう二度と戻らない過去、決して忘れられない人を夢見ていた。

だが少なくとも、彼にとつては今ここにいる現実よりも遙かに大切にしなければいけないものだった。

「なあ。これ、お前のか？」

ふと彼はすぐ手元にあつたメンソールの煙草とライターを手に取り、尋ねる。箱の側面の表示を見ると、ニコチンもタールも十二ミリ。決して軽くはないがこれ以上重い煙草も吸つたことはある。

「そうだけど、吸うのか？」

「ああ。一本もらうわ」

手慣れた仕草で箱から一本を引き抜き、啜えた彼は火をつけたライターは箱の上に放り投げ、再び横になった。肺まで吸い込んだ紫煙を燻らせると、きつめのメンソールが少しだけだが思考を明瞭にさせる。

「お前、もう吸わないんじゃないのか？」

「明日からだよ。あつちの学校じゃおとなしくするつもりだし、アイツもいるからおちおち吸えないだろ」

「ああ、あのコはお前にべつたりだしな」

理性なんて薄皮一枚のものだ。一部の人間が崇高だと奉る人間様の理性のすぐ下には本能と自己満足的な欲求しかない。テレビの向こうで偉ぶつた理想主義者が声高らかに掲げる愛や正義も全部それだ。どれだけ純粹を装って訴えても、その行為と思想自体が穢れている。綺麗なものは一度穢してしまえば穢れたままになるが、その穢れたものからは二度と綺麗なものなど生み出せない。どうせ穢れているなら、せめて欲求だけにでも素直になつたほうがまだましだ。

「ああら、アンタいつ起きてたのよ？」
その声に振り向いた彼の背後、裸にシーツを巻いただけの長身の美女が立っていた。

「ついさっきだよ」

誰かが蹴飛ばしたのか、畳の上にぶちまけられていた吸い殻や灰にまみれた灰皿を拾い、彼はそこに吸っていた煙草の灰を落とす。

「なら、アンタのそれも寝起き？」

「ん？ ああ、これか」

「ねえ、どうせなら穴三つ、一通り相手してあげるわよ。最後なんだし」

視線を落とした彼の背後から首に両腕を巻きつけられ、シート越しに適度に弾力を持った乳房を当てられながら耳元で囁かれると、ぞくりと鳥肌が立つような淫靡な雰囲気香の香のように彼の鼻と心にくすぐった。相変わらずフェロモンの塊のような女だと彼は内心で吐き捨て、まだ半分ほど残っている煙草を灰皿に押しつける。

彼女の柔肉は彼は何年も前にすべて味わい尽くしている。そもそも彼の童貞を奪ったのはこの女性だ。周囲から「林檎」または「林檎姉さん」と呼ばれる彼女は表向き清楚で面倒見のいい淑女を演じているが、いざ夜伽の場となると、どんな娼婦よりも淫乱にその美貌と豊満な身体を肉欲に戦慄させる、まさに妖女だ。

「どうせなら俺の言うとおり相手してもらいたいな。最後なんだし」
そう言うと、彼は後ろ手で林檎の頭を掴み、そのまま首を捻って唇を重ねる。軽くつえばむようなキスから、互いに舌を差し込ませて唾液を絡ませ、歯や歯茎までねちっこく舐め合うディープリキスへ移行した。

これは一種の儀式。毎朝、起床後に顔を洗うようにもう何年もしてきたこと。非日常も回数を経て浸透するほどに日常にすり変わり、溶け込んでいく。何もおかしくはない。それに、もういい加減気急なくなってきたこの交わり合いも今日で終わりだ。

彼は自分自身のくだらない常識や倫理に強めの麻酔を打ちこむと、逃げられない底無し沼に沈んでいく感覚を無視して林檎の肉体を貪ることにした。

その心に、こんな淫靡に墮落した場所には決して似合わない純白の少女を思い浮かべながら。

人界、中東。UAE、ドバイ。現地時間二十三時。

「チツ。あのクソガキ、どこに消えやがった」

「まだ近くにいるはずだ。探せっ！」

ドバイ中心部、空を見なければ夜かとわからないほど高くそびえたつ摩天楼が放つ眩いネオンの下、サングラスに黒いスーツで身を固めた屈強な男たちがコードレスのインカムで連絡を取り合いながら街を走り回っていた。

「つたく、あのガキども。捕まえたらタダじゃおかねえ」

現在気温はもう深夜になろうというのに三十三度、夏と冬しかないようなドバイの天候を踏まえてもこの時期にしては暑い。そして湿度は悠に百パーセントと言っても過言ではない高温多湿の環境下、通行人だけでなく路地裏まで見逃すまいと男たちが目を凝らして追いかけているのはたった二人の少年少女。まだ二十歳にもなっていないその二人に男たちはもう一年近くもいのように人界各地を振り回され続け、男たちと彼らを雇う組織はその少年少女を拘束どころか殺すこともできずにいた。

ここに来る前にはモロッコの小都市に迫撃砲まで打ち込んで少年少女を追い詰めたが、捕獲を急いで動いた歩兵連中が次々と二人に葬られ、武器を奪われた拳銃に逃げられた。とどめに男たちの移動手段であった車まで破壊されてしまい、この作戦を計画・指揮した部署の男たちは翌日、作戦失敗の罪として首のない死体となって砂漠に投げ捨てられた。投げ捨てる、という表現がよろしくないとするならば、あれはあくまで手抜き鳥葬とでも言い張ればいい。もとより葬送の方法や手順などはたとえ同じキリスト教でも宗派によって異なるのだから。

「クソ！ あのガキ、絶対に許さねえ」

散開し、各自単独で捜索に走る男たちの一人が、小賢しく逃げ回る少年少女に向けて殺意混じりの愚痴を吐き捨てたときだった。

「ふん。どの口がほざいてるかと思えば」

「なっ!?!」

不意に背後に気配を感じた瞬間、男の延髄に重い一撃が打ち込まれた。それが銃の台尻だと理解するよりも早く、男は意識を手放し

た。

「何か奪えるものはありますか？」

「期待外れだな。下っ端だから無理もねえけど」

夜の闇から浮かび上がるように姿を見せた少女に、気絶させた男の財布からいくらかの現金を抜き取った少年は男が胸元に隠し持っていた一丁の拳銃を放り渡す。

「ベレッタ？ しかもこれ、09-11タイプAじゃないですか」

顔色ひとつ変えずにそれを受け取った少女は、明かりが少ない中ながら、恐らく現存する拳銃の中で最も殺傷能力があるとされるその種類と型番を一目で見抜くと、慣れた手つきで弾倉の弾数を確認し、撃鉄を下ろす。

「ああ。そいつも『あれ』のひとつだ」

「ホント厄介ですね。三世界にはびこる悪意の鳶は」

苦々しく吐き捨てる少年の言葉を受け、溜め息まじりに十年前から狂ってしまった現状を嘆きながら少女は安全装置を外そうと指をかけたが、それはどうやら相手が最初から解除してくれていたらしい。

「けどまあ、俺たちのやることは変わんねえ……よっ」

そう言いながら、少年は気絶させた男の顎の左側に右手、右のこめかみに左手を当て、男の頭を挟むように手を添える。そして両手を互いに逆方向に動かすと、思わぬ方向へ力が加わった男の首の骨は関節が外れた鈍い音を上げた。

「今はこうして『雑種』を潰していくしかないですけどね」

少年の手で息絶えた男を見下ろし、少女は奪った拳銃をスカートとベルトの間にきつく挟み込み、上着で隠す。

「関係ねえさ。目的は最初からひとつなんだ」

相手が全知全能の神ならそれ以上の知恵と力で捻じ伏せて、残虐非道な悪魔ならそれ以上の狡猾さと冷酷さで地獄に送り返してやる。目的のためなら邪魔なものは何であれ壊して、殺して、この世から消してしまえばいい。それだけのこと。

「そうでしたね」

己のなすべきこととその手段は問わないことを確認した後、四つの瞳に明確な目的遂行の意志と殺意の炎を滾らせ、少年少女は音もなくその場を離れた。

「次の目的地はどこに？」

先程葬った男の死体を見つけたのか、騒ぎ始めた衆人をよそに少年が停めてあった大型バイクに跨りエンジンをかけると、少女はその後ろに横向きに座り、手のひら大のスマートフォンからGPS機能呼び出す。

「ここから近いのはタイ……よりはアルメニアか。カフカス地方の小都市に拠点があるはずだ」

少女の問いに答えながら少年はアクセルを吹かし、熱を上げていくエンジンと自身をシンクロさせる。

「一気に寒くなりますね」

「途中で着込むもの買えばいい。奪った金で」

少年の腰に左腕を回して右手親指だけで器用にGPSを操作しながら、まだ早春のカフカスの寒さを想像した少女は思わず身震いしたが、冷静に少年は先程殺した男の財布から抜き取った札束を少女に後ろ手で渡した。

「羽振りがいいですね。私も履歴書送ってみたら受かるでしょうか」

GPS検索したドライブからアルメニアまでのルートを頭に叩ききみ、少女はスマートフォンをスカートのポケットにしまった。そして、少年少女の乗ったバイクは派手にタイヤをスピンさせてその場を離れ、一路北へ向かう。

「そついや　まあきつと履歴書送れば受かるだろうな」

世界的不況のさなかでもなかなか天井を推し量ることがないオイルマネーで築かれた近代建築群、ドライブの摩天楼を抜けようかという頃、少年は先程の話の続きを始めた。

「あら？　今さらお世辞ですか？」

「俺と違って人をモノとも思っていないなら、だけどな」

わざとらしく少女は少年の背中に左の乳房を押し当ててみるが、返ってきたのは少年の冷静な答えだった。俺と違って、という点にアクセントが置かれていたのは少女も鋭く察知していたが、とりあえずさりげなく回している左手で少年の股間を探ってみると、悲しいほどに全く反応していなかった。

「私はそこまで腐っていませんよ。『奴ら』ほどは」

冗談とはいえ、無反応という空しい結果に慥然と会話を続けながら少女は少年の背中に頭だけを預けることにした。

少女は傍目から見ると相当な美人だ。美少女というにはあまりに大人びた容姿を持ちながら、ふとのぞかせる悪戯好きな側面はまだ精神的な幼さがうかがえる。中学時代までいた母国でも相当な数の誘いを受けてきたが、それは海外でも変わらない。

「そいつはよかった。肯定したら振り落してた」

冗談に聞こえさせない冗談を吐き、少年はバイクのハンドルを握る右手を手前に引いて加速。信号が青になるタイミングを狙って交差点に進入した。

「そういえば、そろそろ髪切りませんか？」

摩天楼を抜けようかという頃、そう言って少女は自分と同じ翡翠色をした少年の髪を数本、軽くつまんだ。

「めんどくさ。それに行き先寒冷地だぞ？」

「私は髪を切ったときのあなたの髪型、好きですけどね」

「ああそうかい」

髪型で好き嫌いを選ぶなよと思いつつも、少年は適当な相槌で巻きつくような湿った風とともに遙か後方へと流した。

数日後。

夕飯の買い物客で賑わう商店街に建つ、とあるスーパーの店内、放課後なのか、制服姿の一組の少年少女が買い物籠を手に鮮魚コーナーに向かっていた。

「あ、あと買うものは何があるんですか？」

疲労を見せ始めている少年が先立って歩く少女に尋ねる。既に少年の手にはたくさんのお買い物袋が握られており、学校指定の鞆は脇に挟んでかろうじて持っている様子だ。

「えっとね、お魚の切り身にバターに小麦粉に………悩殺用の下着かな」

「最後のひとつを除いてお付き合いいたします」

明らかに最後の買い物は冗談だろうが、どこまでが冗談かわからない少女の発言を長年聞いてきた少年は懇切丁寧に拒否した。彼女を一度調子の乗せるとんでもないことをやらかすので、うまく手綱を引いて調整しないと少年の身体も精神も軽く危険水域に持っていかれてしまう。

「むっつ、食いつきが悪いなあ」

「そんな餌に騙されませんって」

「でも一瞬想像しなかった？」

「………してません」

わずかに逡巡し視線を逸らした少年を特に追及することもなく、緑色の髪にアクセントのように巻かれたリボンを揺らし、少女は並べられた白身魚の切り身を手取る。先程の意地悪な目はどこへ消えたのやら、真剣にパック売りの切り身を見つめていた。

これはまた長くなりそうだな。少女の並々ならぬ気迫のようなものを感じた少年は、邪魔をしないようにとそっとその場を離れることにした。もとより大した広さもないスーパーだ。よほどの子供でなければすぐに見つけられる。

すると、

「ん〜。二人で六本は多いですね。けどバラで五本買うより安いし、んー、けどこの値段は他と比べても狙い目ですよ。ある程度は日持ちもするけど、その日のうちに使い切りたいたいし………」

ほんの数日前にも少年が見たような光景が今度は野菜コーナーの人参の前にできていた。あのときは精肉コーナーで神族の娘だったが、今度は人族だった。透明なフィルムに三本ずつ入った人参二袋

とバラ売りの人參を手に取り、どっちを買うべきか盛大に独り言を漏らしながら思慮している。

首を傾げたりする度に揺れる、背中を半分ほど隠すまでの鮮やかなオレンジ色の髪には綺麗な天使の輪ができており、綺麗に揃えられた姫カットと合わせて髪の手入れの良さは遠目に見る少年でもわかるほどだったが、何より目立つのは彼女の胸元。おそらく少年が目の当たりにしてきたあらゆる女性の誰よりも大きく実った二つの膨らみがそこにはあった。

「あっ」

ふと少女と視線がかち合い、周囲に誰がいるでもないのに少年に見られていたことに、少女の怪訝な視線が少年に突き刺さる。

すると、

「あ、こんな所にいた！」

不穏な空気が漂い始めたそのとき、タイミングよく少年の連れの少女が切り身のパック片手にどこからどう見てもご立腹の様子で声をあげて近づいてきた。

「もう！ 勝手にいなくなつて」

「す、すみません」

そして、少年が少女に怒られている間に先程人參の前にいた少女は姿を消していた。

翌日、早朝。

「それじゃ、行ってくる」

木々の隙間にまだ八重霞が立つ頃、昭和時代のテレビドラマにも出てくるような古びた小さな無人駅で、開け放たれた電車の出入り口を背に彼は手荷物と軽い着替えだけを詰め込んだ黒いバッグを肩に背負った。

「おう。もう二度と帰ってくんないよ」

「あっちに行っても元気でね」

「ああ。橙次はどうでもいいけど林檎姉さんは元気で」

最大にして最高の悪友、水木橙次からの餞別は強烈な冗談で、精神的にも肉体的にも昼夜問わず世話になった八百蓼林檎は昨夜の淫靡な雰囲気など微塵も残さず、気丈に笑顔を見せてくれた。

「んだよ。それが見送りに来てやった親友にかける言葉だよ」

「それが送り出す人間にかける言葉かって言ってるんだよ」

離別の寂しさを紛らわせるように、十年來の友人と肩や胸を軽く殴り合っていると、

「それじゃ、あの子の世話もあって大変だろうけど、お願いね」

声をかけてきたのは妙齡の女性。あの子、というのは彼より一足先に引越し先に移り住んでいる彼女の一人娘のことだ。こうして立派に一人娘を心配する彼女も、昨夜の乱交にはいなかったものの、何度かあの乱れた淫蕩な空間で荒縄に縛られ、狂ったように恥辱に悦んでいたのを見たことがある。彼が一時間あれば女は別人に化けられると思うようになったのはそれ以降だった。

「はい。長期休暇のときは里帰りさせますんで」

「そのときはぜひ矢薙くんも、ね」

「考えておきます」

矢薙と呼ばれた彼が少女の母親と軽い社交辞令を交えていると、電車の発車を告げるベルが鳴り響く。とてもメロディと呼べたものではないその音に足を動かし、電車に乗った彼はそうして十年間育ってきた村を離れる。

ゆつくりと動き出した電車の中、旧型の車両のために上半分が開く窓ガラスからできるだけ身を乗り出し、まだ少し寒い春先の朝の風に運ばれて遠のいていく故郷の駅のホームを見るが、手を振る悪友や世話になった人たちはすぐに八重霞に飲み込まれていった。

彼が乗った電車は電気で走るとはいえ、メートル級で雪が積もる地域を走るためかディーゼルエンジンの音がやけに耳につく。だが、それが逆に育ててくれた故郷に懐古の情を抱きかねない彼の心を叱咤激励しているように聞こえた。

それからしばらく、いくつかの無人駅を通り過ぎていくと景色も

だいぶ変わり、森や林の中にちらほらと民家やビルが見え始めた頃、彼以外乗客がない車両の中、バッグの一番上にしまっていたA4サイズの茶封筒から一枚のメモを取り出す。引越し先の街の駅まで普通列車を乗り繋いでおよそ三時間。計算上、昼までにはそこに到着できる。

「なので、あなたはお祖父さんの遺言に従っていただきます」

ふと、矢薙は二ヶ月ほど前に聞いた遺産管理担当の男性弁護士という言葉思い出す。一年間。たったそれだけを期間をその街で過ごし、編入先の学校を無事に卒業すれば彼は広大な土地と莫大な遺産を手に入れられる。だが、そんなことに興味が無い彼がその遺言に従ったには別の大きな理由があった。

「あともう少し。もう少しなんだ……」

会いたい。

瞼を閉じ、その手に引越し先の住所のメモを握り締めながら彼は硬い背もたれに寄りかかる。耳につく電車の音も気にならなくなると、規則的に訪れる揺れが次第に彼を眠りの世界へと引きずり込んでいった。

同日朝、とある学校の教室。

「いやあ、さすがにこれは幸せすぎて恐いね」

「ああそうか。それで楓、次は教室移動だっけか？」

いつもの軽い一悶着があったホーミングがやっと終わったというのに、いきなり悪友の寝言の続きを聞く羽目になるとは思わなかった少年は一言でそれを遙か彼方へ受け流し、居候先の幼なじみの少女に尋ねる。

「はい。そうですよ」

教科書とノート、筆記用具を抱えた楓と呼ばれた栗色の髪の少女は少年の問いに即座に笑顔を混ぜて返したが、

「全く、本当に君はこれだから」

「何が言いたいんだ？ 樹」

少年の取った態度に不満たらたら表情を浮かべる悪友・樹に、少年はむしろその不満に心当たりがないとばかりに尋ねた。

「わからないのかい？ 本当に、慣れというものは恐いね」

俺はむしろお前のその思考を理解しかねる　と少年は内心で思いつつも、まんざらのを外してはいない悪友の言うことも無視できない現状を鑑みていると、

「結局のところ、羨ましいだけなのですよ」

「麻弓。それはさすがに言わなくてもわかる」

あながちこうならざるを得ない状況に追い込まれたと表現できないもないこの現状を、特に同性の第三者からの一言を語ってくれたもう一人の悪友・麻弓の言葉に今だけは激しく納得させてもらい、少年は席を立った。ふと少し離れたところで今の会話を聞いていた二人の少女が苦笑していたが、それは見なかったことにしておこう。そして教室移動の最中、

「そういえば楓さん。こないだのプリントなのですが」

「あ、あれですね。一応やってみたんですけど、難しいところが多かったですね」

「ん？ 待ってくれネリネ。プリントってのは？」

まさかとは思いつつも、ふと背中に悪寒を催させたその単語について、青い髪色のネリネと呼んだ少女に尋ねると、

「えっ？ 今日提出する課題のプリントですが」

逆に、驚いた様子で尋ね返された。

「課題、今日、提出……」

何の話だとばかりに記憶を探ってみると、思えば先週の授業でそんな会話があつて、何枚かのプリントをもらっていたことを少年は思い出した。

「……無理だな」

「あ、諦めるにはまだ早いですよ！」

「そ、そうですよ」

現在時刻、授業開始三分前。早々に白旗を上げた少年をネリネと

楓の二人がフォローする一方、

「どうやらまだ仲間がいたようなのですよシアちゃん！」

「うう、神様は私たちを見捨ててなかったツス！」

こちらはこちらで、麻弓が赤い髪のシアと呼ばれる少女と抱き合うほど少年が課題を忘れたことを喜んでいた。少年としては、自分もその二人と同じ穴の貉になってしまったことだけを感じながら、移動先の教室へと向かっていった。

「い、今から埋めたら何とかありませんか？」

生徒は全員揃ってもまだ教師の来ない授業前の時間、少しでもフォローに回り続ける楓に、少年はさらなる悲劇への連鎖を告白せざるを得なかった。

「いや、そのプリント自体、家に置いてきた」

「……え？ ええっ？」

「それは……無理ですね」

驚く楓と深い溜め息をついたネリネが無言になった数秒間に何を言いたかったのか、おそらく少年には一生わかるはずもない問題なのだ。

「そ、それじゃあ私のプリントを代わりに提出すれば……」

「いやそれじゃ意味ないし」

どこまで焦っているのかわからないが、書いてある文字ですぐにばれてしまうだろうというツッコミは楓に伏せておいて、ここはもう怒られようが補習を受けようが覚悟するしかなかった。我ながら情けない覚悟だと思いつつもその少年はプリント提出までの時間を溜め息だけを吐いて過ごすことに決めた。

その一方、

「まったく、私は先週からこうしてずっとノートの中に挟んであったのですよ」

「私は教科書の間ツス」

「それはつまり、シアちゃんと麻弓さんは忘れたわけではなく、最初から諦めていたと？」

所々角が折れたりしわが寄ったりしているものの、解答欄だけは真っ白なプリントを見せ、どうだと自慢するかのような二人にわずかながら声のトーンが落ちたネリネの声が浴びせられた。

「えっ？」

「そ、それは　ね、リンちゃん……」

嫌な予感がしたのか、顔と身体が固まったシアと麻弓に、

「救済措置は、なくてもよろしいですね？」

きつちりと解答欄の埋まったプリントを手に、一点の穢れどころか情け容赦のない表情でネリネはこれから縋りついてくる予定だった二人の手を振り払っていた。

同日、十五時過ぎ。

「はあ、やっと着いた」

改札から際限なく吐き出される人波を大きく避けたところで、荷物を足元に下ろし彼は大きく息を吐いた。昼過ぎに到着の予定だったが、どこぞの駅構内で起きた人身事故とやらでダイヤが大幅に乱れたためにこんな時間になってしまった。

ひとまず駅舎の彼が外に出ると、人、人、人　。車の往来も激しく、高低多種多様なビルが立ち並んでいた。

「すげえ……」

思わず口をついて出てしまったのは、今まで住んでいた場所と比較しての感想。今朝までいたあの村は今でも牛や馬が歩いている。信号や横断歩道なども指折り数えるほどしかなく、夜になれば注意と一時停止を促すよう赤と黄色しか点滅しなくなる。それに、近年では野犬こそ減ったが家の裏手で狐や狸、さらには熊を見ることが珍しくはないほどの田舎だった。

しばらく呆然としていたところで、彼は荷物が先に運ばれているはずの引越先住所を書いたメモを見る。

「えっと、蒼空市光陽町の……地図があるな」

駅の売店に並んでいたのはどれも都道府県単位だったため、彼は

荷物を手に取ると近くの書店を探し、商店街のほうへ足を向けることにした。

その後、早速目的の地図を購入し、通りの隅で邪魔にならないように広げた彼は駅からここまで今まで通ってきた道などと照らし合わせ、頭の中に地図を叩きこんでいく。引越し先のおおよその目測から始まり、万が一もないだろうが迷った際の目印となるような施設や幹線道路、これから通うことになる学校と、世話になるであろう商店街のルートを次々と確定させていく。

あらゆることを順序立てて考えることは彼の十八番でもあった。その根幹となる公式や理論は実家の蔵書からいくらでも吸収できたし、田舎という環境下で科学的には完全予測不能とされる自然からもその知識を授かってきた。おかげで方向感覚は鋭敏に鍛えられたようで、一度通った道はすぐに覚え、逆から通っても迷わずに行けるほどになっていた。

しかし、

「しまった。もうこんな時間か」

地図は買ったものの安心してしまい、ついつい立ち寄った「SILKY」というゲーセンで思い切り遊んでしまっていた彼は、ふと見た時計の針に驚いた。午後四時過ぎ。もうそろそろ先に引越していった少女も下校し、帰ってくるであろう時間だ。

まだ到着していないと気づかれると、あの少女のことだから警察含め方々に電話しかねない。そうなると事態の收拾に面倒になると身をもって知っている彼は、シューティングホラーゲームで最後のボスをランキング一位確定のスコアで倒しきつたのを見届ける間もなく、すぐ寄り道してしまう自分の悪癖に一蹴りくれてやると引越し先の住所へと駆け出していった。

そして夕方。

「今日は怒られずに済んでよかったですね」

「そうだな。あの先生が忘れっぽくて助かった」

ようやくの放課後、帰路に就いた少年少女たちの会話は今朝の出来事の顛末だった。結局、今日提出だという解題のプリントは回収されず、少年他数名の忘れていた生徒は安堵の溜め息を漏らしたのだが、

「まったくだよ。うまく一人だけ怒られる方法があればよかったものの」

「どうやら神様はまだ味方でいてくれてるようだからな」

本当に、毎度嬉しくもない言葉を嫌味たっぷりなプレゼントしてくれる悪友に少年も多少の皮肉を込めて返した。とはいえ、実際にあの人が当の神様ではいつどう状況が転がっていくかわかったものではない不安もあるのだが。

「でも帰ったらすぐにやっておいってくださいね。いつ提出を求められるかわかりませんから」

「そうだな。そうしとくよ」

こういう方面ではすっかりネジが閉まっている楓の言葉を受け、少年は課題のプリント忘れないように予定に刻んでおく。普段忘れっぽい件の教師だが、突如何も思いつき出したりするため、今日提出を求められなかったから次の授業まで安泰だということでは決していない。

そして、

「だからこのとおり！ お願いするツス、リンちゃん」

「はあ、仕方ありませんね」

「それじゃ、未来は明るいつてことで早速フローラに……」

ご立腹だったネリネの機嫌を何とか和らげたシアも、次に提出を求められたときにはどうにかなっついていそうだった。ただ唯一、ラッキーゴーハッピーを体現する麻弓が、自身が何も後ろ盾を持っていないことを忘れ、いつもの寄り道先に足を向けようとしたときだった。

「だからやめてくださいっ！」

寄り道先のある商店街、木漏れ日通りから女の子の声が響いた。

「何だ？」

少年たちが視線を向けると、そこには明らかにガラの悪そうな男子学生三人とその三人に取り囲まれているオレンジ色の髪の少女が一人いた。その少女も、少年たちと同じ学校の制服を着ている。

「あ、あの娘は……」

「知ってるのかい？ 橘花ちゃんを」

「橘花ちゃん？」

「ああ。鳳仙橘花ちゃん。今年の新入生の中で一番可愛い娘だよ」

「そうなのか」

この悪友が学園の美女・美少女の詳しいのはもはや問いただす意味が見当たらなくなってきたのでスルーするとして、

「それで、どういった経緯で彼女を知っているんだい？」

「こないだスパーで見かけた……」

最後の四文字をつけないと、危うく悪友に笑顔で殴り殺されそうだったので、少年はそれ以上取り囲まれている少女に関して踏み込んでいないことを告げておく。

「ふ〜ん。まあ今だけは信じてあげるよ」

「一部納得していただけてないようだな」

「納得してしまえばそれは敗北宣言だからね」

何をどこからどうツッコめばいいのかわからない少年に、美女・美少女に命を懸ける悪友はただ笑って返すのみだった。

そんなことはさておき、確かに少年が見たときは解いていた髪を結わえているものの、遠目から見ても目立つかわい子であるのは確かだ。悲しいことに実際、そんな娘を狙ったしつこいナンパがあるのも確かなのだが。

「まあ、その話はあの三人を追い払ってからゆっくり煮詰めようじゃないか」

「ああそうだな」

話を煮詰めるかどうかはともかく、このままあの男子学生三人を放置するわけにもいかないことで同意した少年は鞆を少女たちに預

け、しつこいナンパを止めに悪友と二人で向かおうとした。

だがそのとき、

「あ、やっと思つた」

ふと背後から男の声が聞こえ、少年たちが振り返ると、少女よりやや灰色混じりのオレンジ色の髪の男性が三人の男子学生　　といふよりはナンパに遭っていた少女のほうへと駆け寄っていく。

「まったく、こんなところで時間食ってんじゃねえよ。橘花」

「ご、ごめんなさい。ナギ兄さん」

「謝らなくていいから。早く食材買って、帰って飯にしよう」

まるで散々遊び回ってきた子供を迎えるように男性が橘花の頭を軽く手のひらで叩くように撫でると、橘花は謝りつつも嬉しそうな表情を「ナギ兄さん」と呼ぶ男性に返した。

そして、二人は男子学生などいなかっただかのように踵を返そうとしたが、

「おい待てよテメエ」

「何だ横から割り込んできてよお」

「何してんのかわかってんのか？」

そうは問屋が卸さなかつた。目の前で狙っていた獲物がさらわれかけ、男子学生たちは後から来た男性に次々と因縁をつけてきた。

「ああ悪い。橘花が粗相をしたなら謝るが、とてもそうには見えなくてな」

「んだと？」

「他人のナンパまで口を出すつもりはないが、ここは人の往来の邪魔だ」

「うっせえ」

「それとも、この街じゃ嫌がってる娘を強引に口説くのが流行ってるのか？」

先程より明らかに空気の悪くなったその場に少年も足早に駆け寄り、諫めようとしたが、少年の心配などどこへやら男性は冷静にかついちいち男子学生の勘に障るような口調で正論を投げつけていっ

た。

「これはヤバいな。樹」

「ああ、そうだね」

こういった類の連中を何度か見たことがある少年とその悪友は、彼らがいかに正論に弱く、正論にすぐ暴力で噛みついてくるかを知っている。

「このつ、黙ってるやてめえ！」

「あつ！」

そして案の定、二人が懸念していたとおり、三人のうちの一人が拳を素早く男性に向けて放ったが、喧嘩慣れでもしているのか、その男子学生の拳は少年たちが思っていたよりも早く、モーションにかかる時間もほとんどなかった。

だが、

「じゃあ黙るとしようか。……お前がな」

「つてえつ！ 痛い痛い痛いっ！」

反応する暇もほとんどなかったはずの男子学生の拳を、驚くことに男性の左手はしっかりと掴み取っていた。そして口元に小さく薄ら寒い笑みを浮かべた男性は一瞬で殴り掛かってきた男子学生の腕を絡め取り、関節を極める。さらに無言かつ無表情で力を加えると、男子学生の悲鳴に紛れてその肘が軋む音が少年たちや立ち止まって傍観する野次馬の耳にも聞こえた。

「つて、てめえっ！」

友人の危機に別の男子学生が殴り掛かってきたが、男性は一瞬で絡めていた男子学生の肘に鈍い音を奏でさせ、素早く身体をひらりと回転させると無為無策で間合いに入ってきた男子学生の横顔に強烈な回し蹴りを叩きこんだ。

その蹴りの勢いは少年が思っていたより凄まじく、蹴り飛ばされた男子学生の口元からは歯の欠片が鮮血に混じって飛び散り、宙を舞った身体は傍観する野次馬の人垣まで吹き飛ばされていた。

「ぐあああああつ！」

「黙れつつつたのはそつちだろ」

難なく肘関節を外された痛みにも叫ぶ男子学生だったが、男性は容赦なくその顔面を靴底で意識ごと蹴飛ばした。

「おい、残り一人」

「ひ、ひいつ！」

一分そこらで男子学生二人の意識を飛ばした男性が、残る一人に声をかけると、その男子学生は意識を失くした友人二人を置いて走り去ってしまった。

「す、凄い」

「俺様たちの出番はなかったね」

野次馬たちもばらけていく中、啞然と一連の出来事を眺めていた少年とその悪友だったが、

「おい、お前ら」

「は、はい」

「何ですか？」

突如、あの男性から声をかけられた少年とその悪友は、今まさに眼前で繰り広げられた行為から、自らの命の危険を間近に感じながらも答えを返す。

「お前ら、橘花を助けようとしてくれたんだって？」

「えっ？」

「いや、コイツがそう言うから」

男性にこいつと示されたのはあの鳳仙橘花自身。まさか見られていたとは思わなかったため、気恥ずかしくなった少年含め二人は素直にそうですとしか返せなかったのだが、

「そっか。そいつはありがとな」

「い、いえ。俺たちは何も……な？」

「え？ あ、ああ。そうだね」

先程の表情とは違って変わって、少しだけ気さくな雰囲気を放ちながら少年とその悪友に謝礼を申し出てきた男性に、逆に二人は驚いてしまい、まともな返礼ができなかった。

すると、

「まあ、お前らみたいなのが後輩なら大丈夫か」

「えっ？」

「それじゃまた明日。今日は二人ともありがとうな」

小さくひとりごちた男性は、大きく頭を下げた橘花と一緒に踵を返し、木漏れ日通りをスーパーへと向かって歩いていった。

「……樹。今の聞いたか？」

「ああ。しつかりとね」

「どういう意味だ？」

「俺様にもこれは理解しかねるね」

遠巻きに様子をつかがっていた少女たちが歩み寄ってくるのも忘れ、少年は悪友に尋ね返すが、これには悪友も首を傾げるしかなかった。

「さあ今は一刻も早くフローラで気分転換するのですよ！」

「あ！ 麻弓ちゃん。待つてほしいッス！」

「は、走るのは勘弁していただきたいのですが」

「行きましようか稟くん」

「あ、ああ。そうだな」

そんな少年が我を取り戻したのは麻弓の鶴の一声。早々にダッシュで遠ざかる彼女の後ろ姿に、土見稟とその少年の友人たちは一路フローラを目指して歩を進めていった。

アルメニア。カフカス山脈中、北カフカス国境付近。

「つたく、まともなヤツなんていやしねえな。この腐った世界にはよー！」

燃え盛る廃墟と化した研究所の中、消毒用アルコールの入った一斗缶を蹴飛ばし、周囲には無数の設計書のような紙束と白衣を着た物言わぬ死体たちを散らかした少年は盛大に恨み節を吐き出した。

「仕方ないでしょう。あれからもう十年も経ってしまっているんですから」

少年が蹴飛ばした一斗缶からこぼれたアルコールを浴び、わずかながら火の手が増した廃墟の奥から、少女が一本のアンブルを指先で器用に回しながら姿を見せる。

「けどなアネキ。ヤツらが人界の技術に手を出したからこんなクズどもがイキがるんだよ。ヤツらさえこの世からいなくなればこんな『雑種』どもも生まれなかつたんだ！」

「それは私もわかっていきます。だから私たちがこうして手間暇かけてひとつひとつ潰しているんでしょう？ 人族も神族も魔族も関係なく、『あれ』に携わった人間を皆殺しにして回っているんでしょう？」

怒り心頭に発した双子の弟をなだめるように、また自分たちのなすべきことを確認させるように双子の姉は言葉を選んで紡いでいく。「わかっているよ。わかっているんだ……。けど、俺たち人間が痛みを伴わずに新たな命を創り出すのは烏澁がましいとは思わないのか？」

左手で頭を抱え、絞り出すように少年は自嘲を交えて呟く。確かに昔のお産は命懸けだったが、今や帝王切開や無痛分娩など母体や胎児にかかる負担を少しでも軽減させて守ろうとする技術も発達してきている。それでもなお、それとは別の方向で命を『創造』しようとする人々がいる。とある事情から少年はそれがとても憎く、許せなかつた。

「私はむしろ滑稽だと思っていますよ。異性と手を繋いだりキスしたりしただけで、夜中コウノトリが赤ちゃんを運んでくるほうがよっぽどまともに見えるくらいに」

皮肉まじりに少女が持ち上げたのはまだ現代より貞操観念が厳しかった日本で信じられていた俗説だったが、

「ああ、まったくだな」

別に異性に処女性など求めてはいない少年はただ一言、そう呟くと頭を抱えていた左手をバイクのキーが入ったポケットに突っ込んだ。

「行こうぜアネキ。『あの人』から連絡があつて、フランスに戻れ
つてさ」

「フランス？ これはまたル・スリズイエが飲めますね」

右手でスマートフォンでGPSを作動させながら、楽しげな雰囲気
を醸し出した少女は運転する少年の腰に左手を回す。少女のはし
やぎぶりを見て、少年が差し込んだキーを回すと待ちくたびれたと
ばかりにエンジンは一度大きな咆哮を上げた。

「よほどあのリキュールが気に入ったみたいだな」

「ええ。だって死体の味でしょう？」

「おいおい」

毎年春、二人の生まれた国で綺麗な花を咲かせる木の下には死体
が埋まっているというのも実在する俗説だ。とはいえ、これは言
い出した人物がはつきりわかっている。

「けど酔っぱらいの介抱は有料だ」

「あん。お姉ちゃんの二つある桃やサクランボ、垂れる甘露も味わ
つていいんですよ？」

「経血まじりの蜜なんかいらねえ」

「あら、覚えてましたか。昨日から生理始まったこと」

舌舐めずりまでして艶めかしい冗談を吐いた双子の姉に双子の弟
が冷静な一言を突き返すと、姉はいつもの口調に戻る。

「ああ。何年姉弟一緒にいると思ってたんだ？」

生理周期も把握してしまったくらいもはや姉とは精神的にも肉
体的にも離れられなくなっているだろうが、少年には不安も恐怖もな
い。神や悪魔であろうと目の前に立ちはだかる障害はすべて壊して
いくと自身に言い聞かせ、最強の相棒である姉と最高の相棒である
大型バイクとともに、少年は未だ渦巻くオレンジの炎を孕みながら
黒煙を吐き出し続ける研究所「だった」建物を後にした。

Blackout (後書き)

長すぎるプロローグでしたが、いかがでしたでしょうか？

誤字脱字などの指摘・理性的な批判・感想などお待ちしております。

以下、説明要な単語などを挙げていきます。

・Cunning Strain ? : 「カンニングストレイン・フォー」と読む、PCや家電に強いその少女が独自開発したPC用プログラムで、「十年前の悲劇」を再現するためらしいがその詳細は現段階において不明。なお「Cunning Strain」とは日本語で「狡猾な種族」を意味し、「？」なのはそのプログラムが三回のバージョンアップを経て完成したためであって、決して「第四の種族」を意味しているわけではない・・・と思う。

・ベレッタ09-11タイプA : ベレッタはイタリアのピエトロ・ベレッタ社が製造・販売する自動拳銃だが、当然09-11タイプAというのは実在しない。形状はM92Fとほぼ同じだが、作中に触れたように殺傷能力は一般の自動拳銃の比ではなく、ベレッタで使用できない特殊な弾丸も使用できるように一部が改造・変更されている。しかし、表向きにはまだ流通しておらず、その存在さえ知られていない。

ちなみに「09-11」はアメリカ(『America』)の同時多発テロが発生した日。

・お魚の切り身にバターに小麦粉に・・・・悩殺用の下着 : 最初の三つの買い物から想像すると夕食はムニエルになるのだろうが、最後のひとはベッドルームに行かないと作者にも意図がわからない

い。

余談だが経験上、黒や赤は似合っても紫の下着が似合う女性はなかなかいないと思っている。

・水木橙次：みずきとうじ。矢薙と呼ばれていた少年の悪友。子供が少ないその村に置いては数少ない同い年の友人で、二人揃って近所でも有名な悪ガキだった。友情に厚くお調子者な性格。

・八百蓼林檎：やおたでりんご。矢薙と橙次の姉的存在の、おっとりした年上美人。ただ、描写があつたように、夜伽の場では強烈な淫乱さを覗かせる。

・ル・スリズイエ：le cerisier。日本語で「桜」を意味するとおりの、フランス生まれの甘口の桜リキュール。濃厚な桜の香りと口に残らず引いていく甘味、透明に限りなく近い薄桃色の特徴。アルコール度数は18度で値段も手頃。ただし実在はしない。名前の出ていない少女が一口で好きになった味らしく、放っておけば水のように飲んで、少年の手がかかるだけになる。

Phase 1: It's a New Day

深夜。光陽町、木漏れ日通り。

ほぼすべてのシャッターが閉まり、すっかり人気もなくなった商店街に二人の男女の声だけが響いていた。

「なかなか面白いオーブニングアクトだったじゃないか。感心した」「そう仰っていただけなら光栄です」

月を背に喋る男性の前、女性が一人、片膝をついている。

「しかし、あの『崩壊』から十年持たずに終わりが来るか」

「思いがけない進歩をしましたからね 人族『だけ』は」

「これもすべてあの功罪だな」

「そうですね」

悲しそうに遠くを見つめる男性に、女性はただ静かに従うのみ。

だが二人の間にあるのは主従関係だけではなく、男性の女性への深い信頼と女性から男性への揺るがない畏敬の念だ。

「支度を整えよう。いずれ自滅する世界に用など無い」

「はい。畏まりました」

感傷に浸りきったのか、小さく頭を振った男性の言葉に、女性はまたしても静かに従う。

そして、天心に上った月に冷たく寂しく照らされる深夜の街を見下ろしていた男性と女性はそこから一瞬で姿を消した。

早朝。とあるマンションの一室。

「おはようございますナギ兄さん。起きてくだ」

「ああ、おはよ。橘花」

あとはご飯を装うだけにまで朝食の支度が整い、調理のために縛っていた髪を解き、鳳仙橘花は挨拶をしながら同居人が眠っている部屋のドアを開けたのだが、橘花が起こそうとしていた同居人である彼、鈴城矢薙はとうに覚醒しており、眩しい朝日が差し込む窓の

外を眺めていた。

「な、何で起きてるんですか！ ナギ兄さん」

「早起きしちや悪いかよ。つか、村にいたときからお前より早起きだっただろうが」

「うぐ、う」

「あと橘花。次からはノックして入ってこい。俺が寝てようと、だ」
橘花の反論の芽を摘み取り、すれ違いざまに軽く橘花の頭を叩きながら矢薙は部屋を出ていった。

「で、今日からはナギ兄さんも同じ学校ですね」

既に制服姿に着替えている橘花は、上は半袖シャツに下はスウェット一枚という格好で朝食を口に運ぶ矢薙に声をかける。

「ん？ あ、そうだな」

日本時間の昨夜、カフカス地方で起きた謎の爆発事故は、アルメニア側の公式発表では軍事演習中のロシア軍の戦闘機の墜落だとアメリカの通信社が報じたことを伝えるテレビのニュースに半分意識を持っていかれていた矢薙は、適当かつ曖昧な相槌を返す。

「ナギ兄さんの新しい制服姿、楽しみです」

「散々写メ送らせて見てるだろ」

まだ矢薙が無駄が出る前から、制服姿を見たいと駄々をこねる橘花に根負けして、矢薙は春先から今まで橘花のケータイに十数枚ほどの写メを送っていた。当初は自分で自分を撮影するだけだったのだが、いつの間にか橘花のリクエストに応える形で橘花の両親や橙次に林檎まで駆り出していた。ただ、誰もがみな律儀にリクエストに応える矢薙を見て口元を嫌に緩ませていたのが特徴的だった。

一方、注意をテレビに向けると、今回の爆発事故について、どこぞの有名大学の客員教授を兼任する専門家へのインタビューが始まっていた。そこでその専門家はこの事故を中東系の通信社は事故原因がロシア側ではなくアルメニア側にあるとも報じており、この食い違いによってカフカス地方に軍事的緊張が走るのではないかと危惧していた。

「この街に来てからは初めてです」

「そんなもんかねえ」

結局、光陽町に来てから初となる矢薙の制服姿に胸をときめかせている橘花には勝てず、矢薙はテレビから専門家の論調を垂れ流しにして、時折現れるこのような理解しがたい橘花の言動に首を傾げた。

「そんなもんなんですよ」

「ま、そういうことにしよう」

数年前、橘花の両親含む村人の誰もがおっぱいの神様が降臨したと驚き冗談まじりに認めた巨大な胸を張って威張るのかも矢薙にはわからないが、その話はさておき、着替える時間と登校時間を考えればそろそろタイムリミット。不要な情報を遮断するようにテレビを消し、矢薙は食べるスピードを上げた。

「うう、眠い……」

「昨日もいんなことがありましたからね」

朝の芙蓉家リビング、まだ寝惚け眼の稟の鼻を和の落ち着いた香りがくすぐり、まだ五感をシャットアウトさせようとする眠気を今度は幼なじみの声が覚醒させる。

「あ、ああ」

楓の言葉に、稟は昨日見た光景を思い出した。木漏れ日通りで出会った、新入生の鳳仙橘花と、彼女と親しそうだった兄と思われる男性。橘花からナギ兄さんと呼ばれた彼は相当喧嘩慣れているのだろうか、しつこいナンパ学生三人をあつという間に撃退した腕は確かなようだ。

だが、気にかかるのは去り際のあの一言。

「お前らみたいなのが後輩なら、か」

「えっ？ 稟くん？」

「ん？ あ、あの昨日会った男の人がそう言ってたんだよ」

意識が別に向いていたせいでのいつの間にか並んでいた朝食に稟が

箸をつけると、相変わらず稟の好みを的確に突いてくる楓の味つけが口の中に広がる。

「それに、『また明日』とも言ってたし」

「それは橘花ちゃんのことに関してじゃないでしょうか？」

「いや、俺もそれは考えたんだけど、だとしたら『先輩』にならないか？」

橘花は新入生で、対する稟や楓たちは二年生。後輩は間違いだ。それ自体は些細な違和感かもしれないが、稟はその男性に奇妙な感覚を抱いていた。お礼を言われたときに見た瞳が何も映していないからだと気づいたのは眠りに就く直前だったが、稟は同じような瞳を前に見たことがあった。

そう、あれは確か。

「それじゃ行きましようか。ナギ兄さん」

戸締りをしつかり確認した後、まだ固く着心地が悪い制服に違和感を覚えながらも矢薙はなぜか今にも小躍りしそうなほど嬉しそうな橘花と一緒に学校を目指す。

国立バーベナ学園。そこが祖父の遺言に従って今日から矢薙が通うことになった学校なのだが、まさか橘花も一緒にといい流れになったのは意外だった。遺言状によると、大人になる前にいろんな人を見ておけとのこと、十年前の『開門』から神族や魔族も多く通っているここを選んだらしいのだが、

「別に俺はどうでもいいってのに」

思わず呟いたその一言が、今の矢薙の心境を如実に語っていた。

閉鎖された空間の心地よさはその空間で生まれ育った人間にしかわからない。毒に塗れて育った少女が知らず知らずに触れた花を枯らすほどの毒を持ってしまっていたというのは人界の昔話にもある。ちなみに、矢薙自身は『ラパチー二の娘』より『毒の園』のほうが好みだ。

「もう。そんなこと言っていると、お友達の一人もできませんよ？」

「この歳で友達百人できるかななんて思わねえよ」

誰にも聞こえないように呟いたはずの矢薙の愚痴を聞き取り、たしなめる橘花に皮肉で言い返す。小学校入学時には誰もが持っている愛くるしいまでの無邪気さなど矢薙は微塵も知らない。その頃はまだ、周囲にあるものは何でも疑って、距離を置いて、ただただ自分の身を誰よりも安全なところに置いておくことだけに執着していた。

「第一、俺はお前のお守りで精一杯だつての」

「あ、私を子ども扱いしないでください」

去年冬、祖父の遺言を聞いた矢薙はそれに従ってバーベナ学園への編入を決めたのだが、さすがに小さな村だけあってその情報は一時間後に橘花の両親の耳に入り、橘花も進学先を村から通える範囲にあった学校からバーベナに変更した。

矢薙もそのときは冗談だと思つたが、昔から有言実行をモットーに生きてきた橘花は本当にバーベナに合格してしまい　結果、バーベナ学園が村から通える範囲にないために橘花の両親も「矢薙くんなら安心」とばかりに、一足遅れて編入することが決まっていた矢薙に命より大切なはずの一人娘を預けた。当然年ごとの男女が一つ屋根の下という妖しくも危ないシチュエーションを回避しようと矢薙も反論してみせたが、家事労働や金銭的な理由、さらには安全面で周囲を取り囲まれてしまったためにこうして一緒に暮らす裁決が下されていた。

「それにですね、私を子ども扱いするならナギ兄さんだつて同じですよ」

そう言うつと橘花は人差し指を立て、矢薙の至らない点を挙げていく。

「まずですね、すぐ寄り道するでしょう。それに、誰に対しても遠慮しませんし、ろくに敬語も使いませんし、何より女心というものを理解できてません」

「知るか、んなもん」

「ほらすぐそうやって頭から我関せずの素振りをするのも悪いところですよ」

いつの間に短所探しになっていたのかわからないが、さすがに橙次や林檎と同じくらい長い付き合いになる橘花は矢薙の長所も短所も掌握していた。だが矢薙としては、まだおぼつかない足取りながらも橘花と一緒に遊ぼうと必死に後を追いかけてきた頃が遠く思えるほど、すっかり生意気になってしまったただけだ。

「勝手に言ってる。置いてくからな」

「あ！ ちよつとナギ兄さんっ！」

周囲の人たちに最低限の気遣いはしているつもりだが、橘花がそれを女心に限定した理由もわからず、すたすたと先を歩く矢薙の背中に、橘花の声と駆け寄ってくる足音が聞こえた。

その後、橘花の道案内を聞くまでもなく、同じ制服姿の男女の流れに身を任せていると矢薙は学校に到着した。

「じゃあナギ兄さん。職員室はその先ですから」

「ああ。それじゃ橘花。ホームルーム終わったらメールな」

「はい。それではまた」

一緒に帰ることも兼ねた約束をして、矢薙は橘花と別れて職員室に向かった。道すがら、壁や天井、床、教室のプレートなどを見ていく。さすが開門後に建てられただけあってハードの新しさが先に目立ったが、なかなかソフト面にもこだわりがあるように思える。

他の学校ではなかなかお目にかかれない魔法学や錬金術に関する授業があるせいかな、それに対応する細やかな対策や教材などもあるのだろう。

「ま、真面目にやる気なんてさらさら無いけどな」

矢薙は魔法なんて信じていない。存在そのものよりもその効果を、もし魔法が人々の発展と幸福を導くものであるとしたら、きっと自分もつとまともな道を歩めている。きっとそれこそ、こんな学校に通わなくてもいいくらいの人生は歩いていると矢薙は確信を持っていた。

鼻で笑い飛ばす矢薙に、ようやく職員室のプレートが見えてきた。生きていくのに必要な術は学校だけでは教えてくれない。鍵を失くしたときに玄関を開ける方法や女性でも暴漢を打ち負かす方法、野生の獣の撃退方法に顔色から人の心を把握する術はおそらくこの学校でも教えてはくれないはずだ。

すると、

「失礼しました！」

「どわっ!？」

突如ドアの空く音に続き、職員室のプレートを確認して顔を上げていた矢薙の死角から何かが激しくぶつかってきた。

「つてえ………」

「あいたたた……。頭ぶつけたあ」

何とか右手一本で後頭部が廊下に直撃するのを回避した矢薙だが、逆に跳ね飛ばされたのか、ぶつかってきた側の少女が職員室のドアにぶつけた後頭部を押さえていた。

「お、おい。いい加減足下ろせ」

ふと視界に見えてはいけないものを見てしまった矢薙は、あえてわざと視線をそらして少女に声をかけた。ぶつけた頭の痛みを押さえるのはわかるが、両手でそれをやってしまっただけでは、豪快にめくれてしまっている短いスカートからそこに隠すべき淡い桃色の布地がばっちり見えてしまう。

「え？ あっ！」

紫色のセミロングほどの長さの髪の少女は、ようやく自分の体勢に気づいたようで、目にも止まらぬ速さでスカートの裾を直しつつ押さえた。器用な娘だと思いつつも、矢薙は何事もなかったように立ち上がると、その少女に手を差し伸べた。

「ほら、立てるか？」

「は、はい」

「悪かったな。少しよそ見してた」

「わ、私もその……前、見てませんでしたから」

さすがにスカートの中を見られてしまった恥ずかしさからか、少女は消え入りそうな声だったが、

「気にするな。俺はお前ら神族に一片の興味も無い」

「えっ!？」

矢薙は少女の耳元でそう呟くと、驚きに目を見開く少女をそのままにして職員室に入ってしまった。

「どうして、一目で私が神族だと……?」

その問いに答えられるはずの人物は、既に少女をその視界に捉えていなかった。

ホームルームを控え、職員室に指折り数えるほどしか姿が見えない教師の一人に矢薙は声をかけることにする。

「すみません。俺、今日からここに編入することになった鈴城ですけど」

「ん? ああ、お前が例の編入生か」

例の、などつけられるほど有名になったつもりもないのだが、心当たりはある。

「はあ、まあそうです」

「そうか。あ! 柎先生」

適当な相槌を返してみると、矢薙が声をかけたスーツ姿の女教師は状況を察してくれたようで、別の男性教師に声をかけた。

「この子が例の編入生です」

「ああ、そうでしたか。わざわざすみませんね。紅薔薇先生」

「いえいえ」

矢薙は自分を案内してくれた女性についていった先で、これから一年間、担任となる男性教師と顔を合わせた。

「それで、君が鈴城くん?」

「仮の名は例の編入生です」

「お、おいお前、その態度はないだろう?」

「ははっ。そこまでその言い方が気になった?」

柘と呼ばれる担任の問いに、矢薙は眉ひとつ動かさずに皮肉を込めて返した。まだ残っていたスーツ姿の女教師が厳しい態度で突っかかるうとしたが、柘は逆に笑って受け流した。

「いえ。どうせ編入試験で俺が書いた小論文がおかしかったからでしょう?」

「そんなことは無いよ。確かに君のは見せてもらったけど、君の価値観は本当に独特だ」

「でしょうね。俺は三世界の風潮とはまるっきり逆の人間ですから」
「だからお前」

「いいんですよ紅薔薇先生。彼の思考はひとつの理論として成立しているんです」

驚いたことに、柘と呼ばれるこの男性教師は三世界・三種族の共存を不可能だと明言する矢薙の思考を真っ向から受け止め、認めた。

「ですが柘先生」

「私たちは生徒を教え導く立場ですが、その思想や信条までは踏み込めませんから」

口元に笑みさえ浮かべる柘にあの女教師はまだ何かを言いたげだったが、矢薙を一瞥すると、自分の机に戻っていつてしまった。一瞬だけ彼女と視線がぶつかった気もするが、矢薙は構わず職員室の中に視線を泳がせていた。

実を言えば、この柘という教師よりも先程の女教師ほど手玉にするのが簡単だ。何もせずとも押しつけて、こちらが押し返せば同じく押し返し、引けばさらに押してくる。そんな単純明快な行動をしてくれる人を矢薙は皮肉つきの親愛を込めて阿呆と呼んでいたりするのだが、今の女教師はまさにそれだ。

せっかくこの世には駆け引きという言葉があるのだから、もっと頭を使わないと世俗の格好の餌食になるだけだ。食うか食われるかしか選べないなら食うほうの立場にいたいと思うのは一人二人に限ったことではない。

「落ち着きがないですね。緊張ですか?」

「え？ まあ、そんなところですよ」

「とてもそういう人間には見えませんけど？」

「人は見た目だけじゃありませんよ。この世界には笑顔で他人や神様を罵倒して、自爆してみせる奴だっています」

厄介だな。矢薙は心中でそう吐き捨てると、その吐き捨てた言葉とは違う言葉を初対面の担任教師に向かってぶつけた。熱血系の教師なら矢薙の態度や台詞に堪忍袋の緒を切り、今すぐにも頬に張り手でも飛ばしてきそうだったが、生憎目の前の担任教師にそんな素振りはない。

「ふふつ。そういう君の『感覚』が独特だと言ってるんですよ、僕はね」

そう小さく笑う担任は、プリントを挟み付箋を貼ったノート版の予定表と出席簿を手に席を立つと、ついてくるようにと促す。今までの会話で軽いジャブのように探りを何度も入れてきた担任教師の背に強めの怪訝な視線を突き刺すと、矢薙はそれ以上何も言わずに黙ってその後を歩いていくことにした。

授業としては教えてくれなさそうだが、顔色や仕草から相手の心情を読み取る術を心得ている人間はいるようだ。担任の後ろ姿を見ながら、この学園に対しての印象を改める必要があるとそうだと考える矢薙の口元はなぜか歪に笑っていた。

そして、担任の後に続いて階段を上ろうとすると、上の階から大勢の足音が地鳴りのように響いてきた。

「まったく、どうしろっていうんだよ！」

地鳴りに先んじて、愚痴を吐きながら階段を駆け下りてきたのは一人の少年。一目見た感じで矢薙は、その彼が昨日の木漏れ日通りで出会った少年に酷似していたことを思い出したが、

「待てやあ土見っ！」

「貴様は今日こそ殺す！」

「いい加減に年貢を納めろ！」

少年の後から現れた地鳴りの原因と思われる、軽く数十人を数える男子生徒の集団の放つ羨望と嫉妬と殺気に矢薙は思わず身を引いてしまっていた。

「な、何ですかあれは？」

「ああ。この学園の名物だよ」

「名物？」

まるであれが当然だとばかりに、何事もなく階段を上り始める担任の軽い返事に、矢薙は思わずもう一度尋ねる。第三者が見ればあれは間違いなく実力行使を用いたいじめだ。

「さつき君が話しかけた女性教師がいただろう？ 彼は彼女のクラ

スの生徒で、名前は土見稟。この学園の二年生だよ」

「はあ。で、そいつはいつたい何をやらかしたんですか？」

「やらかしたというよりは、やらかされた、といった具合かな」

「あいつも被害者つてことですか？」

先程見た少年を追いかけている集団の殺気の中に羨望と嫉妬が混じっていることと何か関係があるのだろうかと矢薙が考えていると、

「はは。被害者というよりは代償を払ってるだけじゃないかな？」

「代償？ 何のですか？」

「ハーレムの」

「はあ？」

振り返り、にんまりと笑ってみせる担任の吐いた言葉に、矢薙は早速脳内辞書で「ハーレム」という単語を引いてみるが、第一に浮かんだのはイスラム教の「聖域」で、次に生物学による繁殖期に現れる「一雄多雌の群れ」だった。

時節は六月の頭、春も終わるだろうという時期にまだサカリを迎えた生徒がこの学校にいるのかと、矢薙は自分が村で夜ごと繰り返していた夜伽という建前の乱交も忘れて頭を抱えた。とはいえ、その一方でそもそもハーレムとは誰でも自由気ままに作れるものではなく、ハーレムの主はそこにいる女性を全員幸福にしないと処刑されるという蘊蓄も頭の片隅に入っていた。

そして出た結論はもちろん あんな奴がハーレムなんて作れるわけがない、だが。

「はは。まあ、君は無関係そうだから安心したよ」

「だといいですけどね」

口の片端を引きつらせ、矢薙は会話を終わらせる。昨日、彼と非常によく似た少年と木漏れ日通りで会いましたとはさすがに口が裂けても言えそうにない会話の流れだった。

第一、追いかける側にも追いかける側にもだが、そもそもそんな人間と関わり合いたいと思う人間はよほど精神構造が奇特な方だけだ。矢薙はその土見稟という少年が昨日、橘花を助けてくれようとした少年の一人でないことを存在すら信じていない神様に願ってみた。

もつとも、そんな願いはこの後半日も経たないうちに呆気なく破棄されてしまうことをこのときの矢薙はまだ知らずにいた。

「それじゃあ鈴城くん。合図するまでちよつと待つててね」

校舎三階に上がり、ざわつく教室の前で待たされると、先に担任教師が教室に入っていく。静まるように号令がかかっている間、矢薙はクラスのプレートを見上げた。「3-B」。その向こうには「3-C」、「3-D」と書かれたプレートも見える。

想定範囲内のつもりだったが、やはりクラスの数もあの村とは大違いだ。そもそも矢薙が義務教育を受けていた頃は全校生徒が十人前後で、小学一年生が中学三年生と同じ教室で勉強している光景も見ている。

「……ん？」

ふと誰かに見られていた気がして、矢薙は視線を下げる。だが廊下には矢薙以外の生徒の姿はなく、他のクラスの担任たちもみな教室に引っ込んでいた。

「それじゃ、入ってきて」

これが合図なのだろう。矢薙は小さく息を吐くと教室の前方の扉に手をかけた。新たなクラスメートに姿を見せると、おお、と小さ

く声上がり、同時にひそひそと内緒話が始まる。歓迎でも拒絶でもない、この微妙な空気が矢薙は苦手だった。歓迎されないのならいつそ拒絶してほしい。それこそ無関心でいてくれたら手放して褒め称えたいほど最高だった。矢薙はこの土地にも街にも学校にも愛着すらないのだから。

「それじゃ鈴城くん。挨拶をどうぞ」

担任に教壇から一歩下がられ、クラスメートたちの視線が一斉に集まる中、矢薙は緊張の欠片も見せずに、手近にあった白いチョークを手に取ると黒板に名前を書いた。

「鈴城矢薙です。この学校にはとある事情で今日から通うことになりました。よろしくお願いします」

唇をあまり動かさず、矢薙は端的にそう告げると小さく頭を下げた。

「そ、それじゃあ鈴城君の席は……どこだっけか」

あまりにヤマモオチもない矢薙の自己紹介の挨拶にしんと静まり返る教室に、何とかこの沈黙をフォローしようとする担任の音が空しく響いた。

「先生。そこじゃないんですか？」

「あ、ああ。そこが空いてたね。うん、そこだね」

矢薙が指差したのはこちらから見て緑のショートカットの少女の左隣。慌てて肯定に走る担任を見て、この担任は果たして大丈夫かと不安に思ってしまった矢薙はこれ以上の無駄な言葉は何も喋らないようその空席に向かおうとしたが、

「それじゃあ今日の日は……あ、ちょうど時雨さんだったね。よかったよかった」

「はい？ よかったってどういうことですか？」

突如、立ち位置的に矢薙を間に挟むように、担任と席を立ったあの緑のショートカットの少女の会話が始まった。

「まあ、これも何かの縁だと思って、鈴城くんは放課後、学校案内してちょうだい」

「え？ えっ？ 朝来て即行でボクに『放課後資料室の整理手伝ってね』って言ったの先生じゃないんですか？」

「ああ。それは学校案内終わってからでいいよ」

「いえいえいえ。学校案内はまだ許容範囲内ですけど、資料室をあの惨状にしたのは先生ですよね？」

「でも学校案内なんて面倒でしょ？ 校舎の見取り図見せてはい終わり、で切り上げちゃえばいいじゃない」

「それが転校生の前で、しかも教師が言う言葉ですか！？」

「でも面倒でしょ？」

「それは認め……たところでボクにどうしろっていうんですか？」

面倒なのは認めているのかよ、と矢薙は内心でツツコミを入れておく。とはいえ、矢薙も彼女と同じ立場だったら必ず一にも二にもまず拒否している。

「時雨さん頑張ってる」

「無茶です！」

「……なあ君、俺はいい加減席に座っていいのか？」

「え？ ど、どうでしょう？」

正論を吐いているのは緑髪の少女のほうだと思いつつも、担任のまくしたて方も少女の上をいつている。これは早々に終わらないだろうと思った矢薙は手近にいた金髪の神族の少女に尋ねてみたが、その少女は頬に手を当てて首を傾げてしまった。

この無益な言い合いは生徒と教師の距離が近いがゆえに起こる軽い口論だということと頭を切り替えると、矢薙は危うく出そうになった舌打ちを心の中で済ませ、未だ言い合いを続ける隣席の少女と担任を尻目に席に座って一人でさっさと授業の準備を始めることにした。

この一件で矢薙はすぐにクラスメートから恐ろしいほど肝の据わった奴だと認識されたのだが、それはまた別の話。

そして昼。

放課後の仕事を軽減しようという腹積もりなのか、今日の日直かつ隣席になったクラスメートの少女から簡単な案内を受けながら矢薙は屋上へと向かっていた。

「それで、この先の屋上でボクたちはお昼ご飯を食べてるんだけどね」

「ああ、そ……うなのか」

そんなことはどうでもいい、と思わず言いかけたのをごまかして矢薙は出がけに橘花が押しつけるように渡してきた弁当包みを手に少女の後をついていく。

「それでまあ、ついでと言っちゃなんだけど、ボクの友達とかも紹介したいし」

「ふうん。それはありがたいな」

階段を上りながら振り返ったクラスメートの少女を矢薙は意識して視線をそらし、ありきたりな社交辞令を返す。視線を上げると朝に引き続き見せてはいけないものが見えてしまったためだ。あの村で散々淫靡な饗宴に参加してきた矢薙からすれば今さら異性のパンチラのひとつやふたつ何の興味も面白味もないのだが、さすがに今後のために余計な誤解を生むような行為は避けておきたいのが本音だった。

「今から紹介するのはみんな後輩だけど、みんな優しいから
「あ……」

後輩という言葉で矢薙は思い出した。橘花だ。思えば今朝、弁当を押しつけられた際に昼は一緒に食べようと約束させられていた。

「どしたの？」

「悪い。連れのことすっかり忘れてた」

「友達？ 約束してたの？」

「まあな。そいつ、知り合いの人の娘で、ここに進学してきたんだよ」

ケータイを取り出し、矢薙は軽く今の流れを簡素に書いたメールを打ちながら答える。

「ふうん。それじゃ一緒に誘って食べない？」

「そつちが構わないなら」

「大丈夫、大丈夫。むしろ大歓迎だつて」

軽い返事だつたが、少女の反応を見る限り、少女の友達というのは相当初対面の人も打ち解けられそうない人たちのような気がしてきた。そして、メールの文面を書き換えて橘花にその話を振ると、二つ返事で『先生からの用事を済ませたら私もすぐに屋上に行きます』という文面が送り返されてきた。

「連れも屋上来るつてさ」

「そつか。なら先に行つて待つてあげないとね」

「わざわざ悪いな。面倒臭いだるうに」

笑顔を浮かべた後、再び先立つて階段を上つていく少女の背に矢薙が軽い感謝を口にする、

「ううん、別に」

「え？ でも」

「あ、そうなるともう他人なわけじゃないだけだし？ 親しみも込めて名前で呼んでくれてもいいよ？」

嫌味や皮肉の一切混じっていないそつけない返事を矢薙が珍しく思っていると、逆に人差し指を立てるその少女から提案をされた。

「つていうと、俺が、君を、名前で？」

「うん」

戸惑いがちに確認を求める矢薙の問いかけに大きく頷いてみせると、屋上に続く鉄製のドアに手をかけ、ゆっくりと開けていく。

「あ、そういえば、まだちゃんと自己紹介してなかったよね」

ドアの隙間から差し込む梅雨を間近に控えた日差しが眩しい。眩しく感じるものはそれ以外にもある気がするが、思わず目を細める矢薙に隣席になった少女は笑つて自分の名前を名乗った。

「ボクの名前は時雨亜沙。よろしくね、ナギちゃん」

Phase 1: It's a New Day (後書き)

特にきつい表現もない今話、軽すぎましたね。反省します。
指摘・感想などお待ちしています。

以下、初出の単語群の説明です。

・とあるマンション：名称は不明（登場未定）。三階に鈴城矢薙と鳳仙橘花が二人で暮らす一室がある。線路を挟んでバーベナ学園とは反対側にあり、立地や間取りなどはいいものの、通学にはそれなりの時間がかかる。なお、地理上そこから一番近いのは時雨家になっている。

・『ラパチーニの娘』：『怪奇小説傑作集3』（創元推理文庫）に収録されているアメリカの小説家、ナサニエル・ホーソーンの小説短編作品。植物学者の父親の手によって珍しい毒草の中で育てられ、吐く息は虫を殺し、触れた花を枯らすほどの毒を持つ体質となってしまう娘・ベアトリーチエと貴族の青年との恋愛を描いた物語。

・『毒の園』：ロシアの小説家、フョードル・ソログープの文学短編作品。『書物の王国5 植物』（国書刊行会）に収録されている。植物学者の父、毒をの持つ体質の娘と青年との恋愛など、前述の『ラパチーニの娘』との共通点はあるが、前者の結末がベアトリーチエだけの死であるのに対し、こちらは青年も娘も愛を貫いて死んでしまう。

・小論文：矢薙が編入試験時に書いたもの。まるで出題される問いを事前に知っていたかのように、文献引用や科学的実証などがきつ

ちりされていたために教職員が「あの編入生」と噂するようになった。だが矢雑自身、今まで読んできた書物のほとんどを自己流に要約し、記憶しているというのはまた別の話。

Phase 2: Hello? (前書き)

活動報告を初めてアップしました。更新ペースなど書いています。

誤字・脱字などの指摘、感想などお待ちしております。

phase 2 : Hello ?

「あ、そういえば、まだちゃんと自己紹介してなかったよね」
そう言いながら、少女は笑いながら屋上に続くドアを開ける。

あのととき、矢薙としてはちゃんとこの少女含むクラスメートに対して自己紹介をしたつもりだったのが、その後すぐに勃発したこの少女と担任の言い合いにホームルームそのものさえうやむやにされ、一時間目の授業開始を告げるチャイムに押し流されて消えてしまった。

「ボクの名前は時雨亜沙。よろしくね、ナギちゃん」

「ん。ああ」

そして、ドアの隙間から溢れ出す眩しい日差しを背にする、ここまで案内してくれた彼女の名前を今さらになつて矢薙は覚えた。

「へえ、想像以上に広いな」

矢薙が屋上に踏み出すと、天気为上機嫌なおかげか、相当数の生徒たちが数名のグループで輪を作って昼食を摂っていた。

やはり「村」と「市」の規模の違いは俯瞰で見えないことにはすっかりわからないということか、ふとフェンス越しに見た街並みが昨日少しだけ歩いた街とはまるで違うものに見えるほど大きい。
すると、

「あ………」

「あ！」

「えっ？」

屋上の一角から、不意に驚きや啞然とした数人の声が矢薙の耳に入ってきた。

「へえ、それじゃあまるつきり初対面というわけでもないんだ」

「一言二言交わしただけ、だよな？」

全員と軽い自己紹介を終えたところで、本気でこの世に神様はい

ないということと、D328のOp・1は本当に超自然的なものに過ぎなかったのだと確信した矢薙は、亜沙から振られた話を実は会うのは二度目という少年に話を丸投げした。

「ええ。まあそうですね」

矢薙も（悪い方向での）噂でしか聞いたことのなかった少年・稟はしっかりと言葉を返す。だがそんな稟と少女たちのやり取りを見ていると、本当に珍しい人間の集まりだと感じた。誰もが現状を満足とも不満とも思っていないようで、互いに互いの腹を探ることなく素直にぶつかり合っている。その内側に、脆く壊れやすいものを抱えながら。

「でもそれなら最初に言ってくればよかったのに」

「あのときはこの学園の生徒としかわからなかったしな」

「でもさ、そのときにシアちゃんたちも一緒にいたんじゃないの？」

「いた……のか？」

今さらに見て確かに一緒にいる娘たちはかわいいと思うが、彼女たちとは本当に初対面だと思っていた矢薙は再度稟に話を丸投げするが、

「いましたよ」

「え？ いたの？」

あの場面では橘花のことしか目に入らなかった矢薙は、もはやそれ以外の人間が眼中になかった。到着前に橘花を助けようと動き出していた稟と樹の存在を知ったのも、橘花が後から言ってくれたからだ。

「ヒドいツス、矢薙先輩」

「さりげなく無視されてたんですね、私たち」

「いや、お前らとは一言も喋ってないし」

とはいえ、なぜかこちらが謝りたくなる雰囲気になってしまったのはなぜだろうかと思いつながら、矢薙は先程からデジカメ片手にいつの間にか稟の背後に立っている少女に視線を移す。初めて見たヘテロクロミアに思わず見入ってしまいそうだったが、ここは肝心の

稟が背後の気配に気づいていないことを悟った矢薙は、話を振ってみることにした。

「……………で、お前は誰？」

「よくぞ聞いてくれたのですよ！ 噂の先輩！！」

「おわっ！？ 麻弓いつの間に！？」

「い、いつの間になんですか？ 麻弓ちゃん」

「さっきからずっといたよ？ 稟ちゃん後ろに」

「そうなのですよ。いつ気づくかと思ったたらこれじゃあ」

派手に驚く稟と目を見開く楓に、亜沙は冷静に答え、あまりに稟の驚きぶりにデジカメを持った少女は小さく肩をすくめる。

「恐いだろ。というより、気づいていたなら教えてください。亜沙先輩も」

その一方で見事に知りたかった少女の名前を言ってくれた稟と楓に感謝しつつも、矢薙はそのやり取りを眺めていたが、

「さてさて、ちょっとお時間いいのですか？ 矢薙先輩」

「ああ。てか何で俺の名前を？」

「それはもうこの麻弓ちゃんの情報網を甘く見ないでほしいのですよ」

初対面だというのになぜ自分の名前が漏れているのか矢薙が麻弓に尋ねると、麻弓は橘花とは正反対の、見事なまでに余分な肉の無い胸をそらした。ここまで何もないと本当に抵抗がなさそうだなと口にするのは憚られるので、昼食の弁当と一緒に喉奥に押し込んでおく。

すると、矢薙のケータイがポケットの中で振動した。ディスプレイを見ると未読の着信メールのアイコンが浮かんでいた。橘花からだ。

「悪い。もうすぐ連れが来るから、話はそれからいいか？」

「私は全然構わないのですよ」

「連れ、ですか？」

「ああ」

稟の問いに矢薙が視線を屋上の出入り口に向けると、ちょうどドアが開いた。そして開いたドアからまず姿を見せたのは、二つの巨大な膨らみだった。

「えっ？」

「あ………」

「あつ。ナギ兄さん、そこでしたか」

あまりの光景に驚愕し、言葉を失った生徒数名と稟たちをよそに早々に矢薙を見つけた橘花は淡いピンク地の布に包まれた昼食の弁当と、その胸に突った二つのものを大きく上下に揺らして駆け足で稟たちのもとに向かってきた。

「え？ あれ？ 矢薙先輩。まさか連れっけてのは」

「ん。こいつだよ」

「初めまして、先輩たち。私、鳳仙橘花といいます。ナギ兄さんが皆さんにご迷惑をおかけしていると思いま　すがっ！？」

矢薙の左隣に腰を下ろして自己紹介を始めた橘花だが、

「挨拶だけでいいっての」

挨拶が癪に障る言い方だったか、広辞苑を化粧箱ごと床に叩きつけたような鈍い音とともに、橘花の頭頂部に矢薙の拳骨が落ちていた。

「ほう、わかりましたあ」

「今の、凄く痛そうなんだけど」

「大丈夫ですか？ 橘花さん」

派手な音を立てて拳骨の落ちた場所を押さえ、涙目を浮かべる橘花にシアとネリネが心配そうに尋ねるが、

「だ、大丈夫です。村にいた頃はもっと酷い目に遭ってますから」

「それ、逆に大丈夫じゃないだろう」

「しかも、もつとですか」

「いったい何されてきたの？ ナギちゃんに」

稟が心配し、楓に至っては「引いて」しまったほどの、ここに引っ越す前まで住んでいたという村で橘花が味わってきた酷い目の内

容を聞き出そうと、怪訝な目で亜沙が追及する。

「あ、いえ。全部が全部ナギさんがというわけではなくて、三メートルくらいの滝に落ちたりとか冬眠明けで空腹の熊に襲われたりとかです。さすがに山菜採りの最中に崖から十メートルくらい滑り落ちたときは死ぬかと思いましたけど」

「橘花はそういうところがそそっかしいからな」

「そ、壮絶すぎる人生ツス」

「よく生きていられたね」

生傷の絶えない実話を橘花がしたところで、矢薙はそそっかしいの一言で橘花の人生をまとめたが、シアとネリネの一言こそ橘花の人生縮図を表していた。シスター連れた右手に不思議な力を宿した少年がいたらきつと「不幸だあっ！」ときりなく叫び続けているに決まっている。

「で、ですけどそれと今の拳骨とは　ですよね？　麻弓ちゃ・・・ん？」

だが、それとこれはさすがに無関係だと正論を展開する仲間を求めた楓だったが、その視線の先では麻弓が凍りついていた。

「て。　どうして・・・どうしてこんなに不公平なのですかっ!？」

「な、何がだ麻弓っ!？」

突如、何の脈絡もなく不公平を謳いだした麻弓を臍たちは落ち着かせようとするが、

「な、何を食べたらそんなに大きくなるのですか!？」

「・・・はい？」

質問の矛先を向けられたのは橘花。だが何ひとつ状況を掴めていない当人はただ生返事をするだけだったが、

「そのありえない胸元なのですよっ!」

指差された先には、確かに百六センチほどの身長に対してはアンバランスに見えるほどたわわに実った橘花の乳房があった。

とはいえ涙まで浮かべて叫ぶことでもないだろうにと矢薙がふと

周囲を見渡すと、案の定、屋上にいる生徒全員がこちらを見ていた。矢薙が軽く睨むとすぐさま全員が昼食に戻っていったが、視線を戻すと、やけに生気が奪われた稟と、橘花の胸元に視線を送り続ける女性陣がいた。

「でもまあ、確かにこれはリンちゃんより」

「そんなまじまじと一ヶ所を見ないでください。シアちゃん」

「これだけあればさすがに稟ちゃんも落とせるんじゃない？ 楓」

「が、頑張ってみたいですけど、これだけは無理です」

「さあ教えるのですよ橘花ちゃん！」

まじまじとネリネと橘花の同じ箇所を交互に見比べるシアに、赤面しながらもたしなめるネリネ。冷やかし混じりの亜沙に、それを真に受け取る楓。稟の生気が奪われたのはきつとこの会話を聞いてしまったせいだと矢薙は即座に把握した一方、未だ追及の手を緩めない麻弓はずいっと橘花の前ににじり出るが、

「それは何と言いますか、愛の力ですね。もちろん私のナギさんへぶっ!？」

今度は橘花の後頭部に、その上半身ごと吹き飛ばしそうな勢いの矢薙の平手が入った。

「嘘つくな。こいつらが誤解するだろが」

「でもナギ兄さんもおっぱい好きでしょう」

「なるほど。矢薙先輩はおっぱい好き、と」

「話をすり替えるな橘花。あと麻弓ってつたな、メモ取るな」

殴られ、はたかれ、感情的に熱くなった橘花に矢薙は冷静に、さりげなく割り込んできた麻弓にも忠告をしながら言葉を返していく。「お母さんを超えたときなんて、笑って喜んでくれてたじゃないですか」

「あれは喜んでたんじゃない。もはや笑うしかなかったんだ」

「笑うしかないって それは言い過ぎじゃあ？」

「想像してみる。平日の早朝から『入るブラがなくなっただ』と泣きながらタツクル食らって、『どうしましょこれ!？』とか言われ

て眼前で御開帳されたんだ。しかも当時十四歳の少女にだ」

真顔で淡々と明かした矢薙の説明どおり、稟たちは脳内でその光景を再現してみた。が、

「……………うん。朝から派手なカミングアウトじゃないかな」

何を納得したのか、小さく首を縦に何度も振りながら亜沙は言葉を濁し、

「わ、笑うことすらできないツス」

シアは逆に首を横に小刻みに振りながら答え、

「わ、私からは何とも」

顔を真っ赤にしてネリネはノーコメントを貫く体勢を取った。

残る楓はこの手の話に耐性がなかったのかすっかり茹で上がってしまったっており、稟もなぜか頭を抱えて前かがみになっていた。

「あ、あれはどうしようもなかったんです！ 朝起きたらGすら入らなくなってたんですから」

「Gすら！？ そんな台詞一度でいいから言ってみたいのですよ！」

「っていうかそれじゃ今、橘花ちゃんって……………」

「Hカップですが、それがどうかしましたか？」

亜沙に聞かれてさらっとブラのカップを答えた橘花に、今度は質問者の亜沙含め、女性陣全員の顔が驚きと羞恥で顔が真っ赤に染まってしまった。その元凶となった娘はそんなことも意に介さず、弁当に箸を運んでいたが。

放課後。

「はい終わり、っと」

「ありがとね。ナギちゃん」

結局、学校案内と稟たちの紹介のお礼もかねて、矢薙も亜沙と一緒に資料室の整理 というよりは後片付けに近い惨状だったが

をしていた。一緒に帰ると待とうとした橘花には謝って納得させて先に帰らせた。

すると、

「いやいや、さすが三人でやると早いね」

「ほとんどボクとナギちゃんだけで片付けたはずですけど？」

「い、いや、私だってほら、その・・・他の先生との兼ね合いというものがあつてね」

職員室に向かったきりなかなか戻ってこなかった担任が、見計らっていたかのように都合いいタイミングで姿を見せる。とはいえ、すぐちくりと来る亜沙の一言を受けて、その満面の笑みはあっけなく引きつった弱々しいものになってしまったが。

「先生って何かしらボクを目の敵にしてません？」

「そんなことないよ？ 目の敵にしてたら毎日ここの掃除させてるから」

「早く結婚相手見つけてください。無理でしょうけど」

「無理つてのはわかつてても言わないでほしいなあ」

亜沙の質問に悪びれる様子もなく冗談まじりに答える担任教師。そして亜沙も溜め息まじりながら軽口を叩く。それなりの信頼関係があるからできる行為だと傍目から矢薙は見ていた。

「それじゃ、片づけ終わつたんで帰ります」

「ん、ああ。ありがとね」

お礼を言いながら、担任は矢薙と亜沙に向かって何かを放り投げてきた。

「これは？」

反射的に矢薙が受け取ったのは、手のひらサイズのお菓子。果汁入りのグミだった。

「私からのお礼だよ」

「ナギちゃんももらっておけば？」

「いや、何でグミ？」

「ここは普通、飴とか飲み物だろうと矢薙は思ったが、

「いやいや、グミって飴と違って噛まなきゃ飲み込めないでしょう？ 噛むということは健康にとっても大事だし、脳の覚醒にも繋が

るんですよ？」

「それは知ってます」

「しかもね、それは他のグミよりカラーゲンが入ってる」

「ああ。つまりとある生徒にねだられたというわけですか」

「やたら担任と亜沙の視線が落ち着かなくなっているのを察知し、矢薙は状況を把握した。」

「……よくわかったね」

「何でわかったの!？」

「何となくだ」

「お前もねだるなよ、と思いながら矢薙も鞆を手に取り、帰る支度をする。」

「はい、それじゃ気をつけてね」

「わかってます」

元氣な挨拶を残して廊下に出ていく亜沙に対し、矢薙は小さく一礼して静かに資料室を後にするが、どれだけ帰りたかったのか、既に廊下に亜沙の姿がなかった。何にせよ、これは双方に幸運だと亜沙が消えた先に視線を向けたまま、矢薙は背後に声をかけた。

「……何が目的なんですか？」

「別に何も無いよ」

「けど、意図が無いとは言わせませんよ」

背中越しとはいえ、音もなく背後に立っていた担任に先程までの柔らかな物腰が感じられないことを矢薙は気づいていた。

「あ。明日、早速だけど日直頼んでもいいかな？」

「それは構いませんけど、話の本題はそれじゃないでしょうか？」

この期に及んで筋を隠し通そうとする担任に矢薙が直接尋ねると、観念したのか、担任は小さく薄ら笑いを浮かべた。

「鈴城君、本当に君は鋭いね。野性の勘とでも言えばいいかい？」

「何とでも。ただ、俺はあらゆるものの裏と表を見てきたつもりです」

少なくとも人間的な生活ができていた今までの十年間、矢薙はコ

インから本、月や人間まであらゆるものを写真や肉眼などで見てきて、知識として取り込んできた。

「だから、いつも決まった顔をする奴ほど信用できない」

「うんうん。確かにそれはそうだ。そういう人間は使い分けをできるからね」

それに自分自身も該当していることを知っているのか、担任は納得したように小さく首を縦に振る。だが矢薙自身もまた、自分がそういう人間であることを把握していた。うまく周囲と軋轢を生まないうように、自分の姿形など決めずに最低限の誇りと意志だけで生きてきた。そういう生き方に顔と言葉の使い分けは最も基本的なスキルだ。

「でも鈴城君、君は人間として一番大切なことを知らない」

「でしようね。俺は」

消えていった言葉のかわりに、矢薙は振り向くことなく視線だけを後ろをへ向かわせる。その言葉にならなかった言葉は反論などではなく、諦めにも似た賛同で、遠い過去　嘘だとも、夢だとも思いたかった記憶を思い返した矢薙は小さく笑ってみせた。

「俺も帰ります」

「ああ。気をつけてね」

濁らせた言葉を追及してこなかった声の主を無視して、まわりついてくる視線を振り払うこともせず、矢薙は昇降口へと向かって歩を進めていった。

窓から差し込む斜陽　記憶の片隅にも刻まれている燃えるようなオレンジに癒えることのない傷の表面をなぞられたようで、自分の立っている現実に一抔の不安を覚えながらも矢薙が階段を下りていくと、

「もう、遅いよナギちゃん！」

とうに先に帰ったと思っていた亜沙が、昇降口で腰に手を当てて待っていた。

「先に帰ったんじゃないのか？」

「あの場にいるとまた何を言いつけられるかわからないから逃げただけ」

「あ、そう」

辟易するどころか真剣な表情で答えてみせた亜沙の台詞に納得するものだろうかとは思ったが、そうするしかなかった矢薙は下足棚から靴を取出し、履き替える。

「今思えばさ、ボクの次なんだね。出席番号」

「ん？ ああ、五十音順だからな」

矢薙の下足棚のひとつ前、上の棚にあたるのが亜沙のスペースだった。進藤さんやら鈴木さんやらがいれば別だが、そういった生徒がいない三年B組の出席番号は「時雨」の次が「鈴城」になっ

「はあ。これはこれからも何かと言われちゃうんだらうなあ」

「何のことだ？」

順序よく並んだ下足棚を見て仕方なさそうに溜め息をつく亜沙にその呟きの真意と尋ねると、

「今日であれで先生の性格わからなかった？」

「ああ。そういうことか」

亜沙に尋ね返され、矢薙は今日一日の出来事から把握した事実を繋げていつて理解した。

あの担任は何を基準にして選んだのか、亜沙を「頼みやすい」生徒として認識しており、今日の学校案内も日直や二人の席が隣同士ということの後押し・駄目押しの理由にして頼んだ。それも、矢薙が来るより前に資料室の整理を頼んだことも忘れるほど。

そして矢薙はまだこのバーベナ学園の細かな規則などを知らない。校則などは学生証を見ればわかるが、クラスメートなどともに学校生活を送っていくうちにわかるものもある。亜沙の発言はその細かな点のフォローまで自分が頼まれるだらうということを見越しての呟きだった。

「けど、別に全部お前に頼まないだらうさ。そうじゃないと俺が他

のクラスメートと接点を持たなくなる」

「そうかなあ」

矢薙としては至極当たり前のことを言ったつもりだが、亜沙はそれに首を傾げた。新学期が始まってまだ三ヶ月も経っていないというのに、そこを疑わせるほどのあの担任教師はこの彼女に何を頼み続けていたのだろうか。

「そうだと思うしかない」

疑うほうが楽だとしても、信じることから始めなければ何も変わらない。何度も使い古されたフレーズできつとこの少女には気休めにしか聞こえないだろうと思いつつも、矢薙は自分自身にも言い聞かせるようにそう呟いた。

「ほんと、今日は厄日だったよ」

「毎日あんな感じだったらそうだろうな」

「うん。まさにこんな感じ。朝はホームルームのプリントを渡されて、お昼は教材運びだし、放課後は放課後で資料室の整理だからね」
帰り道、どうやらあの胡散臭い担任から使い走りにされているとしか思えない亜沙の愚痴が夕焼けに流れ溶けていく。

「それはご苦労様だな。時雨『先輩』」

軽い茶目つ気も交えてみつつ、矢薙は当たり前障りのない労いの言葉を亜沙に贈った。だがその反面、愚痴を吐く亜沙は何ともグミミたいに厄介だと、今日初めて知り合ったというのに矢薙はふと手に持ったままの袋を見て思った。

噛もうとすると押し返してくる。下手に力を加えると絶対にどこかから反発してくる。感情表現がストレートなのは褒められるべき点なのだろうが、それは子供までが対象の話。きつとこのままでは といえ、それは矢薙の知ったことではないのだが。

現実という水面の下、転がる石のような個人は時代という流れに従って次第に角が取れ、丸くなっていく。子供時代のように角ばったまま、時代の流れに乗っていくことはできない。たとえどこに進もうが面倒事しか落ちていない現実に直面しようとも、うまく顔の

筋肉と声帯を操って諂った笑顔を浮かべ、胸がすくまで吐き出した
い愚痴や罵詈雑言を腹に隠しながら転がっていかなければいけない。
それが大人だ。社会の歯車になるうとも、水の流れに逆らうことは
それ以上の強さで押し流されるということだ。

人が時代という激流を転がる石である以上、時に日の光が届かな
い川底まで貶められても転がり続けなければいけない。何度挫けよ
うとも、そこで腐って手早い方法だと砕け散ってしまえばそこでリ
セットの効かない人生も終わりだ。どれほど憧れようと、太陽に向
かってまっすぐ伸び続けるような一輪の向日葵にはなれない。かつ
て太陽を目指した若者が拵えた蠟の翼を溶かされ、あえなくその命
を落としたように。

「ほら。これはやるから、元氣出せ」

「え？ あ、うん。ありがとう」

担任から報酬としてもらったグミの袋を亜沙に押しつけるように
渡すと、いくつ目かは忘れた交差点にきた。亜沙はまっすぐ進むよ
うだったが、矢薙はここを右に曲がらないと遠回りになってしまう。

「亜沙。俺、家こつちだから」

「あ、そうなんだ……つて、ちょっと待って
「ん？」

亜沙から急に呼び止められ、進行方向を親指で示したままの矢薙
が尋ねると、

「あのさナギちゃん。ケータイ貸してくれる？」

「何で？」

矢薙のケータイには指折り数えるだけの村に住む友人・知人しか
登録されていないが、どれもこれも貴重な個人情報だ。迂闊に手渡
せないと反射的にポケットの上からケータイを押さえた。

しかし、

「ここは一度、お互いの連絡先を知っておいたほうがいいと思うん
だよ。どうせ『明日早速日直頼まれてくれない？』とか言われて
るでしょ？」

「よくわかったな」

「やっぱりね。だから、ボクが何かとナギちゃんのことではいちいち用事を押しつけられないようにするために、番号とメルアドは知っておいたほうがお得だと思うんだよね」

さすがに使い走りの先輩、勘が鋭い。亜沙の言うことはもつともだと感じた矢薙はポケットからケータイを取り出すと、折りたたまれているディスプレイを開き、赤外線操作の項目を開いていく。

「はい、送信完了っつと」

「ああ。ありがとな」

「それじゃまた明日ね。ナギちゃんっ」

そして互いのケータイの番号とメルアドを交換し終えたところで、ケータイを勢いよく閉じて握り締めた亜沙は元気なひと声を残して駆け出して行ってしまった。

「あ、ああ」

まるで嵐のような人間だと思いつつ、何だかんだ言っても心配してもらった気持ちはありがたく受け取ることにした矢薙は、ケータイをポケットに突っ込むと家路に就いた。

余談だが、帰宅後、矢薙はなぜか橘花の機嫌が少し悪かった気がした。

思い出したことがある。幼い頃、名前も知らない男性から「人はパンのみで生くるものではない」と言われたことを。

ならば最後の審判まで顕現する気のない御子からの愛だけで腹が満たされるのか。薬でいかれていつ何時ミサイルや軍艦で襲ってくるかもしれない隣人でも感謝さえすれば金でももらえるのか。自己保身と欺瞞だらけの祈りを捧げながらこれで救われると呟いて死ぬと言っのか。それを是としたらその神様はよほどの無能か人でなしだ。

ああ、そもそも神である時点では人ではないのか。ならば人は人の世に、その本能に従って生きていく。目には目を、歯には歯を。傷

つけ傷ついて、奪われたら奪い返して、身内が殺されたら同等の罰を与えて仇を取る。最初から壊れている天秤での裁きになど頼らず、すべてをこの手でひとつひとつ実行していけばいい。悪法もまた法だ。それがこの世界の理だ。

「くそっ」

ベッドの中、完全に覚醒してしまった自身の脳と身体に悪態を吐いた。深夜三時、嫌な夢を見た。この世のあらゆることを否定して結果、ただの我が儘という自己正当化をしたがる自分しか残らない夢。何度も寝返りを打ち、寝つきやすい体勢を探そうとするが、一度目覚めてしまったものは見事に睡眠欲求を拒絶してしまった。

しかもそんな中、矢薙はもうひとつの見知らぬ人からの言葉も思いついてしまった。まだ二十年も生きてはいないが、遠いあの日に置いてきたものを諦めきれずにいる矢薙は拳を握り締めてその言葉を塗り潰す。

あの頃とは違うんだ。頼りない言葉で、形を持たないゆえに欠片でしかなくなった自分をかき集めて維持するのはこれで何度目だろうか。いい加減に終わらせたいとふと思えば、あの日から今年で十年目。矢薙には今この手元にあるすべてと引き換えにしても、手に入れたいものがある。信じていたいものがある。それが夢のよくな出来事の破片であっても、あの頃は確かにそれを支えにして生きていたのだから。

ベッドから起き上がり、矢薙はすっかりとした足取りで、かつ足音を立てないよう部屋を出てリビングへ向かう。電気も消され、遮光性のカーテンも開けられた窓からはレースのカーテン越しに月光が差し込んでいた。テレビなどつけても見たい番組などやっていない。矢薙はソファに身を預け、そのまま横になる。純和風な古民家だった実家とは違い、食事を摂ったテーブルの向こうにはカウンターつきのシステムキッチンが見える。テレビ脇にはいつのだろうか、村で撮影した写真が収められた写真立てがいくつか並んでいた。身体を起こし、ふと写真立てのひとつを手取る。雰囲気や背格

好から察するに小学生のときだろうか。今以上に幼い顔立ちの橘花を中心に、隣にもう既に大人びた風体の林檎、その後ろにまだやんちゃな雰囲気を放つ橙次と自分がいた。

矢薙と橘花が育ってきた村では、みんなで遊ぶとなるとゲームなどという近代文明的な選択肢などなく、外を駆け回って遊ぶしか選択肢がなかった。幸いにも、人間よりも動物が多いくらいに豊かな自然環境が生み出した遊び場は数多くあった。危ないことはその身をもって体験してきた。そうやって矢薙たちは自分のテリトリーを作り、心身の成長とともにそれを次第に広げていった。

そんな頃、あまり積極的の外に出るほうではなかった橘花を最初に誘ったのが矢薙だった。そして矢薙の最初の友人である橙次も仲間が増えることに賛成してくれて、同性であった林檎が後押ししてこの四人は頻繁に集まって遊ぶようになった。

この頃はまだ誰もが脈々と受け継がれていた村の伝統でもあるあの夜伽など知るわけもなく、子供は子供の世界で無邪気でいられたはずだった。それが歳月と年齢を重ねるに従い、まず一番年上だった林檎の処女が、次に橙次の童貞がなくなり、そして矢薙もあの場に引きずり込まれ、童貞を失くした。

橘花は両親の強い意向であの夜伽には未参加だったが、村外の人間には秘密裏であるその行為の存在を知っているというのは暗黙の了解であり、共通認識であった。林檎に何度か好きでもない人とのセックスについて聞いてきたことがあるらしい。林檎は「大切な初めては大好きな人のためにとっておきなさい」とテンプレート通りの台詞を言っておいたというが、後日あからさまに一步分の距離を置いた姿勢を橘花に取られたときは、矢薙だけでなく橙次や林檎もそれなりにシヨックを受けた。

思えば橘花が誰に対しても丁寧語で話すようになったのはそれ以降だった。処女や童貞の喪失がまるで己を穢す行為でもあるかのように、それを失った人間が自分と違うことを証明するために、また、それを失った人間かどうか外見上判別できないために橘花は自分から

汚らしいものを無意識に遠ざけているのだと矢薙は思っている。

もつとうまくできるはずだった。矢薙は自分自身がいつもそんな取り返ししようのない後悔に見舞われている気がしてならない。そのときはその選択肢が正しいと思っていたはずだ。なのにそれは単なる逃げでしかなくて、今もややもやとした悔恨が尾を引いている。

「ホームシックになってんじゃないよ、俺」

矢薙は今考えていたことそのものをごまかし、頭の中から排除するようにしたが、常に頭のどこかにいる客観的に物事を見るもう一人の自分が、またそうやって逃げるのかと心中を見透かすように新たな追及と後悔を持ち込んでくる。

写真立てを元の場所に置き、再びソファーに横になってから窓に視線をやると、物言わぬ月光が冷たく矢薙の心に突き刺さってきた。

君は何も救えない。自分自身さえも。

もうひとつの言葉の痛みさえ甘受するように矢薙は瞳を閉じ、二度目の眠りに就いた。

入口も出口も一ヶ所しかない世間と隔離された場所に立ち入ろうとする者たちに対して最小限の罫を仕掛けるなら、どのような場所に仕掛けたらいいだろうか。答えは単純明快。誰もが通る場所に仕掛ければ済む話。

ゆえに、彼女たちは三世界にとってこの重要な「遺跡」に足を運んだ。

「ぐ、うつ!？」

突如、夜の静寂に湿った殴打音が生まれ、次いで男性の呻く声と倒れた音が響いた。殴打音に驚いた男性の同僚女性も続けざまに何者かに殴られ、自身の殴られた感触と鈍い痛みを一瞬で意識ごと忘れてしまった。

「思っていたより腑抜けですね」

「魔法ばつか使って日和ってるからじゃないの？」

夜空を背景にそびえたつ大樹の幹を背に、闇から滲み出したよう

に現れたのはともにモデル級の高身長を誇る女性二人。指の骨を鳴らす一人は臙脂色の髪を微風に揺らし、足元に倒れている制服姿の男女を詰るもう一人は耳元のターコイズブルーの髪をかき上げる。

「ただのホワイトカラーだからでしょう。その筋の人間だったら手加減しませんよ」

そう言うと、臙脂色の髪の女性は倒れている男の制服を漁り始め、ターコイズブルーの髪の女性も同様に女性の制服を漁り始める。

「手加減、ねえ。まあ私は種族なんて気にしないけどね」

「中には根っからの軍人氣質がいます。特殊部隊の連中なんて、所属への忠誠はSWATやグリーンベレーと変わりませんし」

ICチップ入りの認証カードなどの一通りの装備品を奪い、脱がした制服を細切れにすると、二人は意識を奪った男女を軽々と担ぎあげ、まるで祭壇のように日常とは明確な区別をされた空間まで進むと、二つの身体をそこから臨む大樹へと向かって放り投げる。

「これで始末完了ですね」

「また会うときは地獄だね」

この場所の係員をしていた男女の身体はそのまま夜色に染まった空へと落下し、瞬く間に消えてしまったというのに、女性二人の吐いた言葉は自らが葬った命の価値など顧みようとする気配はなかった。

次はない。だから他人の命に構っている暇などない。それが彼女二人と、二人に命令を下した人物の共通認識だった。恐るべき計画は既に始まっていた。それがもたらす最悪の結末を変えるためなら、幾多の犠牲だろうと支払うことを躊躇ってはならない。今手元にある十から八を切り捨ててまでも、未来の百を確実に手にしなければ、「そう言えば以前、本気で手合せを挑んできた魔族がいたんだって？」

「ああ。そういえばいましたね」

「結果は……聞くまでもないね」

「そうしてください。暇潰しにもなりませんので」

実力に経験を加味しても、その魔族の男性が彼女に本気で手合せを挑むのは無謀だったと言っしかかった。わずか数分の衝突で彼女は赤子の手を捻るより容易くその男の四肢を関節ごとに切断し、最後に胴体から首を取り払った後、腰から下を失くした胴体を墓標に見立て、素手でくり抜いた心臓とぶちまけられていた内臓を花束のように供えてきた。

「だろうね。ただの魔族ごときじゃあ仕方ないよ」

「そのとおりです」

歯牙にもかけない言い方で会話を終わらせると、そこには先程二人が葬り去った男女に変装した女性二人が立っていた。

それから数時間後、場所は変わり、周囲は闇。通話ごとに時折放たれる通信機器の点滅を除いて一切合切が漆黒に塗り潰された場所に彼らは腰を下ろし、ミニキャンプを開いていた。

「準備はできたか？」

「はい。いつでも実行できます」

幾多の戦火を潜り抜けて鍛え上げられた鋼の肉体を迷彩柄の上下に包んだ男性の背後、彼の配下にあたる一人の男が敬礼の体勢を取る。

「よろしい。即座に実行だ」

「はっ」

男性は満足そうに口の片端を吊り上げ、配下の男に命じると、彼は背筋をぴんと伸ばし、アーミーブーツの踵を鳴らすと、再び敬礼の姿勢を取ってその場を後にした。

「さてと」

人界製の赤外線望遠鏡を手に取り、男性は前方遙か数キロ先の施設を臨む。拡大されて見えたその施設には窓こそないものの、日夜白衣をまとった者たちがせわしなく出入りしているのが見えていた。

「くくつ。何のための施設かはわからんが、よほど大切なものなのだろうな」

望遠鏡を両目から離し、踵を返した男性は他の配下の者たちに撤退を命じる。その声を受け、その場にいた全員が規律よく立ち上がり敬礼をすると、すぐさま装備を綺麗にまとめ、撤退準備を始めた。「我らを侮るなよ。愚かな支配者ども」

そう小さく呟いて、首筋に赤い涙を流す鳩の頭の刺青を彫った男性は装備を撤収し終えた配下の者たちを引き連れてその場を後にする。だがその数秒後、濃い藍色の夜空を薄い紺色になるまで明るく照らした閃光とともに、男性が臨んでいた施設の一部が爆発、炎上した。

あいたい。

それだけを考えていた。

あつてみたい。

それだけを思って、行動してみた。

だが彼女の行為は果たして許されるものだったのか、彼女自身にそれを推測する力はなかった。

始まりは突き上げるような震動だった。突如として眠りから起こされた彼女は、普段は閉じられているドアが開いていることに気づき、いつもそばにいた物言わぬ相棒を手にもちらと見るだけに留まっていた廊下に出た。だが、逃げるといふ選択肢は彼女になかった。教わっていないかった。親や仲間を知らず、飛び回る空間さえない鳥籠の中の鳥は羽ばたくことを忘れてしまい、反応するものもなくなった今は囀ることすら忘れ、すっかり反応の薄い人形が一体できあがってしまった。

対象を温かく見守るだけが育成ではないのはここで彼女とともに暮らす誰もが知っているはずだった。時に厳しい言葉や知識を与え、教育と冠した現実や社会の都合に適した人格形成を行うのも育てる側の人間に求められている行為だ。だが、監視と紙一重の庇護を与えるだけの彼女の周囲の人間は今、関係者の避難や二次爆発などに備えており、鳥籠の中の彼女は身じろぎひとつせず黙っていると思

っていた。

ゆえに彼女を取り囲むだけの人々は、彼女に芽生えていた衝動とも取れる強い気持ちを知らなかった。観察や数値的データでは理解できない人間の心を、彼女が有していると気づけなかったのは致命的なミスであったともいえるが、それは同時に彼らが彼女を普段からどのような存在として見ていたかという疑問と問題に発展する。

そっちは危ない。こっちに逃げろ。早く火を消せ。悲鳴と怒号の混じり合った声が飛び交い、慌てふためく人たちをすり抜け、彼女は裸足で廊下を歩いていく。人々の視界には爆発によって生まれた燃え盛る炎と白煙しか目に入っていなかったのが、逆に彼女にとつては好都合となった。

しかし適当に歩いているうち、天井だけにまとわりついていた白煙は次第に勢いを増し、飲み込まんとばかりに彼女の視界に広がっていく。

「……いま、いく」

言葉にこそしなかったが、彼女は自分自身が強く憧れていたものがこの白煙の向こうにある気がしてならなかった。もちろん確証はない。期待しすぎたために心が見せた根拠のない幻想かもしれない。それでもここに留まるつもりなど毛頭なかった彼女は薄汚れた茶色の相棒を抱き締め、紫色の髪を揺らしてゆっくりとその白煙へ一歩目を踏み出していった。

phase 2: Hello? (後書き)

さて、早くも稟たちのいる世界の裏側で蠢く輩が登場しましたが、ひとまず5人いる中でまだ登場していないヒロインを出さないことにはどうしようも話が進みませんね。

以下、初出の単語群の説明です。

・D328のOp.1:ドイツチュー番号に基づく「シューベルト作曲の楽曲番号1番」という意味で、ピアノ歌曲『魔王』を指す。題材はゲーテの同名の詩だが、歌うには語り手、父親、息子、魔王の四つの音域を使い分ける必要があるうえ、ピアノも息子の死の間際に際して逼迫する父親の雰囲気醸し出すために和音とオクターブを激しく繰り返すため、演奏が困難な曲のひとつである。

・鳳仙橋花:都合上、両親公認で鈴城矢薙と同居しているバーベナ学園一年生の少女。普段は腰まであるオレンジ色の髪を何らかの形で結わえている(ポニー、サイド、ツインなど、結わえ方は固定していない。三つ編みもあるがパターンも複数ある。休みの日は解いていることが多い)。164センチの身長には似合わないほど巨大な胸を持つ。矢薙を「ナギ兄さん」と呼ぶが、姓が違つたとおり血の繋がりは皆無で、ただの愛称。前出の橙次や林檎なども「橙次兄さん」、「林檎姉さん」と呼んでいる。

基本的に腰が低く、今こそ誰に対しても「〜です」「〜ます」「口調だが、秘密裏の伝統でもあった「夜伽」の発覚以前は矢薙たち年齢が近い人たちには敬語など使わずに喋っていた。また、身体能力も家事能力も高く、学校の授業は苦手(中の上あたり)だが頭の回転の速さは矢薙に引けを取らない。方向感覚も矢薙同様に鋭敏だが、なぜか村に住んでいた頃は頻繁に滝壺や崖に落ちていたため、

一緒に遊んでいた矢薙たちは気が気でならなかった。左脛の内側と右背中の腰のあたりに崖から落ちた際にできた大きな傷跡がある。そして、さらなる秘密も……。

・シスター連れた右手に不思議な力を宿した少年：さて何の事だか学園都市の内部に心当たりがあるという方はとりあえず中学生の少女から電撃食らって「不幸だあーっ」とでも叫んできたらいいかもしない。

・Hカップ：言わずともGカップとEカップの間のブラの大きさ。もちろん相当な大きさを要求され、数値上はトップバストからアンダーバストを差し引いた値が27.5〜30.0cmは必要。ちなみに最近の橘花はこのサイズでもきついと感じるようになってきているらしい。

・太陽を目指した若者：ギリシア神話に登場するイカロスのこと。神話内では決して太陽を目指したわけではないが、太陽に近づきすぎたために蠟と羽毛でできた翼は溶け、エーゲ海に墜落して死んでしまっている。

・人はパンのみで生くるものではない：『新約聖書』の「マタイ伝」第4章に登場する言葉。「人は物質的充足だけを目的として生きるものではない」ということだが、世界を多面的かつ斜から見ると、矢薙を精神的に満足させられるものがこの世にあるかどうかは不明。

Phase 3: Before the Storm (前書き)

第1章最後の話になります。

個人的には、思ったよりアクセスがあったことに驚きです。

まあ、上は見上げるときりがないほど上がりますが、数字となつて表されると一喜一憂しますね。

では第1章最終話、ご覧ください。

Phase 3: Before the Storm

早朝、人界。

「まったく、とんでもないことをやってくれたな。あいつらも」

とある一軒家、ダイニングテーブルに向かい、iPadを操作しながら青年はひとりごちる。ディスプレイの向こうでは青年が遣わした調査グループがまとめて送信してきた動画ファイルが開かれていた。青年が予見していたとおり、深夜の魔界の僻地で謎の爆発が起きたのだが、事前入手していた施設の規模や見取り図と今回手元に送られてきた爆発の写真を重ね合わせると、青年はやはり大惨事と呼ぶほどの死者が出るような規模ではなかったと判断する。

とはいえ、この青年は身近の大切な人以外の誰が何人死のうと自身のスタンスを取り続ける。この世はなぜか死ぬべき人がすぐ死ぬわけではなく、前途洋々の人間があっさり逝去してしまうことが多い。そもそも青年は今さら数十の命が消えたところでこの世界は何も変わりはないことを知っている。死は誰にも平等に訪れるが、死ぬまでの時間は不平等だ。その際限ある時間の中で一人の人間ができることに差異があるのも決して不平等ではなく、それが個々に異なる主体を持つ人間だからだ。

彼自身、過去にその理を破棄したことがあるのだが、それは別の話。

「ですが、世界樹の三女が逃げたそうですね」

あのととき青年に同行していた少女が、湯気だつ緑茶を注いだ湯呑みをお盆の上から青年の前に置き、話に乗ってきた。

「構わないさ。行き先もすぐに判明してすぐ監視下に置かれる。俺たちが干渉するのはその三女をおびき寄せせるまでだし、既に『門』にも根を張って三世界の行き来はすべて掌握している」

爆発の様子とその後の過程を映した画像ファイルを閉じると、青年は別のフォルダを開いた。それはあの『Cunning Str

ain?』とその関連の報告書をまとめたものだが、わずか数日でその報告書は既に数十にも及んでいた。

「さすがと言うべきでしょうが、もはやどんな言葉も陳腐になりま
すね。あなたの前では」

テーブルを挟んで青年の反対側に座った少女は、ありとあらゆることを指先ひとつでやってのけるようになった青年に最上級の感服と畏敬をこめて青年を讃えた。

「そう持ち上げるな。俺はそこまでできた人間じゃない」

「ではいつそ本当に『神』になったらいかがです？ あなたなら可能でしょう？」

「くだらない。第一、人間だからここまでぐちゃぐちゃになった世界を楽しめるんだ。それを放棄してまで全知全能を気取るつもりはないし、無粋に邪魔する奴は誰であろうと消してやる」

少女の淹れた緑茶を一口すすると、青年はテーブルの上で組んだ指に顎を乗せて茶目つ気たつぷりに煽り立てる少女の言葉を一蹴した。そして、電源を落としたiPadをテーブルの上に置くと、小さく背伸びをする。

「さて、今日は嵐の前の凧だ。きつと面白いものが見つかる」
背骨を鳴らし、あるものの至上主義の風が吹き始めた世界への皮肉と嫌味を込めて呟かれた青年の言葉に、少女は小さく笑うのみだった。

光陽町。矢薙と橘花が住むマンション。

「まったく、こんなところで寝て風邪ひいたらどうするんですかナギ
兄さんっ」

せつかくの休日、しかもピーカンだというのに、矢薙は橘花の雷を落とされていた。

「だから、なかなか寝つけなかったんだって」

「だとしてもせめてブランケットくらいかけて寝てください。まだ
夜は寒いんですよ？」

「はい。ごめんなさい」

寝つけなかつた理由をはぐらかしつつ、二つ年下の橘花を前にただ謝るしかない自分を情けないと思いつつも、非は全面的に自分にあると受け入れた矢薙は素直に頭を下げた。だが対照的に、橘花は素直に謝ってきた矢薙に思わず身体が戦慄くほどの可愛さを密かに覚えていた。

「というわけで、今日は私の買い物に付き合ってください」
「は？」

今ふと耳に飛び込んできた橘花の言葉は聞き間違いかと思った矢薙は下げていた頭を上げ、橘花を見上げる。

「買い物をしたいと、明日以降の食材がピンチです」

「それはわかった」

「なので一緒に付き合ってください。ナギ兄さん」

「だからなぜそうなる？」

「そんなこと、言わないとわかりませんか？」

「買い物は付き合おうが、なぜ今の会話の流れでこうなる？」

ここ光陽町とは違い、矢薙と橘花が住んでいた村には日常的にまともな買い物ができる場所がなかったため、数日分をまとめて買う癖がついているのだが、それは今矢薙が取り上げた論点とは違っている。買い物話の前はソファーで寝るにしても風邪を引くからブランケットをかけておけという話だったはずだ。矢薙が言いたいのは、そこから買物の件には「というわけで」の接続詞では決して繋がらないはずなのだが、そこを橘花が強引に結び付けた点にある。素直に一緒に買い物に行こうと誘えばいいものを、なぜ橘花に限らず、林檎など矢薙の知る女性はみなこんな強引で面倒で回りくどい手を使うのだろうか。

「とにかく、こんな天気の良い日に出かけない理由がないでしょう？」

天気がいいなら掃除や洗濯をすればいい。わざわざ出かけることはない。食材の買い出しや生活必需品の補充を除いての話だが、こ

ういうときはおとなしく女性の言い分に従っていたほうが今後のためになると矢薙は橙次や林檎たちの父親から習っている。

「仕方ねえ。今準備するから待つてる」

頭を掻きながら立ち上がると、矢薙は自分の部屋に戻っていった。

「おやおや、お嬢ちゃん。どうかしたんかい？」

とある駅の構内。七十五度ほどまで腰が曲がり、手押し車を押し歩いて歩く老婆はふと乗車券売り場の前にたたずむ少女を見かけ、昔からの親切心で声をかけた。

「・・・・・・・・」

乗車券売り場の上方、蛍光灯のバックライトに浮かぶ路線図を見上げていた少女の声こそなかったが、「わからない」という言葉は老婆に聞こえた。だが実際は少女が小さく首を縦に振ったことも気づかないほど普段から目が悪いこの老婆は、彼女の耳が人族のものではないことにも気づいていないようで、しわくちやになった顔をさらにしわくちやにして尋ねた。

「もしかして、行き先がわからないのかい？」

「・・・・・・・・」

こくり、と今度は先程よりも大きく少女の首が縦に動いた。

「ああ、ああ。それは大変だねえ。お嬢ちゃん、どこに行きたいんだい？」

警戒心を解く笑みとゆったりした口調に少女の口元がかすかに動くが、老婆の目には見えなかったが、

「この駅にいるってことは、お嬢ちゃんは神族か魔族かい？」

地理上、この駅が最も「門」のある遺跡に近いことを知っている老婆は、なかなか声に出して言葉を伝えてこない少女に改めて尋ねる。再び少女がこくりと頷いたのを、今度は老婆のひどい老眼でも捉えられた。

「じゃあ、行き先は『門』かい？」

「・・・・・・・・違っ」

「違う？　じゃあ、どこか行きたいのかい？　誰かに会いたいのかい？」

初めてはつきりと聞こえた少女の言葉を受け、老婆がさらに尋ねると少女は再び言葉にして答えを返した。

「りん……ネリネに会いたい」

「ね、ねりね、かい？　誰だその子は？」

普段からテレビではニュースと歌謡曲と天気予報くらいしか視聴しない老婆は、少女の口から出てきた人物名に首を大きく傾げる。

「……知らないなら、いい」

「あ、ああ。ちよつと待つとくれよ。今、そこらの人に聞いてみるからなあ」

踵を返し、その場を去ろうとする少女を引き留め、老婆は自分の出かける用事よりも最後までこの紫髪の少女の面倒を見ることを選んだ。半ば意地になっっているようにも見えるがこの老婆、二回の世界大戦後の黎明期だった学生時代は生徒自治の会長まで務めたほど責任感は強かった。

そして、

「ええつとですね、おばあちゃん。確かそのお名前、魔族の王女様ですよ」

腰の曲がった老婆の声など誰もが無視していく中、ようやく捕まえた駅構内の派出所の女性警官が記憶を辿り、親切に老婆の質問に答えてくれた。

「ああ、そうだったのかい。お嬢ちゃん。そんなええ人と知り合いかい？」

老婆は膝を折って同じ視線の高さになって応対する女性警官から、無言だがじつと一緒にいてくれた少女に顔と質問と向ける。

「……」

わずかな逡巡があったが、少女は首を縦に振った。

「それで婦警さん。このお嬢ちゃんの尋ね人はどこにいるんだい？」

「ど、どこにいるかですか？　えつと、その……あの、お

時間いただけますか？」

老婆が顔と質問を再び女性警官に向けると、あまりに突然かつ無謀とも思える問いながら、懇願する老婆と黙ってこちらを見つめる少女という、無碍に断ることなどおそらくできないであろう視線のコンボ攻撃に耐えられなくなった女性警官は、苦笑しながら無線で別の警官と連絡を取り始めた。

「よかつたねえ、お嬢ちゃん。これで会えるよ」

「……………うん」

目的達成を前に、我がことのように顔をしわくちやにする老婆の言葉に、わずかながら少女の口元が緩んだように見えた。するとちよつど連絡を取り終えた女性警官が老婆の肩に手を置くように叩き、意識をこちらに向かせる。

「おばあちゃん。場所、わかりましたよ」

「おう、わかつたのかい？」

「今、蒼空市の光陽町って街にいるらしいんですよ」

「ほう。それはまた思ったより近いねえ」

「まあ、光陽駅で降りてそこから歩き、というのが一番楽ですね」
駅数個分の距離が感覚として近いのかどうかは、個々人の生まれ育ってきた都市の交通網の発展次第などで大きく異なるのだが、少なくとも腰の曲がった老婆やぬいぐるみを抱えた少女に踏破できる距離ではないと女性警官は内心で思いつつ、それをスルーすることにした。

「ほほう。お嬢ちゃん。わかつたかい？」

「……………うん。でも」

「なあに。お金ならあたしがあげるよ。久し振りにこんな別嬪さん見たんだ。今日はいい日だよ」

がま口の財布から取り出した、これまた顔面に負けないほどしわくちやになった千円札を少女の手に握らせ、老婆はかかかつ、と所々歯が抜けた口をお菊開けて笑ってみせた。

「よかつたわね、お嬢ちゃんも。ありがたくもらっておきなさい」

「………ありがとう」

その後、今までで一番長い沈黙が流れたが、皺だらけの千円札を手握り締めた少女はしっかりと老婆に感謝の言葉を口にした。そして、女性警官に乗車券の買い方まで教わった少女は自動改札に戸惑いながらもそのまま改札を抜けていった。もちろん、何番目の駅で降りるのかも少女にしっかりと教えてある。

「おお、そっぴや婦警さん。トイレはどこだったかいね？」

「トイレ？ あっちですよ。おばあちゃん」

少女の紫色に揺れるツインテールが人波に見えなくなると、老婆はすっかり頭から抜け落ちてしまった駅のトイレの位置を女性警官に尋ねた。

「すまんが、一緒についてきてくれんかい？」

「ええ。わかりました」

手押し車を押しながら幼児と同じくらいの歩幅でしか歩けないこの老婆に、女性警官も快く返事をして、二人はそのまま女性トイレへと入っていく。が、

「………まったく、見事な演技でしたよ。お・ば・あ・ちゃん」

「あら。では本当にハリウッド目指してみましようか」

手洗い場に腰をかけて帽子で顔や首筋を扇ぐ女性警官の隣、鏡に映っていた老婆は突如闊達な喋り方になったかと思うと、曲がっていた腰がぴんと伸びていた。首と腰の骨を一通り鳴らしたところで、抜けていたはずの歯も生え揃い、皺だらけの顔や手もあつとという間になくなり、老婆はまるで魔法のように、特殊メイクなどの痕跡も見せずに二十代そこそこの女性へと変化してしまった。

「あなたなら野獣からシンデレラにもなれますよ」

「ふふつ。そつちもコスプレが似合いますよ？」

冗談を交えながら口元に歪な笑みを浮かべる女性二人。老婆に化けていた女性が髪型を整える間、警官に化けていた女性はスマートフォンで報告書を作成していた。

「で、今日の分の報告書は終わりました？」

「ええ。滞りなく」

老婆に化けていた女性が尋ねると、警官に化けていた女性は一瞬で服を脱ぎ、夏も冬も変わらない黒づくめのゴシック調の普段着に戻ると、ずっとドアが閉められていた個室に警官の上下制服とその装備品をドア上部の隙間から放り込む。

「あの方の、御心のままに」

まるで十字を切るようにそう呟いて女性二人はトイレを後にしたが、その個室には、両手をトイレの配水管に通された手錠に固定され、ぴったりフィットする目隠しと猿轡替わりに擦じられたタオルを啜えさせられた、その制服の本当の持ち主が拘束されていた。

光陽町、木漏れ日通り。

「やっぱり、買いたいものがいつも揃っているって素晴らしいですね」

「ああ、そうだな」

心なしか、足取りの軽そうな橘花の一步後ろをキープしながら矢薙は休日の商店街の人波を歩いていく。右手には野菜、左手には雑貨と肉が重そうに詰め込まれた買い物袋を提げているが、矢薙の腕よりビニール袋の持ち手部分が先に限界を迎えそうだった。

すると、

「あ、ナギ兄さん。そろそろお昼になりますけど、どうします？」

「もうそんな時間か」

「はい」

ふと空を見上げたかと思うと、橘花は時計を頼りにすることなく時間を言い当ててみせた。矢薙や橙次たち同様、幼い頃に野山を駆け回って学んだことは橘花にも深く身に沁みついているようで、鋭敏な方向感覚をもとに時節と太陽の傾斜を踏まえて時刻を逆算できる。

「せっかくだから、どこかで食ってくか？」

相手からの誘いにどうしても遠慮がちになつてしまふ橘花の性格も踏まえた上で矢薙は外食を提案した。もちろん村にファミレスなどという近代的な施設はなかったので、矢薙も橘花も「外食」贅沢の感覚が染みついており、その機会も一ヶ月に一度程度のもので、物珍しささえ感じていた。

「いいんですか？」

「いいも何も、まだ見たい物あるんだろ？」

「え？ いえ、私は別にもう」

「なに。これからお前には世話になるんだし、この気温なら生ものも少しくらいは持つ」

一通りの買い物が終わり今の会話になるまで、橘花本人は隠しているようだったが、矢薙はその視線が服や小物の店などに移っては落ち着かなくなっていることに気づいていた。

それに加えて、橘花も本当は友人たちと今ある時間を無駄だと思ふくらい遊び回つてもいい年齢だ。それをあの村ではどうしても我慢せざるを得なかつたと思うと、橘花のために何かしてやりたいと思うのは矢薙のせめてもの親心だつた。

「そ、それじゃあ先にお昼にしましょう。ナギ兄さんっ！」

不器用な矢薙の気遣いを受け取ると、橘花は一度駆け寄つて矢薙の右腕に抱き着き、そのまま歩き始めた。

「おい橘花。恥ずかしいからやめろ」

「大丈夫ですよ。どこから見ても恋人にしか見えませんから」

「それが まあいつか」

ここで後が面倒臭いなどと口にするのも野暮な話。ましてやあの日から橘花がこれだけ笑顔を弾けさせるのも珍しいと思ひ出した矢薙は、橘花の柔らかい両乳房に右腕を温かく包み込まれながら、さすがままだに木漏れ日通りを進んでいった。

「ここにしましょうか。ナギ兄さん」

ふと立ち止まった橘花が選んだのは喫茶店。名前を見るとフロアと書かれていた。店の周囲は綺麗に掃除されていて手入れも行き

届いていることを一瞬で見抜いた矢薙は、断る理由もないので橘花に任せて店内に入っただが、すぐにそれを後悔することになった。

「いらつしゃいませ……つて、あー！」

「ん？」

「あれ？ 時雨先輩？」

出入口前で固まる三人。だが矢薙としては平日あれだけ顔を合わせている相手と思わぬ再会を果たしてしまった形になった。それも、橘花を自由に右腕に抱きつかせている最も誤解されやすい状態で。

「えつと……二人はそういう関係？」

「はい。そんなところ」

「違う」

矢薙と橘花をそれぞれ指差しながら尋ねてきた亜沙に、接客業務従事者、笑顔はどうしたとツツコミをしたくなったが、今はまずあらぬ誤解へと傾きかけた場のベクトルを修正しなくてはいけなくなつた。

「とりあえず席に案内してくれ。聞きたいなら明日学校で授業中だろうとぶつ通して事細かに説明してやる」

「いや、ボクはそこまで求めてないから」

意外にもすんなり身を引き、矢薙の提案を呑んだ亜沙だったが、「けどかいつまんだ説明はお願い。そうしないと、後ろであの娘がいつまでも現実に戻ってこなくなるし」

「まままあ。次は女の子ですか。本当に女の子は父親によく似て

」

びっ、と亜沙が親指で指した背後、清算カウンターの近くに無数の妄想の花が咲き誇っていた。

「カレハまでいたのか」

「そ。これじゃ仕事にならないからお願い」

矢薙が亜沙を介して知り合ったクラスメート・カレハ。矢薙から見てもシアたちと遜色ない可愛い娘だと思うのだが、玉に瑕という

べきか、いかんせん妄想癖が見事に矢薙にとって身を引いてしま
うほど酷い。そして、一度深く妄想世界に嵌まるとなかなか現実に
帰ってこない。

それを一番よく知る亜沙にそうまで言われてしまった以上、その
原因である自分たちが何とかがするべきなのだろう。触らぬ神に祟り
なしとはこういうときのためにあつた格言なのだと、大きな溜め息
をついて矢薙は肩を落とした。

「ナギ兄さん。あの金髪の女の人は？」

「橘花は見ちゃいけない人だ」

「引きずり込まれちゃ駄目だよ。橘花ちゃんは」

今の会話からそれとなく予想をつけたのか、未だ妄想に浸るカレ
ハを遠目に見る橘花が状況を尋ねてきたが、矢薙と亜沙は揃って強
制的に橘花の視界からカレハをフレームアウトさせた。

「それじゃまあ、席、案内してくれ」

「うん。それじゃ四名様ご案内で」

「ああ。四め……えっ？」

自分たちの後に入店してきたのは誰もいないはずなのに四名とは
これいかに、と矢薙が後ろを振り返ると、

「はるー、なのですよ」

「朝から全くもって羨ましいものを見せつけてくれますね。矢薙
先輩」

「あ、タイム先輩に緑葉先輩。こんにちは」

そこにいたのは怪談の夏を先取りしすぎた幽霊などではなく、立
派に二本足を生やした麻弓と樹だった。

「お前ら、いつからストーキングしてやがった？」

「『明日はナギ兄さんの好きなメニューにしましょうか？』あたり
からなのですよ」

「き、聞いてたんですか？ タイム先輩」

「あのスーパードからかよ」

驚く橘花とは対照的に、矢薙は盛大に呆れると同時に二人の気配

に気づけなかった自らの失態を恥じた。村にいた頃は足音だけで誰が近づいているかわかったというのに、さすがに多くの雑踏や機械的存在、そして異色の気配が氾濫しているこの街は鋭敏すぎる矢薙の感覚をすぐに鈍らせてしまっていた。

「ええ。本当に今すぐ先輩を羨望と憎悪で葬り去れるほどの光け

」

「亜沙。一刻も早く席に案内してくれ」

「うん。それじゃこつち」

「タイム先輩も一緒にどうですか？」

「もちろんそのつもりなのですよ」

ひとまず出入口で熱弁を振るい始めた色情魔は放置して、矢薙たちは亜沙の案内で手近の空席に座る。もちろん、樹の席には今日買ってきたものを置いてブロックアウトしておいた。

「で、暇人二人は何をしてた？」

食後のコーヒーを一口嚙下すると、矢薙は頬杖をついてテーブルの向かいに座る麻弓と樹に尋ねる。

「もちろん面白いネタ探しなのですよ」

「何か面白いものは見つかったんですか？」

「ああ、それはもちろんなのですよ」

橘花に尋ねられ、先程から次々と空のパフェグラスを並べ立てていく麻弓の瞳が嫌な光を宿らせた気がしたが、封印したいほどのあの頃の記憶から会得した対処法でどうとでもなりそうな気がした矢薙は放置することにした。

「そして俺様はもちろん」

「どうせナンパだろ」

「なぜ先に言うんですか先輩は？」

また一口コーヒーを飲む矢薙に台詞を奪われた樹は不満を浮かべながら、なぜ不満になるのか矢薙は全くもって樹の思考回路が理解できなかった。よく稟たちはこれと友人関係を築けていられるものだと、感心と呆れを半々に心中で溜め息をつく。

「ナンパって、緑葉先輩、そんなことしてるんですか？」

「ああ。何たって俺様には」

「ちよつと……いえかなり軽蔑します」

「えっ？」

胸を張って美人好きを語ろうとする樹に飛んだ橘花の冷たい台詞に、樹だけでなく麻弓まで驚きの表情を浮かべて固まっていた。

「ああ、二人に言い忘れてたな。こいつがそういうの嫌いなもの」

隣に座る少女が過去に男女関係のあり方においてトラウマがあることに触れず、矢薙はただ事実だけを麻弓と樹に伝えた。矢薙としても橘花のためにあの日のことは触れずにおきたいところがあると同時に、橘花も橘花で触れてほしくない傷のはずだ。

「あらら、それはまたしつかりした考えなのですよ」

「当然だと思いますけど？」

「いやはや、橘花ちゃんはお兄ちゃんとして誇れる妹だと思うのですよ矢薙先輩？」

「頻繁に滝や崖に落ちる妹なんぞ、危なっかしい以外の何でもない」

「光陽町にそんな危険な場所はないのですよ」

毅然と答える橘花に感心し、今度は矢薙に言葉の矛先を向ける麻弓の視線に冷やかしの成分が混じっていることに気づいた矢薙は、視線と会話の本筋をそらす。そしてそんな矢薙の意図にも気づかず、麻弓は表面だけをなぞった会話を続けてくれたが、こちらに向けたパフェスプーンに掬ったアイスが溶けてこぼれかけていることは、その後の麻弓の反応を密かに楽しもうとあえて言わないでおくことにした。

一方、

「それで、これからまたナンパですか？ 先輩は」

「き、橘花ちゃ……ん？」

「あ、名前で呼ばないでもらえますか？」

「が……んっ……」

案の定こぼれてしまったアイスを嘆く麻弓をよそに、冷淡な視線

で侮蔑の言葉を投げつける橘花に、ついぞ心にひびが入った樹は灰になって散ってしまった。

フローラを出て麻弓と樹と別れると、矢薙は橘花のしたいように木漏れ日通りの散策を始める。

「そういえば何か最後のほう、緑葉先輩、灰になってませんでした？」

「そうか？ 気のせいだろ」

フローラから歩いてほどなく、近くにあっただいかにも女子が好きそうな小物を扱うショップのショーケースを見ながら橘花が先程のことを思い出したように呟いた。灰にしたのは間違いなく橘花の言葉と態度なのだが、麻弓が「どうせそこらで可愛い娘を見つけたら復活するから放っておいても問題ないですよ」などとわかるようなわからないようなフォローをしていたので、矢薙はそれを信じることにした。

「だったらいいんですけど」

そして矢薙の言葉を素直に信じた橘花だったが、

「違いますよね？」

「え？」

「ナギ兄さんは、違いますよね？」

何が何とどう違うのか。橘花がどのような意図でそれを尋ねてきたかを問うまでもなく、矢薙は思わずこみ上げてきた嘔吐感と引きつりかけた表情を無理矢理押し込めて答える。

「ああ。俺はいつまでもお前の知っているままだ」

その言葉から与えられる痛みなど既にない いや、正確に言うなればもう感じなくなっていた。常にそばにある日常の一部分と化した罪悪感と心の麻痺とともに薄れ、痛みが本来持つべき役割が別なものに成り代わっている。その痛みをどれだけ受けようと誰も救われないというのにもかかわらず、だ。

「あつ、もしかして矢薙先輩と橘花ちゃん？」

まずは一軒目のウィンドーショッピングも終わったところで、背後から名前を呼ばれた二人が振り返ると、またもやの再会　シアと楓がいた。

「あ、こんにちは。シア先輩、芙蓉先輩」

「こんにちは、橘花ちゃん。今日は……買い物ですか？」

先輩の前、表向きの体裁としてもすっかり頭を下げる橘花に、同じくらい腰が低い楓も頭を下げて挨拶を交わす。思わず、この二人を一緒にしたらきつと互いに遠慮し合うのだろうと、矢薙だけでなくシアもそれを想像してしまったほどだ。

「その間は何だ？　何が言いたい楓？」

「え？　あ、いえ、その……」

「矢薙先輩と橘花ちゃんって本当に仲良しッスね」

本日二度目、なぜこつも周囲から勘ぐられなければいけないのかと呆れる矢薙が軽い布石を打っておこつと威圧を混ぜて怪訝に尋ねると、しどろもどろになる楓の状況が悪化するより早く、シアが話をすり替えた。

さすがにそんじょそこの小娘よりは度胸が据わっているな。矢薙は気づかれないように視線を一瞬だけシアに移す。少なくとも、そういう世界に住んで、そういうやり方を肌で感じてきたであろうこの神族の少女は、この程度の威圧に怯まずかつ自分の性格を把握したうえで、相手の布石を何も知らない振りした笑顔で盤外へ弾き飛ばせると踏んだ矢薙は視線を楓に、注意はシアに向けたまま話を続ける。

「ええ。まあナギ兄さんとは同棲してますから」

「同居と言え、同居と。第一、同居と同棲ってのはな、違って……
……あれ？　同棲でも通用するの？」

簡潔に言つと、同居の主な意味は複数人が同じひとつの家に住むこと。そして同棲は前者の「複数人が」の箇所が「結婚していない男女が」に変わるだけなのだが、注意をシアにばかり向けていた矢薙はそこまで頭が回っていなかった。

「ほら私の言った通りでしょう。ナギ兄さん」

「い、いや待て。あれは好き合ってる男女が一つ屋根の下って意味だったはずだ」

同居と同棲の一番重要な違いを思い出した矢薙は、とにかく橘花のペースに持ち込まれまいと発言したが、

「それじゃナギ兄さんは私のことが嫌いなんですかっ?」

「じゃあ稟さんとカエちゃんの場合はケースも同棲になるのかな?」

「えっ? あ、そうなりま……ええっ!?!」

眼前と隣の少女たち三人が一斉にめいめいに異なる感情を含ませた疑問を返してきた。橘花の尋ね返しとシアの純粋な疑問はまだ納得できるが、なぜ楓は一度納得してから驚いたのか、その反応に天然の臭いを感じつつ、自身の不用意な発言に頭を抱えた矢薙だったが、多少の強引さをもってしても事態の收拾を図ることにした。

「まず橘花。お前のことは人として好きだから安心しとけ」

「は、はい。わかりました」

「で、次にシア　の前に楓。お前は稟のことが異性として好きなの?」

「え? あ、はい……って、何を言わせるんですかっ?」

「ん。それじゃシア。こいつらの場合はもう同棲でいいと思う」

「うつつ、一足先を行かれてるみたいでもどかしいッス」

「はいこれで疑問は解消、っと」

根源は矢薙が自らまいた種だ。強引だろうが火消しを済ませておかなければ、きっと後々まで引きずられるだろうし、そちらのほうが矢薙としては厄介でたまらなかった。

だが、

「私の言葉は無視なんですね。矢薙先輩」

「芙蓉先輩?　どうかしたんですか?」

「いえ、もういいんです」

「……え?」

突如矢薙から質問を投げつけられ、思わず投げ返してしまった爆

弾発言を当の矢薙自身にスルーされた楓は、橘花の心配空しく溜め息をつき小さく肩を落とす。そして、そんな楓の心中を察することなく橘花は首を傾げていた。

「そついや最後のほう、何でか楓、うなだれてなかったか？」

「そうですね。でも気のせいですよ、たぶん」

シアと楓と別れ、どこかデジャヴを覚える会話をした後、再び木漏れ日通りを見て回った矢薙と橘花は帰路に就いた。

橘花としても楓が肩を落としていた理由は深くわからないので曖昧に流したのだが、そもそも彼女に矢薙より優先する人物はいない。家族だろうと友人だろうと、兄弟姉妹の一人でもいたらまた違っていたのだろうが、仮定の話は始めるときりがない。

すると、

「あれ？ ナギ兄さん。そこにいるのって……」

「ん？ あ、ああ。あまり関わりたくない奴らだな」

何を見つけたのかと、橘花が指差した先を見た矢薙は小さくだが天を仰いだ。

「関わりたくないって、お一人はさつき一緒にいたじゃないですか」
二人の視界には紫色のツインテールの少女を間に挟んで話す稟と樹が映っていた。樹の嫉妬や皮肉に稟が拒否や訂正を繰り返す相変わらずの言葉の応酬をしているが、傍目から見るとただの時間の無駄だ。

全力で否定するなら真つ向から相手を否定する勢いでしないと、狡猾または樹のように賢い人間はすぐに論理的矛盾を見つけ出して突いてくる。かといって稟に樹ほどの駆け引き能力と度胸があるかと言えばそれは未知数で、矢薙のように真顔で事実と矛盾しない嘘をつき通せるような器用さを恐らく稟は持っていない。嘘と真実は相容れないとしても、嘘と事実は共存できる。目の前の「事実」は決して「真実」とは限らない。とはいえ、嘘をつくために嘘を重ねるようになっては仕舞いだが。

「よし橘花。ここは何も見なかったふりをして通り過ぎよう」

「いいんですか？」

「わざわざ藪をつついて蛇を出す馬鹿はいない」

何やらあの馬鹿二人の間にはミスターロリペドフィンなどの危険な単語が飛び交っているうえ、君子、危うきに近寄らずという素晴らしい格言も人界にはある。そう矢薙は自身の行動選択を正当化すると、早速それを実行しようとしたのだが、

「って、スルーですか矢薙先輩！」

「ちっ。目ざとく見つけやがって」

「ナギ兄さん……」

混雑しているわけでないが、人通りがあるにもかかわらず稟の声に呼び止められた矢薙は、嫌な顔を隠すどころか、橘花が呆れてしまっただけの舌打ちと棒読みの台詞をもって対応した。

「で、こんなところでどうした稟？」

「実はかいつまんで話しますと……って、最初から見てたでしょう？」

「見てねえよ。ミスターロリペドフィン」

「しっかり話聞いているじゃないですか」

軽いノリツッコミを試みた稟に矢薙がからかい混じりで返すと、稟は樹と紫髪の少女のことも忘れて食い下がってきた。さすがにこの呼称は対外的な人物評価において厳しいものがある。

「ところで、ロリペドフィンというのは何ですか？ 緑葉先輩」

「それはね橘花ちゃん。ロリコンとペドフィリアのことだよ」

そして対外的に厳しい理由を橘花が樹から教えてもらったところで、

「へえ、そうなんですか」

「少女性愛者と幼児性愛者か」

「全くもって羨ま じゃなくて、鬼畜ですよね先輩」

「ああ全く」

「そこまでストライクゾーン低くないですから！」

腫物を触るような三つの視線を一斉に浴びて、稟はここが公衆の面前であることも忘れて否定と自らの立場回復に走った。

「気にするな稟。きつとシアたちはお前を受け入れてくれる」

「でもそれ以外の人はそういう視線ですよね？」

フォローになるかどうかはわからないが、たとえロリコンでペドフィリアだとしても味方がいることだけは言っただつもりだが、矢薙からすれば、何をこいつは外面を気にするのだろうかと疑問に感じる。

この世を生き抜くのに真つ先に必要なものは体裁や対外的評価ではない。突如として三世界が繋がって早十年、未だ人を人として見ない輩がいるというのに、他人がいてこそ価値があるものを求めるのはきつと「否定」を知らないからだと言薙は思った。

「土見先輩。私は否定しませんが、肯定もしませんから」

「橘花ちゃんまで……ん？」

若干矢薙の背に隠れるようにして早速そういう視線を橘花から向けられ、完全敗北とばかりに盛大に落胆の溜め息をこぼす稟の裾をあの紫色の髪の少女が引っ張っていた。

「どうかしたの？」

「……りん。シアも、知ってる？」

「人形じゃなかったんですね、その娘」

「今のはなかなか失礼な物言いだな。橘花」

確かに矢薙もこの紫色のツインテールの少女を見たときはまるで等身大の人形かと思ったが、今もその感覚は抜けていない。むしろ、どこかで嗅いだような臭いがした。

「ですけど、初対面でここまで懐かれると本当に妬ましいですよね」「そうだな」

樹の言葉に頷き返し、ふと矢薙が思い出したのは橙次と林檎の三人で遊んでいた輪に橘花を加えようとした頃のことだった。学年など関係なく、村の学校に通っていた生徒ほぼ全員で遊び回る姿をいつも窓辺から見ていたのが橘花だった。

「で、稟。その娘の名前は？」

わずかばかりの懐古に浸ったところで、矢薙は紫髪の少女の名前を稟に尋ねた。少女に直接尋ねなかったのは、これでこの少女がどれだけ稟に懐いているかを推測することができ、かつ少女が主体的な行動を起こせるかどうかも把握できるからだ。

「……………」

「えっと、プリムラだそうです」

稟の服を引つ張り続ける少女がぼそぼそと耳打ちした言葉をオウム返しするように、稟は矢薙たちに少女の名前を明かした。

「プリムラちゃん、か」

「可愛い名前ですね」

先に稟といた樹もようやく少女の名前を知ったのか、橘花ともども記憶領域に記録するようにその名前を反芻する。その一方、矢薙は橘花がこの少女を人形だと感じたのはあながち間違いではないのではと感じ始めていた。

そして、

「稟。次の質問だ。何でシアを知っているのか聞いてくれ」

「えっと、ちよつと待ってください」

「……………」

「え？ ネリネとも知り合いなの？」

「……………うん」

提示した質問項目を少女に尋ねた稟が逆に驚いたのを見て、矢薙は橘花の評が間違いではないことを確信した。

「悪い橘花。荷物持ってきてくれ」

「え？ あ、はい」

左手に持っていた軽いほうの荷物を橘花に預け、矢薙はポケットから携帯電話を取り出した。まさかこんなに早く亜沙の焼いてくれた世話に感謝することになるとは思わなかったが、今なすべきことはわかっている。

「誰に電話するんですか？」

「シアだ。さつき会っただろ。次にネリネも呼ぶ」

これはお節介などではなく、あくまで問題解決と人間関係の土台作りなのだと言いつつ聞かせながら、矢薙は編入後一気に倍近くにまで登録件数が増えた電話帳を開き、検索をかける。まずはさ行から。すぐに検索できた。

『もしもし?』

『悪いシア。今、SILKYっていうゲーセンの前にいるから来てくれ』

『え? 今からですか?』

『稟とお前の知り合いもいるから、すぐ来い』

簡潔に用件を伝えると、通話を切る。次いでな行を開き、ネリネにもかける。

「矢薙先輩って容赦ないね。シアちゃん相手に呼び出しとか」

「ナギ兄さんはそういう人ですから」

「これはまあ、担任の先生とか苦労したんじゃないか?」

「よくわかりましたね土見先輩」

矢薙とは十年近くの付き合いになる橋花は、一度なすべき物事を決めたら矢薙はそこから常に最善策を取るようになっていることを知っているが、まだ付き合いの浅い稟と樹は容赦なく地位や肩書きを考察から排除し、さらには性別などまで排除しかねない勢いの矢薙をただ遠巻きに眺めるしかなかった。

『ああ。ネリネか? 今すぐ木漏れ日通りのゲーセンまで来てくれ』

『い、今からですか?』

『稟が今すぐお前に会いたいと言ってる。両手が塞がるくらいのプレゼントを持ってな』

『今すぐ行きますっ』

曲りも何も神界の王女を携帯電話で、しかも命令形で呼び出すという暴挙にも当の矢薙は平然と同じ行為を今度は魔界の王女にもやるのける。しかも、今度は嘘まで混じえて。

「何平然と嘘ついてるんですか。矢薙先輩」

「嘘じゃない。お前がその娘をお姫さま抱っこしてネリネにプレゼントすればいい。実は俺の隠し子です、って」

「なっ？」

何を言っているんだこの人はと、ただただ啞然とするばかりだった稟だが、矢薙の取った対応の所々に現れる強引さと一連の対応の後始末がすべて自分に降りかかってくることに気づき、今日一日で最も大きな溜め息をついた。

「確かにそうすればナギ兄さんは嘘つきじゃなくなりますね」

「うつつ。この状況を二人にどう説明したら……」

「仕方ねえな」

それは妙案だとぼんと両手を叩く橘花に対し、両手で頭を抱える稟の前に、矢薙は残る片方の荷物を樹に預けると、ケータイを財布に替えてゲーセンの中へ入っていった。

「何をやる気ですか先輩？」

後をついてきたのは樹だった。矢薙は千円札を三枚ほど両替機に投入しながら答える。

「冗談とはいえ、嘘ついたのは俺だからな。その責任を取る」

「って、まさか」

「ちよつとばかし荒らしてくる」

そう言つと、ありつたけの百円玉を握り締め、適度に巨大なぬいぐるみをプライズにしているクレインゲームの筐体に向かっていった。

同時刻、一人の少女のケータイ電話に通話着信が入った。

『誘導対象、常時監視対象トノ接触ヲ確認。』EXP-CS-4』

第四ステージヲ終了シマス。コノママ次ステージニ移行シマスカ？』

ケータイを耳に当て、届いた合成臭さが抜けていない機械音声に對して少女はただ一言、ああ、頼んだと返して通話を切る。そこからさらに短縮ダイヤルで別の人物へと電話をかけた。

『もしもし？』

『僕です。あなたの予知どおり対象が接触しました。目視でも確認済みです』

ケータイ電話の向こうから少女が聞き慣れた男性の声がすると、少女はいつものスタイルで淡々と事実を述べていったが、
『わかった。あと、帰ってくる前にひとつ頼まれてほしいことがある』

携帯電話越しとはいえ、男性から直接頼みごとというのも珍しいと少女は思った。会話の端々に見える態度などは男性の希望で碎けているものの、本来少女はこの男性付き従う立場でしかない。命令という形での指示はあれど依頼というのは滅多になく、これはよほどの面白いことがあったのだと少女はこれまでの経験則から弾き出した。

『何でしょうか？』

『さつき、朱雀院から面白い知らせが来た。神界で反神王派の動きが加速しているらしいから、気晴らしに相手してやってくれ』

『思い切りやってもいいんですか？』

男性に尋ねると、やはり自らの経験則は正解だったと確認できる答えが返ってきた。崩壊を始めたこの世界を大きく変えるような出来事を裏から操ることほど面白くもくだらないことはない。彼らは今すぐ政治を変えろと言われたらすぐさま表舞台の権力者たちを葬って代役の人形を立て、傀儡政権を樹立することもできる。それだけこの少女と男性のような人間は三世世界のあらゆるところに根を張り、未来を積み木遊びかジグソーパズルの感覚で捉えているが、彼らは決して表舞台に姿を見せようとしない。

『ああ。アポカリプスでも放って全部消してくれればいい』

『それでは何も面白くありませんね』

少女はばつさりと言いつ返す。男性が口にした名前は、少女の使用できる魔法の中でも飛び切り破壊力のあるひとつだった。とにかく破壊というよりは消滅に近い作用を、それも半径数千キロの範囲で持っているために少女自身も滅多に使わない。

『そうでなくても最近デスクワークばかりでしたから、少し身体を動かしたいんです』

男性に自らの希望を告げながら、少女は視線を足元の雑踏へ動かす。商店街を行き交う人波の中に誘導対象だった少女と常時監視対象の少年の姿を捉えると、口元に小さな笑みを浮かべた。

『あ、そう。だったら全員斬り刻んでくれればいい。身元がわからなくなるまで』

『ええ。言われなくても、そのつもりです』

通話を切ると、少女が手にしていた携帯電話はいつの間にか巨大な死に神の鎌へと変わっていた。鏡のように研ぎ澄まされた刃まで漆黒のその鎌こそ少女の遊び道具のひとつ。そして残る遊び道具である反神王派の面々の命を求め、少女は神界に直接座標を決めた転移魔法を準備する。そして常時監視対象の黒髪の少年と、その隣にいるアツシユオレンジの髪の少年を一瞥すると少女は一陣の光に紛れて姿を消した。

八年前の業は深いねえ、との言葉を残して。

Phase 3: Before the Storm (後書き)

ここまでで第1章が区切りとなります。

展開は原作どおりでなくても、会話や行動の端々は限りなく原作どおり再現しようとしているんですが、これがなかなかオリジナル要素を絡めると厳しいですね。やはりEssence+をプレイしてない以上、デイジーとマツリの再現が非常に難儀になっているわけでした。

それでも絡めますけどね、何とかして。

けれどもともと作者がシリアスやハードアクション、エロティックバイオレンスが好きな人間なので……グロさだけで18禁にはならないと思いますが。

じゃあなぜ元ネタをこれにした？と言われますと、真たちの明るく清らかな日常と『雑種』を始末する姉弟の暗く汚れた日々とのコントラストに、矢薙や橘花の持つ痛々しいまでの現実を描きたかっただけで、あとは別サイトに投稿してあるリメイク前の当作品を含むシリーズで描きたかった多少の社会風刺と現実問題です。

ちよつと小難しい題材を描くのに原作の世界観を利用しているだけにすぎませんので、あくまでそういうのが苦手・嫌いという方は今からでもお引き取りくださったほうがよろしいかと思えます。

それでは他の優れた方々の小説でも見ながら、第2章の開幕までお待ちください。

以下、初出の単語群の説明です。

・世界樹の三女：謎の男性と少女の間に共通するプリムラの認識。わざわざ名前で呼ばないことに意味がありそうだが、現時点でその詳細は不明。

だが三女がいれば当然長女と次女がいるわけで。

・ピーカン：撮影用語における晴天。その由来は煙草のピースの缶やらピント合わせが容易な状態（「Perfect Condition」）からなど諸説あるが、詳細は不明。

・EXP-CS-4：「Experiment with Cunningham Strain？」の略称。プログラムであるCunning Strain？を使用しての大規模実験のコードで、報告書などにはすべてこのコードで記載されている。また、この実験は謎の男性と少女たちが先導しているようで、そのために稟たちの周囲に時折出没していたりするらしい。

・朱雀院：表の世界だけしか知らない人間は誰一人として知らない、この世のあらゆる情報を扱う特殊な一族に共通する姓。また、姓があることからして想像されるのは人族である。

情報屋と言えば話は早いだろうが、とにかくあらゆる国家の機密情報から国際指名手配犯の潜伏場所、現役トップアイドルの本当のスリーサイズやとある家庭の夕食の献立まで何でも知っているため、彼らを知る人からは頼れると同時に畏怖の念を抱かれている。

・アポカリプス：apocalypse。黙示。一般的には聖書におけるヨハネの黙示録を指すが、ここでは先に登場していた謎の少女が使用する攻撃魔法名。直撃箇所から半径数千キロに存在するあらゆる生命体と建造物を一瞬で破壊・消滅させる威力を持ち、まさにアポカリプス（「この世の終わりの日」）のような惨状をもたらす

が、現時点の魔法学においてそのような魔法は存在しないとされている。

Phase 1: Voiceless Sign (前書き)

ここから第2章です。

一応ですが、この章以降は特に独自展開や独自解釈が多々含まれてきますので、それらが苦手だという方はお引き取りください。

「おい、そのヘタレ」

「はい？」

あれから十分ほど。矢薙の声に稟が振り向くと、そこには大量のもふもふした物体があった。

「や、矢薙先輩。これはいつたい？」

「この中から適当にネリネにあげるやつ選べ」

四つか五つはある、プライズのぬいぐるみを詰め込んだゲーセンの袋を足元に置き、矢薙は稟に選ぶよう迫る。

「え？ でもこれ」

「先輩が取ってきたんだよ。稟があまりにも惨めだからね」

「久し振りにゲーセン荒らしですか」

「ああ。半日で高そうなプライズを根こそぎ奪ってつたときを思い出した」

よく見ると、矢薙と一緒にゲーセンに姿を消した樹の手にもプライズが入った袋が握られていた。こちらはマグカップやタペストリーなどの小物で占められている。店側としては迷惑そうな行為だが、橘花も樹も矢薙の行動には肯定的な雰囲気だった。

「早く選べ。お前が取ったという事実が何としても必要なんだ」

適当に六十センチはあるうかというクッションのプライズが入った袋を突き出し、矢薙は稟に改めて選択を迫る。だが、嘘をつくことに躊躇があるのか、稟は渋い顔をしたままだった。

「いいか稟？ これは俺の考えだけだな」

溜め息をつく、矢薙は適当な袋の中からペアになっている蜜柑を模したオレンジ色の円形クッションを取り出し、稟に押しつけるように渡して告げる。

「人は自分の足場になる事実があれば生きていけるんだ。そこにたとえどんな嘘や虚構が混ざりこんでいようともな」

「つ。わかり……ました」

台詞とは対照的に表情はどこか納得していないようだったが、稟は矢薙が適当に見繕ったクッション二つが入った袋を受け取る。すると、タイミングよく遠くから稟の名前を呼ぶ少女たちの声が聞こえた。

その頃、人界。フランス、パリ。

「それじゃあ chanter」

三つのグラスがぶつかって奏でる軽い音が注がれた透明な薄桃色の液体を揺らし、まるで義兄弟の杯を交わしたかのように三人とも無言でグラスに口をつける。

「で、よほどの大事ですか？ あなたが出向くなんて」

透明なシャンパングラスに注がれたフランス生まれの薄桃色のリキュールを一番先に飲み干し、母親譲りの翡翠色の髪を風になびかせて少年は尋ねる。その口調と風体や服装はとも大人びており、整髪剤で軽く逆立たせて固めた髪型だけが幼さを感じさせていた。

「別にいいじゃないか。久々にこの死人の味を現地で飲みたくなっただよ」

少年の質問の先、一口だけ残した桜リキュールをグラスの中で軽く回しながら女性は答えた。飄々とした物言いとは対照的に、絵巻物の十二単を思わせるほど長い裾の着物をまとう彼女はどこか儂げに微笑むが、

「あら。ではこれを味わうのにエスプリなどは不要ということですね」

その儂い表情が演技であることを最初から見抜いていた、少年と同じ翡翠色の髪の少女は早速二杯目の薄桃色の液体をグラスに注いでいた。

「残念だけど、肴にしては苦い話がある」

「と言いますと？」

「また新たな『雑種』ですか？」

女性の口から出た苦い話という単語に少年と少女の視線はナイフのように鋭くなり、同時に瞳の中に憎悪と殺意の下火が着き始めた。「昨夜、魔界にある研究所の一部が何者かによって爆破された」

「魔界となると、どうせアンバーカラーでしょう」

「ああ。恐らくそうだろうね」

一口で飲めるほどしか注げないグラスに二杯目を注ぎ、少年は女性に尋ねる。本当に苦い話だ。少年少女が始末している雑種の件ではないとしても、アンバーカラーに代表されるような集団・組織が軽々と話題に出てくるという苦さに少年は強烈な吐き気がした。

「どうでもいいことです。私たちは神族と魔族の未来になど興味ありませんから」

だが今の話に苦さだけでなく血生臭さまで感じた少女は、憮然と二杯目を飲み干し、グラスの中に残った雫を飛ばそうとグラスを煩わしげに振る。

「ステレオタイプの君たちにはそうかもしれないけど、世界的な問題はその先だ。『娘』が籠の外に逃げ出したらしい」

「逃げた猫一匹くらい、放置しといてもいいでしょう？」

「もともと鎖に繋いで飼える代物ではありませんし」

神族と魔族のみの合同捜索隊の共有情報の上では行方不明となっている一人の少女を、そこらの一匹の飼い猫扱いする少年少女の感覚をおかしいとはこの女性も言わない。だが、それは当該少女が一介の少女であった場合だ。

「それがそうもいかない。下手に彼女の魔力を暴走させると都道府県がひとつ消える」

「そりやまるでサクリファイス並みの威力っすね」

サクリファイス　生贄の名を冠されるそれはここにいる三人のような人間の最終手段として本能の奥深くに刻み込まれている選択肢。相手もろとも広大な周囲からあらゆる生命を奪う、語の意味通りに自らの命を犠牲にして放つ究極にして最終の幕の引き方だ。

「ですがその程度、私たちがなくても」

「もちろん別のところが名乗り上げて動いたさ。あの『神殺しの一族がね』」

「はあ？」

「なぜ彼らが？」

逃げ出した猫一匹の対処に神様を討ち滅ぼしてしまったような者たちが腰を上げた。よく許可が下りたものだとも思ったが、この明らかかな異常事態に少年少女は声を重ねて女性に尋ねるが、

「そこは私にも解せないんだよ。彼らの悪い癖が出なきゃいいけど」
空になったシャンパングラスを置き、女性はふと東雲に染まり始めた異国の空を仰ぎ見る。男一人に女の二人のその場を少しづつ強くなってきた風が吹き抜けていく。今までの平穩はすべて仮初で、これから三世界を巻き込む巨大な嵐の前の嵐に過ぎなかったというのだろうかと考える彼女の視線の先は、まだ夜明けを告げない太陽の脆弱な輪郭を見つめていた。

夜、光陽町。芙蓉家リビングにて王としての政務から神王と魔王が帰ってくるのを稟たちは待っていた。

事実上は稟がプレゼントしたクッションを大切そうに抱き締めるシアとネリネ、それを時折羨ましそうにちらちら見ながらも、橘花と一緒にプリムラの身の回りを整える楓、そして誰よりも神妙な面持ちで二人の王の到着を待ち続ける稟を遠巻きに見つめ、矢薙はここにいる面々に悟られぬよう手札を揃えていく。

あの後、矢薙から呼び出されたシアとネリネに、まずは稟が両手を塞いでいたクッションを渡し、そして本題である少女と対面させた。恐らく無意識にしたのだろうが、矢薙は稟のやり方がなかなか汚いと感じた。プリムラを見たときのシアとネリネの驚き具合が尋常ではなかったのもあるが、稟が取った行動は裏を返せば先に二人の足をプレゼントで縛りつけたようなものだ。

まあ俺も同じ手段で攻めるけどな、と揃いつつある手札を見て矢薙は小さく自嘲めいた笑みをこぼす。それからプリムラが本来は魔

界の施設にいたことを知り、なぜここにいいのかその経緯を尋ねようと神王と魔王を待っているわけだが、こんなときに限って経つのが遅い時間を刻む時計の音がやけに癪に障る。

「どうですか皆さん？ こんな感じで」

芙蓉家到着後、楓の許可を得て風呂を借りて、その間に今日の買物の片づけがてら橘花の服を持ってきて、風呂上がりのプリムラに着せて髪を梳き、表に出しても恥ずかしくないように格好を整えた橘花が全員に声をかける。

そして、おめかしタイム終了のコールを受けて、稟たちがプリムラのほうを見やると、

「ああ。ありがとう橘花ちゃ……………ん？」

「えっと……………」

「あ、あの、橘花さん？」

啞然とする稟、シア、ネリネの視線の先、そこにはなぜか黒を基調としたゴシック調の服に身を包み、同色の小さなシルクハットのような帽子を斜めにかぶり、またもや同色の猫耳カチューシャをしたプリムラがいた。

「何ですか？ 何か変ですか？」

「橘花。帽子は室内で被らせるな」

「あ、そうでしたね」

稟たち三人の反応に首を傾げる橘花に矢薙がまずモラル的問題を指摘すると、橘花は素直にプリムラの頭から帽子を取る。

「いやいや矢薙先輩。ツツコミどころ違いますよね？」

「カエちゃんも一緒にいながらこれなの？」

「リムちゃんをお人形扱いですか？」

「えっ？ いえ、こっちのほうが可愛いと橘花ちゃんが言うので。」

駄目でしたか？」

いや駄目とかそういう問題じゃないだろうと思いつつ、あまりに橘花チヨイスの衣装を違和感なく着こなしていたプリムラに驚きつつ稟は猫耳カチューシャも取り外し、少なくとも自分とシアとネ

リネはまともなことを言っていたはずだと自身を納得させ、心を落ち着かせるが、

「でもほらほら芙蓉先輩。ここをめくると猫の尻尾がぴよこん、つて」

「あつ、本当ですね。可愛いで」

「楓、橘花ちゃん。もうそこらへんでやめてくれ」

「は、はい」

「すみませんでした先輩」

どうやらスカートの下にもまだ隠されていた様子。後ろの裾をめくった橘花と、顔お出した猫の尻尾の小道具の可愛さにはしゃぐ楓だったが、大きく溜め息をつきながら制止を懇願した稟の前に、二人とも借りてきた猫のように身を小さくして頭を下げた。

すると、

「………橘花」

楓と一緒に風呂に入れようと、橘花がスカートの後ろをめくろうと、今まで無反応だったプリムラの口について出たのは何と橘花の名前だった。

「え？ 私？ 呼びました？」

「呼んだ」

「どうかしたんですか？」

「この服、ここがすーすーする」

プリムラのすぐ隣に膝をつき、顔を見上げるようにして尋ねる橘花に、プリムラは大きく弛んでいた襟ぐりに指を突っ込み、胸元を大きく前に広げた。その範囲たるや、なだらかな丘の頂上の薄桃色した乳首どころか鳩尾までもが横から見えていた矢雑にもはつきりが見えた。

「ぶ………っ！」

「ちよ、ちよーつと待つツス！」

「そ、そこは………」

「み、見えてしまってますっ」

「男の人は見ないでください！」

楓が淹れたお茶を吹き出す稟、慌てて立ち上がるシアに口元を手で覆って呆然とするネリネ、慌てて胸元を隠しに走る楓と橘花を傍観しながら、矢薙はやっぱりそうだろうなと

一人で勝手に納得した。稟たちはすっかり忘れていたようだが、プリムラの凹凸の少ないスレンダーな身体に、日頃から胸にメロン二つをくつつけているような橘花の服が合うわけがないことを。

騒がしくてやってられないと壁に寄りかかったまま矢薙は腕を組み、視線をリビングの出入り口に向けたとき、ふと窓の外に二つの違和感を覚えた。どうやらお待ちかねの双頭が到着したようだった。そしてリビングのドアが開くと、頑強そうな身体を薄手の羽織に包んだ男性と、無地のセーターと細身のパンツを黒で統一した男性が現れた。

「こんなところにいたのかい。プリムラ」

「全くだ。心配したぜ」

二人の男性は真つ先に視線をストローでジュースを啜るプリムラに向けたが、当の本人はどこ吹く風でジュースとどこからか出てきたチーズケーキを食べていた。そしてひととおりプリムラの無傷を確認すると、二人の男性はその視線を稟と娘たちに向け、最後に矢薙と橘花に向けた。

「で、稟殿。この二人は誰でい？」

「あ、そういえば紹介がまだでしたね。その壁際にいるのが」

「鈴城矢薙。数日前にバーベナに編入してきた。一応、こいつらの先輩になる」

「鳳仙橘花といえます。土見先輩たちの一学年下になります」

どこから見ても、ガタイのいい、とても娑婆の人間とは思えない男性に尋ねられた稟が二人のことを紹介しようとしたが、矢薙は不遜に、橘花も丁寧な頭こそ下げたが稟の言葉を封じるように先んじて自らの名前を明かした。

「さしずめナギちゃん和橘花ちゃんといったところかな。それで稟

ちゃん。この二人はどうしてここに？」

どこぞのマジシャンにいそうな風体の男性に初対面ながらいきなり亜沙と同じ呼び方をされた矢薙は、つい罵詈雑言が飛び出しかけた口を閉じると、そのまま壁にもたれかかる。この男性にあの彼らのような悪意は感じなかった。ならば無視すれば済むことだと言い聞かせ、矢薙は傍観者を気取ることにしたが、

「実はですね、先輩がシアとネリネを呼んで確認を」

「俺は二人を呼び出しただけで、捕まえたのは稟です」

一番肝心な箇所をすっ飛ばして説明をしようとした稟の言葉を遮り、矢薙は自分が関わった場所だけを抜き取って当時の状況を説明した。

「そ、そうなのか稟殿？」

「え？ あ、はい」

「そうだったのかい。さすが稟ちゃんだね」

男性二人に囲まれ、どこか引きつったような笑みを浮かべる稟。傍から見れば何ともないはずの光景で、シアたちも口元に笑みを浮かべているが、矢薙はさりげなく切った手札から得た違和感を固める証拠を集めていた。

「あの、ちよつとよろしいでしょうか？」

そこへ、小さく拳手しつつ声を発したのは橘花だった。が、

「どうした？ 鳳仙の嬢ちゃん」

「この娘 プリムラちゃんって、どこにいたんですか？」

「それは、魔界だよ」

「魔界のどこですか？」

「そ、それは……」

「ご両親やご家族も魔界にいるんですか？」

「いや、それは……」

どこことなく、ではなく明らかに橘花の質問に対する細身の男性の受け答えに動揺が見られた。矢薙は彼がただ単に女性に甘く優しいだけのフェミニニスト気取りかとも思ったが、橘花が興味半分などで

はなく、純粹にプリムラのことを案じて質問していることを見抜いているだけに無碍に会話を断ち切れないのだろう。

すると、

「わ、私と一緒にいたんです」

橘花の問いに答えたのはネリネ。だが、橘花の攻勢は止まない。

「そうだったんですか？」

「はい。実は私、小さい頃は身体が弱くて、それで」

「でもそれはプリムラちゃんの現状と何ら関係ありませんよね？」

「えっ？」

それがあまりに冷たい言葉だったのか、橘花の言葉に、その矛先を向けられたネリネだけでなく稟たちまで固まってしまった。明るく純粹で少し天然だと思われがちな橘花だが、これでも観察眼や論理的思考は他人の顔と心情を窺いつつ自分をすり合わせてきた矢薙に近しいものを持っている。

疑わしきは追及せよ。そのときだけの感情論やおぼろげな確証ではなく、論理的・物的に確立された言葉の刃をもってして、橘花は視線をネリネの赤い瞳に吸い込まれそうなほど固定し、話を続けた。「私はプリムラちゃんのことを聞いているのであって、ネリネ先輩の昔話を聞きたいわけじゃないんです」

「き、橘花ちゃん？」

「橘花。もうそれくらいにしておけ」

「でも、ナギ兄さん」

「誰にも答えたくないことだってある。　そうだろ魔王様？」

思わずプリムラを挟んで隣に座っていた楓が制止に入ろうとしたが、きつと無理だと踏んだ矢薙は自ら橘花のストッパーとなり、その賛同を細身の男性だけへと向けた。

「あ、ああ。すまないね二人とも」

「そういうことだ。橘花。わかってやれ」

「……はい」

矢薙に諫められ、空気の塊となってしまったいくつかの追及を吐

き出すと、橘花は自身を納得させるように居住まいを直し、矢薙の言葉をすべて受け入れるように小さく頭を下げた。

「悪かったな稟、楓。急にお邪魔して」

「え？ いえ」

その場の空気に居心地の悪さを感じたのか、壁にかけられていた時計を見ながら矢薙は背中を壁から離し、帰る雰囲気を放ち始めた。それを素早く察知したのか、橘花も残りのお茶を飲み干すと腰を上げて帰宅準備を始める。

「あ、橘花ちゃんのお洋服は後で洗って返しますから」

「いえ。何ならそのままネリネ先輩にでもあげてください」

帰る前にと楓はプリムラが来ている橘花の服の背に手を当てながら言伝を口にするが、橘花はなぜか返却どころか譲渡先にとネリネを指定してきたが、

「はい？ なぜ私なんですか？」

「それ、『ここ』がきつくなってきたので」

ご指名の理由を尋ねたネリネにしれっと自らの胸元を指差して答えた橘花に、一瞬だけだが確実にその場の空気が凍りついた。主にシア、ネリネ、楓の三人の周囲だけが。

「い、遺伝子ひとつでここまで差が出るなんて」

「運命は残酷です」

「乗り越えられない壁って、あるんですね」

「………え？」

がくりと首を垂れる三人を前に、稟だけがその理由がいまいち把握できていなかった。幸せな奴らだと思いつつも、矢薙も嫌味としか聞こえない橘花の言動に小さく苦笑してリビングを後にすることにした。

「急に邪魔して悪かったな」

「では先輩がた。私たちはここで」

芙蓉家の玄関先、軽く言葉を告げるだけの矢薙と丁寧に頭を下げていく橘花は踵を返し、家路に就いていく。

そして、残されたのは稟たち七人。

「でも、本当にいいんですか？」

先に行く矢薙とその一步半後ろを歩く橘花　まるで昭和一桁世代の夫婦像が見えなくなるまで待つて真つ先に口を開いた稟の質問は、今も自身の着ている服の裾をぎゅつと握り締められている少女のことだった。

「ああ。プリムラのことなら問題ねえぜ」

「ここまで稟ちゃんに懐いているのを引き離すのも可哀想だしね」

「はあ。それならいいですけど」

これは絶対に服の裾が伸びたと確信できるほど握り締められては、稟としてもその細い腕を振り解くのは筆舌に尽くしがたい気持ちになる。結局、肝心の家のことを仕切っている楓が快く引き受けてくれたのもあって、しばらくはプリムラも芙蓉家で暮らすことに話が決まっていた。が、

「けど、すまねえが稟殿。少し男だけで話してえことがあるんだ」

「私もだよ」

「え？　二人ともですか？」

突如として王としての厳格な雰囲気をもとつた二人を前に、稟は反射的に心を身構えさせた。ドラマのひとつでも見ていれば、人がこういう表情をするときの相場は決まって重い話が苦しい話である。しかも、つい先程プリムラの魔力が暴走すれば都道府県がひとつ消えてしまうという予想の範疇外の事実を聞かされたばかりだ。これ以上の重苦しさを求めるのは危険察知能力が麻痺している愚者か筋金入りの被虐趣味者くらいだ。

「なに、話してえ内容は俺もまー坊も同じはずだ」

「だと思つよ。だからネリネちゃんたちは」

「わかりました」

「それじゃお父さん。先に帰ってるね」

「私たちも、先に戻っていますね」

魔王の言葉と視線を受け、その意味を理解したシアたちもめいめ

いに家の玄関を開け、姿を消す。そして、一陣の夜風が吹き抜ける
と、腕を組み直した神王の言葉から話が始まった。

「あの鈴城矢薙って坊主なんだが……」

「矢薙先輩がどうかしましたか？」

いきなり飛び出してきたのは、つい数日前に亜沙を介して紹介さ
れた先輩の名前だった。

「まだ稟ちゃんたち気づいてなかったようだけど、あの二人はただ
者じゃないよ」

「あの鳳仙橘花って嬢ちゃんもだが、特にあの坊主の視線は厄介だ
ぜ」

「どういう意味です？」

プリムラのことを気遣ってくれて先程まで一緒にいた矢薙と橘花
の、両王からの思わぬ評に稟は多くの驚きとわずかばかりの両王へ
の疑いをもって尋ねた。

「あの二人の視線、人の内側を見てくるね」

「よく言えば、外見や体裁で他人を見ねえってことだ」

人の内面を見てくるのであればそれはそれでいいことではないの
か、と稟は渋い表情を崩さない両王に尋ねようとしたが、

「　　が、悪く言えば何もかも見透かされる可能性もあるってこと
だ」

「しかも、探り合いにおいては十中八九あちらが上手だよ」

初対面の、あのわずかな時間で両王が感じた矢薙と橘花の分析に、
まだ二人のことを詳しく知らないことも重なって稟は否定の言葉を
返せなかった。ただ、確かに矢薙は初対面の男性二人のどちらが魔
王かを言い当て、橘花はプリムラの件で魔王に食いつき、毅然とし
た態度でネリネを言い伏せている。ともにうまく相手を見て、相手
の出口を探ったうえで判断だとすると、その堂々とした立ち振る
舞いも感服するばかりだ。

「しかもあの態度からすると、私たちにも遠慮ないだろうね」

まずは矢薙が上から強気に出て強制的に口を割らせる。もし相手

が意固地になれば、今度は橘花が下手を装って虚を突いてくる。今回の流れはまさにそれだった。両王の言うとおりだったとすると、矢薙がその場の空気と会話の流れを操り、生まれた隙を橘花が追及する役割ができていたと稟は思い返す。

「で、稟殿。あの坊主はプリムラのことについて何か尋ねてきたか？」

「え？ いいえ。特には」

「それならいいんだけど」

「何かあるんですか？ プリムラのことについて」

「プリムラはあのとおり、感情が不安定だからね」

「まあ、そういうことだ」

「はあ………わかりました」

プリムラのことを心配するより、まるで矢薙の出方を窺うような両王の質問と安堵の溜め息に違和感を覚えた稟は逆に尋ねるが、自らの質問はどこか曖昧にはぐらかされた。濡れたシャツがべたつと肌に張りついたような気持ち悪さを感じつつも、稟はその居心地の悪さを振り払おうと、両王が導く話の終わりに素直に従うことにした。

一方その頃、帰路の矢薙と橘花は。

「思い出してしまいました。十年前にも見たあの瞳を」

ふと漏らした橘花の独り言に、矢薙は不意に足を止めた。一歩半の距離を全く縮めも離れもせず橘花も足を止めたが、矢薙は再び歩き始めると前を向いたまま後ろに従う橘花に尋ねた。

「その瞳、プリムラにか？」

「はい。プリムラちゃんも全く同じでした。あの頃のナギ兄さんと」

「そう、か」

橘花がそこまで言うからには相当だ。

十年前まで矢薙は自分の顔を知らなかった。鏡など存在さえ知らなかった。人付き合いもその本質も知らなかった。他人を信じると

いうことも教えられていなかった。最初は吐き気を催したあの夜伽に結局ほぼ毎日のように参加していたのは、初めて自覚して抱いた欲求が性欲だっただけのこと。そう矢薙は自らのことを客観的に思い返したことがある。食欲と睡眠欲は社会的生命活動の持続に最低限必要なもので、性欲だけは後天的に操作できるのかもしれない。

「あの娘には何が必要だとお前は思う？ 橘花」

「決まっています。それが単なる我がままでも歪んだ欲望でも、殻を破らないことに雛は孵化できません」

だとすると、あの日の矢薙に殻を破ることを教えてくれたのは祖父と橙次、林檎だ。余計なお世話だとは思いつつも矢薙はプリムラに欠如しているものを橘花に尋ねてみると、橘花は矢薙の考えていることと全く同じことを口にした。

「だろうな。俺がそうだったみたい」

ふと矢薙は村に住んでいた頃に読んだ本を思い出す。記憶を辿ればまだ開門から三、四年しか経過しておらず、人族がまだ神族と魔族に困惑した様子で付き合っていた頃だったはずだ。そしてその本には三種族にはそれぞれの「アンリミテッド」があると書かれていた。神族と魔族のは忘れたが、人族にあったのは。

同時刻、神界。

「へえ、随分と明るいとこで面白い話してるんだね」

「誰だ？」

突如聞こえてきた少女らしい声に、まだ真昼だというのに酒場に集っていた男たちは即座に全身の感度を上げる。視覚、嗅覚、触覚の鋭敏さ、そして脳の情報処理能力と反射神経を極限まで高め、臨戦態勢を整えた。

すると、

「君たちだろう？ 今度神界の王都でテロ起こす人たちは」

「てめえ！ いったい何者だっ？」

律儀に木製の酒場のドアで軋んだ音を奏でながら姿を見せたのは、頭から爪先まで漆黒のローブをまとった人物だった。男たちの中で

も下つ端連中は威嚇を続けているが、酒場の奥に座っていたリーダー格の男は無言ながらローブ越しに見えるその肩幅や背の高さ、声色から十代後半から二十代の女性であることを即座に見抜いた。

「なあに。僕はただ通りすがっただけの『アンリミテッド・デザイア』さ」

「何言つてやがんだてめえ！」

「ふざけたガキだ！」

無限の欲望。ふと少女が呟いた言葉に強烈なデジャヴを覚えたりリーダー格の男をよそに、知恵の足りない下つ端連中は少女をここから排除しようと掴みかかる。が、

「ふざけてなんてないさ」

ローブの胸倉を掴んだ男の腕に、白蠟のような少女の手がそつと触れた次の瞬間、

「っあ、ぐ……う、あ　っ？」

「何？」

「なっ？」

男たちが見たのは、少女に掴みかかった仲間が全身から血を吹き出して絶命していく様。そして、悲鳴すら上げられずに斃れ伏す仲間の向こうに見た、少女の口元に浮かんだ残酷な笑みだった。

「言っただろう？　僕は通りすがりの『アンリミテッド・デザイア』だと」

「　っ！」

返り血を頬に浴びながらも笑う少女に、ようやくリーダー格の言葉は思い出した。『アンリミテッド・デザイア』は「どんな人族」の総称かということ。

「さて、君たちには僕の暇潰しに付き合ってもらおうよ。その命でね　これから買ったばかりのビデオゲームでもするようにそう告げた次の瞬間には、少女の近くにいた別の仲間の身体が細切れにされていた。

翌日、矢薙は屋上にいた。

時折吹き抜ける風がまるで身体を包み込んでくれるような心地よさを感じつつ、瞼を閉じて授業中のため誰もいない静寂に身を預け跳ね起きた。

強烈な気配。首筋をさすると鳥肌が立っていた。記憶にある限り、十年前のあの日まで刻み込まれてきた習性ともいえる自らの反応に悪態すら吐く間もなく、矢薙はフェンスに駆け寄り、誰かいるのかと眼下を眺める。校舎裏、体育館脇、校庭と視線を移していき、ふと校門に人影が見えたときには既に駆け出していた。

授業中だが足音は気にしない。もし呼び止められても無視するつもりだったが、運よく誰ともすれ違わず、気づかれなかった。思い返したらみんな優等生揃いだなと吐き捨てるところも今はその皮肉を拾ってくれる人間はいない。恐らく、今矢薙の視界に入ったばかりのこの少女も。

「どうした？ こんなところで」

上履きのままだということも構わず、矢薙は荒れた呼吸を整えながら校門から一步も動いていなかった少女に尋ねた。

「……や、なぎ？」

「お？ 覚えてくれたのか。俺の名前」

「うん」

「そっか。そいつは嬉しいな」

威圧して恐がらせては意味がないので、わずかばかりの親近感を滲み出しながら矢薙はゆっくり歩み寄っていった。少女も首を小さく縦に振ってくれたので、矢薙は手を伸ばして軽く頭を撫でてやり、尋ねた。

「で、プリムラ。お前はなぜここにいる？」

「が、いない」

「え？」

「が、どこにもいない」

きつと何かの聞き間違いだ。そう信じたかった。それはシアでも

ネリネでも、稟でも楓でもない。プリムラが口にした人物の名前を、矢薙は知らなかった。

「……………に、あいたい」

「っ！」

呟くように漏れたプリムラの言葉に、矢薙の心臓が跳ねたと同時に脳裏を記憶の断片が激流のごとく横切っていった。青い空、風、無数の男女、巨大な黒い壁、そして純白の花弁と　思い出したくもない苦痛の数々。

「落ち着け。プリムラ」

今、一番落ち着いていないのは自分だろうと自覚しながらも、そこまで考える余裕がなかった矢薙はまるで花の茎のようにすぐ手折ってしまいそうなプリムラの両腕を掴んだ。たとえ藁であろうと、確かなものを掴んでいないと流れ込んできた記憶の渦に自分自身が吞まれて消えてなくなってしまうそうだった。

「今は授業中だ。終わったら稟たちに会わせるから」

「……………わかった」

プリムラの視線の先、瞳に隠しきれないほど激しい動揺の色を浮かべる矢薙はいつの間にか汗が滲んでいた手のひらを拭くと、プリムラに差しのべた。そして、冷たい感触を握り締めると、矢薙は踵を返し、あの日の自分と同じ臭いがする少女を連れて校舎へと戻っていった。

phase 1: Voiceless Sign (後書き)

はあ。やっとプリムラが登場です。

それさえも何者かに仕組まれているんですけどね。運命とは残酷です。

最終的にその運命とやらにこれから立ち向かってもらうわけですが……。

以下、初出の単語群の説明です。

・chanter: 発音は「シャンテ」。フランス語で「歌う」という意味の動詞の原型だが、単独では「乾杯」を意味する。前述したル・スリズイエとともにパリでの一杯を味わうには不可欠な文句。

・アンバーカラー: Amber Color。琥珀色を意味する、人族だけで構成された世界的テロ集団。錬金術や魔法具を駆使して神界や魔界を中心に、かつ神族や魔族に狙いを定めてテロを起こしている。過去にも幹部や実行犯が三世界合同で結成された対テロ部隊や軍などに多く発見・逮捕・殺害されているが、組織の全容は未だ不明。特徴は夕焼けに溶けるような琥珀色のローブや衣服、または同色の刺青やアクセサリーとなっている。

・サクリアイス: sacrifice。犠牲、生贄。ここでは自らの魔力を極限まで引き上げて暴発させる、まさに自爆と呼ぶにふさわしい攻撃魔法を指す。原理は意図的に冷却機能を奪った原子炉を臨界状態にさせて炉心を爆発させるようなものだが、一般的な人族程度の魔力でも半径数キロは荒野と化すほどの破壊力を持っている。

しかし、前述のアポカリプス同様に、魔法学ではそのような魔法

は存在しないとされている。

・神殺しの一族：数世紀にもわたる過去において ではなく、ここ数年前から一部の人間の間でそう呼ばれているある一族のこと。その正体も全貌も不明どころか、深く探ろうとした人間はなぜ漏れなく消息不明になったり不審死を遂げてしまったりしている。

この男女三人は知り合いなのか、その心当たりがあるようだが・・・。

・アンリミテッド・デザイア：Unlimited Desire。訳は無限の欲望。矢薙が過去に読んだことのある著書に載っていた、神族と魔族から見ての人族の呼称。現状に飽き足りず、常に次々と科学技術を発展させ、進化する文明を皮肉つてのことと思われる。

しかも一部の人族はそれを逆手にとって「常に世界の先を歩く者」、「人類の進化形」という意味で自らをそう呼ばせたりすることもあるが、どちらにしるいい意味ではない。

・ビデオゲーム：video game。日本語で言うテレビゲームのこと。ガソリンスタンドなどと同様にテレビゲームは立派な和製英語である。

まだ授業が終わるまで三十分以上あるのでひとまず屋上へ戻った矢薙は、ベンチに座らせたプリムラにオレンジの缶ジュースを差し出す。

「ほら。ここまで歩いてきて疲れただろ」

「……少し」

「そうか。よく迷わなかったな」

「優しい人が教えてくれた」

「へえ」

まだまだこの世には奇特な人がいるものだと、今日何度目かわからないほどの皮肉を心中で吐きながら、矢薙は自分用にと買った缶コーヒーを開ける。カフェインの作用には期待していないが、多少の眠気覚ましにはなるだろうと選んだブラックコーヒーを喉奥に流し込み、小さく息を吐いた。

「お前、開け方知らないのか？」

「……ん」

ただぼうつと流れる雲を見上げちらと横を見る。渡した缶が開封されていないことに気づいた矢薙が尋ねると、わずかに不満そうな表情を浮かべてプリムラが答えた。果たしてあの日の自分もこんな表情をしていただろうかと今は亡き祖父に尋ねてみたくなかったが、矢薙の身体は丁寧にも缶の蓋を開けてやっていた。

やはり、この娘は知るべき情報を知らない。矢薙が得た断片的な情報を目の前の少女は如実に確信へと形成していく。

「なあプリムラ。いくつか聞いてもいいか？」

「……何？」

ベンチから一旦腰を上げた矢薙はゆっくりと、穏やかな口調でプリムラの座る前に膝をついて顔を見上げる形で尋ねた。この機会を逃すわけにはいかない。恐らくシアたちや神王、魔王がいる前でこ

んな真似はできないと気づいていた矢薙は、うつろな紫の瞳を覗きこみ、言葉を紡いでいった。

「嫌なら答えなくていい。ただ、できるだけ答えて欲しい」

「わかった」

「お前は何をしにここに来た？」

「りんに、会いに来た」

「それはどっちの『りん』だ？」

小さな顔きとともに本人の了解を得て矢薙は質問を開始する。目的は昨日も聞いたが、矢薙は昨日より深く切り込んだ質問をした。

「シアもネリネのことを『リンちゃん』と呼ぶからな。どっちだ？」

昨日、プリムラはネリネのことはネリネと呼んでいるが、あえてそれを聞かなかった振りをして矢薙は尋ねた。

昨日の芙蓉家リビングでのやり取りから、シアたちは意図的に何かを隠していることは予想できていた。経験上、人が嘘をついたときの雰囲気はすぐに察知できるようになってしまっていたせいもあるが、矢薙の放った語弊ある表現にもシアたちは全く食いついていなかった。聞き逃しも考えられるが、あそこまで気に懸ける友達であるなら気づいて当然という範疇だ。

なのでまずはこの娘の言葉自身から事実を確認しなければいけないと思っていた。

「……稟」

「そうか。で、会いに来た理由は？」

ようやく目的の人物を稟に絞ったところでさらに深く、昨日はシアたちの手前、聞くのを諦めていた質問を取り出すと、

「リコリスが、言ってた」

再び、その名前が出てきた。矢薙の知らない人物だ。だが、今の人物について追及しても、まだ確固たる信頼関係が築けていないプリムラは答えてくれないだろうと判断した矢薙は、そのまま話を続ける。

「それで、稟に興味を持ったのか？」

「うん」

啄むように飲んでいたジュースの缶を離し、プリムラは首を縦に振る。

「それで、リコリスって奴は優しい人か？」

「うん」

「大切な人なんだな」

「うん」

このやり取りで矢薙が気になったのは、リコリスに関して尋ねるとプリムラは即座に返事をする点だった。その表情こそあまり変わらないが、縦に振られる首の動きに力強さを感じ、雰囲気も和んでいるのがはつきり感じ取れた。

確信した。その少女こそ、このプリムラが心を許している相手だ。昨夜のときもプリムラの視線は稟の服の裾を掴むとき以外はほぼ下向き。これは矢薙が祖父や橙次たちから直接教えられたことだが、そんな友人の具合に気づかない友人などいない。

そして固く閉ざされていた心が少しずつ解されていることを確認すると、うまく流れてきた話の流れに乗って、リコリスという名前について深く掘り下げていこうとしたが、

「で、そのリコリスって奴はお前がここにしていること」

「わからない」

「わからない？ 魔界にいるんじゃないのか？」

「もう会えなくなつた。だから、会いたい」

会いたい、会えない。その言葉にまたもや矢薙の心臓が一段大きな音を奏で、脳裏にあの頃の映像を激しく流し込んできた。等しく青い空、決まった時間に決まった強さで吹く風、無数の白衣の男女、越えられない巨大な黒い壁、そして風に舞い上がる純白の花弁と、その向こうにいるのは。

「………どうかした？」

「いや、何でもない」

意識を引き戻してくれたプリムラに心中で感謝すると、矢薙は再

びベンチに腰を下ろした。額に手を当てて気づいた、驚くほど滲んでいた冷や汗を手の甲で拭っていると、タイミングよく授業終了を告げるチャイムが鳴り響く。

「なあプリムラ。ひとつ頼みがある」

「何？」

笑顔が想像できそうもないその表情に、何度でもあの頃の自分を見てしまう矢薙は、穏やかでありながらどことなく悲しげに尋ねた。「少しでいい。俺にお前の時間をくれないか？」

その夜、稟たちの周囲は昨日とは真逆に騒々しくなっていた。

「エリアA - 6からA - 15、発見できません」

「同じくD - 11からD - 20も、該当対象未発見です」

これで何回目だろうか。時折現れる兵士たちがそう簡潔に告げては、稟たちと同じくリビングに手待機する神王と魔王に告げて立ち去っていく。

最初に異変に気づいたのは楓だった。学校帰り、夕食の買い物をしてから帰宅すると、鍵が開いていた。そして、一人家に残っていたはずのプリムラの姿がなかった。「でかけてくる」というメモだけが残されていたが、未だ帰宅していないため一気にこの状況に陥ったという経緯だ。

突如として陥った現状に不安や困惑を隠せない稟たちを前に、矢薙は昨夜と同じ場所で壁に背を預け、腕を組んでいた。プリムラの行方がわからなくなるといふ非常事態の発覚後、状況を知った亜沙や橘花もこの場所にいる。今は二人とも自責の念に駆られる楓のフオローに回っているが、昨日の今日でこれでは救われるものも救われない。

落ち着きがなくなるのも無理はないか。矢薙は毅然とこの事態に対処している二人の王を見やった。行使できる手はすべて尽くしているだろう。だが遅かれ早かれ、その良し悪しにかかわらず誰かが結果を示さなければ事態は前進しない。

すると、

「おじさん。やっぱり俺も」

「その気持ちは嬉しいが、今はまだ情報が少なすぎる」

「闇雲に探しても、疲れるだけだよ」

「それでも、ここで黙っているよりはましです」

ついに痺れを切らしたのか、立ち上がり自らも動くこととした稟は、制止と我慢を求める両王の言葉を振り切り、一步目を踏み出そうとした。一般的な視点で見れば稟の行動は常識的な間違いはない。誰かの心配をするのも誰かのために行動を起こせるのも、その他者を心から大切に想えるゆえの行為だ。

だが常識など別の国や地域の一步外に出たら変わってしまう。親指と人差し指で作ったOKサインが眼前の相手に対する殺害予告になるような場所もある。相手に手の甲を向けたVサインを出した後、トイレや路地裏に連れ込まれて強姦されようと、それは当人の不手際としか言いようがない。郷に入りては郷に従えという言葉に倣えば、自分だけの知識や価値観で世界に通用するわけではないことも理解できるはずだ。

「稟。今は神王や魔王の言うとおりに黙ってる」

「ですけど、今こうしてる間にも何が起きてるかわからないんですよ？」

「その言葉、外で銃弾や砲撃が飛び交って、通り魔や連続殺人犯でも徘徊しているならまだ理解できる。けどここはそこまで危険な街じゃないだろ？」

「そ、それはそうですね」

「それに、プリムラが一番懐いているのはお前だ。真っ先に駆けつけるはずのお前が疲れてへばってたら洒落にもならん」

「そ、そのとおりッス。稟くん」

「今はリムちゃんの居場所がわかるまで待ちませんか？」

「……ああ。わかったよ」

矢雑の言葉は極論と言えなくもないが、両王の言葉とは違い、稟

に反論させるだけの力を与えなかったのは確かだった。結局、その言葉を追い風にしたシアとネリネの言葉もあって、稟は一度上げた腰を再び下ろした。

「ですけど、さすがに遅くありませんか？」

「それはそうだけど、ね」

「今は書置きを信じるしかありませんよ」

とはいえ、あまりの不安に今にも泣きだしそうな面持ちの楓を、すぐ隣に座る亜沙と橘花が励ますがそれも心許ない。やはり、結論づけて区切りをつけなければ人は次の行動指針さえ見出せないもの。待つのも手段ではあるが、解決策にはなりきれない。

「神王、魔王。今までにもこんなことはあつたのか？」

「ああ、何度かふらつといなくなることはあつたな」

「ただ、今回は書置きがあるからまだ深い懸念はないんだけどね」

「そうか。わかった」

安心させるための方便かもしれないが、両王から過去の事実も聞いたところで矢薙は今まで集めた情報の集約を始めた。

態度、表情、仕草に言葉。人が感情を表す手段はいくらでもある。笑顔でゲームと称したジェノサイドを犯す感情や理性の壊れた人間や、涙を自在に操って金蔓を手玉に取るような計算高い人間もこの世にはいるが、運よくか、矢薙は眼前の面々にその気配を感じられなかった。良くも悪くも、ここにいるのは「他者からの否定」を知らない面々。他人から与えられてきたものなど、その根底を取り払ってしまえばすぐに壊れ、消えてなくなることを経験していない。

「意外と冷静なんだな」

誰に言うでもなく、矢薙は率直な感想を口に出した。

「え？」

「お前らが意外に冷静なんで、安心した」

「ナギちゃん。何言ってるの？」

「遅かれ早かれプリムラは捕獲できる。俺にはそう聞こえて仕方ない」

最初はシアとネリネに向けていた視線を、今度は神王と魔王へ。まるでロッククライミングのように足場を探して真実に近づいていく感覚。生憎、持久戦が好きではない矢薙の手は、一度でも剣を鞘から抜けば相手を討ち滅ぼすまで力を緩めることを知らない。

「何が言いたいんだい？」

「まだわからないか魔王？ 友人は『捕獲』するものじゃないんだぜ？」

まずは軽く揚げ足を取ってみせると、両王の顔がわずかに渋った。たとえ眼前の面々から嫌われようが、これはプリムラのためだ。人は環境次第で後天的に変わることができる。家族を知らず孤独しか知らないなら、仲間という楽しさを教えてやればいい。それができるのは間違いなくその人のそばにいてあげられる人間だけだ。

「それともあれか？ お前らはプリムラをモノとしか見てないのか？」

「そんなわけねえだろう！」

「だったら、都道府県ひとつ消し飛ばす存在をここまで冷静に追いかけていられるのは、即座に見つけられる手段と確証があつてのとだな？」

「それは」

「その手段が答えられないならいい。けど、それなら余計に稟たちをここに縛りつけておく理由はない。搜索人員は一人でも多いほうがいいからな」

人の内側を見てくる視線。神王と魔王がともにそう称した視線を稟は初めて目の当たりにした。場数を踏んでいる両王を相手に、挑発的な口調を織り交ぜて追及を続ける矢薙は怯むどころか優勢に立っていた。

「坊主。おめえさん、何がしてえんだ？」

「君はいつたい誰の肩を持つんだい？」

隙間なく順序立てて責め立ててくる矢薙に、これ以上の追及をかわそうと改めて神王と魔王が尋ねる。すると、その質問を待ってい

たかのように矢薙は小さく鼻を鳴らして答えてみせた。

「少なくとも俺は友人の『捕獲』はしたくないな」

引越してくる前、矢薙が野山で過ごした日々で得た「捕獲」の意味は有害な野生動物などを仕留めることだった。必要以上を採取・搾取せず、無数の恩恵と人知を超えた畏怖をもたらす大自然とそこに棲息する野生動物との共存を図りながらただ慎ましく暮らす日常に害なすものが相手である以上、動物保護など二の次、三の次の愚問だ。

ましてや過度な保護は逆に個体から生存本能を奪っていく。残念なことに一部の自称動物愛護者はそれを著しく勘違いしているようで、己自身が絶滅への下り坂を転がっているというにもかかわらず、助長という言葉すら知らないらしい。

「それに、今の俺が肩を持つ相手がいるとすれば、それはお前らや稟たちじゃない。プリムラだ」

「どういうことですか矢薙先輩？」

両王の手前でプリムラの味方と公言した矢薙は、稟に尋ねられると、人の内側を見る視線のままで一瞬稟を見やった。が、わずかに閉じられた瞼が開かれると先程とは視線の色が変わっていた。

「それは逆に俺も聞きたいくらいだ。こいつらが友人と言った存在が失踪してもここまで冷静でいられる理由をな」

心の臓を縫い針で何度も細かく突き刺すような口調を浴びせられ、こいつら、の視線の矛先にいたシアとネリネはびくりと身体を強張らせる。

「プリムラがいなくなったのは結果論だが、俺が聞きたいのはその後の対応だ。目を皿にして探すでもなく、ただ報告だけを待つなら幼稚園児でもできる。見てりゃいい加減数年来の友人よりも出会って数日の稟の行動がよほどまとまら」

「そんな……、私たちだって心配して」

「どうしようもなく大切に仕方ないなら外に出すな。窓のない部屋に閉じ込めて首輪つけて鎖にでも繋いでろ。それでも這いずり回る

ならその度に手足の一本でも折ってやればいい。犬や猿でも学習してもう勝手に出歩こうとは思わなくなるからな」

「そんな残酷なことをしろと仰るんですか？」

「残酷？ ふざけんな！ 友人が本当に欲しいものも与えてやれないで、その気持ちすら察せない奴が友人を名乗んじゃないやねえ！」

「っ！」

初めて飛んできた矢薙の怒声に、橘花を除く全員が思わず身体が反応していた。だが、誰も矢薙にそれ以上の反論をする者はいなかった。極論こそ混じっていても、誰が今一番最も大切なことを口にしたか理解していた。

「口先だけの友達ごっこなら別の奴とやってる。俺は　っ、もうプリムラのような瞳を見たくないんだ」

「ナギちゃん・・・」

孤独や寂寞、諦観がごちゃ混ぜになった冷たい瞳に嫌でも過去を思い出し、その頃の自分や他の子どもたちを重ねてしまう矢薙の嘘偽りのない今の心情は、確実に裏たちの心を揺さぶった。

「橘花。もう潮時だ、終わりにしよう」

矢薙の言葉に、はい、と短く答えた橘花は席を立ち、リビングの外へと消えた。

「終わりにするって、どういうことですか？」

「今にわかる。俺はお前から聞きたいことを聞き出せたからな」

楓の質問に答えた矢薙は解いていた腕を組み直すと、再び壁に寄りかかる。その表情の端々には疲労と達成感とわずかばかりの憐憫を滲ませていたが、一番大きいのは嘲笑とも受け取れる口の端が引きつった笑みだった。

すると、ちょうどよくドアが開き、聞こえた二つの足音に裏たちが視線を向けると、

「えっ？」

「なっ？」

「これが、今回の種明かしです」

驚く稟たちを前に、橘花は淡々とした口調で先程まで搜索対象であつた彼女の背中に手を当てた。

「こ、こいつはいつてえ……」

「まさか、狂言誘拐だつたのかい？」

「ご名答。さすが神界と魔界を治める方々だ。そのボンヘッドぶりに感服したぜ」

啞然とする神王をよそに、ようやくこの事態の全容を理解し始めた魔王が厳しい視線を矢薙に向けるが、その視線に臆するどころか、矢薙は憚然と中指をこめかみに当て、明らかな皮肉と侮蔑と白い歯を見せて神王と魔王を笑い飛ばした。

「橘花さん。どうしてこんなことを？」

「それは私からも尋ねたいですね、ネリネ先輩。『どうして』プリムラちゃんは『こんなこと』になつてしまつているのか」

なぜこんなことを仕組んだのか橘花に尋ねるネリネだったが、逆に橘花から探るような視線とともに尋ね返され、言葉を返せなくなつてしまう。それだけ百六十センチ弱の少女が放つ視線は矢薙と同様に、確実にシアとネリネそして両王が心の内側に隠していることを探り、見つけ、抉り出してきた。

「シア先輩とネリネ先輩が何かを隠していることはとうにわかつていましたが、今はプリムラちゃんのことを優先したまでです。まあ、思った以上に大きい獲物が針に引っかかってくれたようですけど、ね」

追及のやり口もだが、矢薙と橘花が見せた駆け引きに敗北の味を教え込まれた両王が呆然としてみると、矢薙は稟の両肩を掴み、ソファーに無理矢理座らせた。まだ状況が飲み込めていないような顔の稟をよそに、橘花もプリムラを稟の隣に座らせ、矢薙と橘花の二人はまるで本題はここからだと言わんばかりに、話し合う空間と雰囲気を作り上げていく。

「遠くの親戚より近くの他人とは言うが、それは信用できる奴が近くにいます場合だ」

「泥棒に家の鍵を預けられるほど、私たち田舎者も不用心ではありませんから」

「二人とも、それは言い過ぎなんじゃない？」

まるで誰も信用していないとばかりに慥然と言い放つ矢薙と橘花に、亜沙はわざわざ立ち上がって尋ねる。言葉こそ交わしているものの、二人が明らかにシアたちに対しての拒絶を示している雰囲気をもとに始めていることに耐えられなくなってきたのもあった。が、「言い過ぎ？ この程度でヘタレてんじゃねえって話だ」

「最低限の人権と誇りだけは守らせてあげているはずですけどね」

亜沙にああ言われてもなお、まだ矢薙と橘花は余裕の態度で返す。まだ自分たちの半分ほども生きていないはずのこの二人だが、やはり心理的な探り合いにおいて高い能力を持つていることに、神王も魔王も内心は穏やかではいられなかった。ましてや、橘花の言い方は駆け引きの中で相手の人権や誇りさえ容赦なく捻り潰せる力が自分たちにあることまで窺える。

両王としてその人生の中で他人の権力や欲望、意図的に隠された多くの事実などに触れてきた。同時にそれ以上に多くの人間を見てきたが、この二人の立ち振る舞いは両王が手を焼かされてきた相手と似ている。自分を常に相手より高い位置に置き、傍観者の振りをしながらにその場の空気を操り、時に鋭く尖った言葉で明らかに自分側に有利な駆け引きを持ちかけてくる。しかもこちらが虚を突いてもそれを畏に倍返ししてくる。

すると、

「さて神王、魔王。こんな話はどこまで表沙汰にできるんだ？」

「なっ？」

「いつの間に……」

何やらポケットから取り出した小型の携帯音楽プレーヤーを取り出し、矢薙は両王に向けて不敵に笑いかけた。人界で販売されている最近の音楽プレーヤーの中には単独で録音機能を持つものがあることはシアたちも知っていた。それを利用して、矢薙は今までの会

話をすべて録音していたことを臭わせる。

「……………おめえさん、俺たちを脅す気か？」

「脅す？ 俺たちがてめえらと対等な立場にいると思ってんのか？」

「人界には平等という二文字があるのに、かい？」

「じゃあ面従腹背つて四字熟語も覚えとけ」

両王の威圧感を柳に風と受け流し、矢薙は神王と魔王を前に悪意すら感じる挑発的で狡猾な笑みを浮かべて逆に言いくるめていく。

その様を見て、改めて稟は両王の矢薙を評した言葉が真実であり、恐ろしい人だと自らに刻み込んだ。開門から今日に至るまでの間、神界と魔界を統治する大物を相手にして喧嘩を吹っかけられるような人間などいやしないと誰もが思っているだろうが、間違いなく二人はここにいます。

「ちよ、ちよつとナギちゃん？ 橘花ちゃんも。ナギちゃんを止めないと！」

「ナギ兄さん。このままでは趣旨が変わってしまいます」

「ん？ ああ、そうだな」

一触即発の危機を感じた亜沙が両王の堪忍袋の緒を切り始めている矢薙を抑えるよう橘花に声をかけると、橘花は仕方なさそうに重く深い溜め息をつき、簡単な一言で矢薙の手綱を締めてしまった。「で、おめえさんたちは何が望みだ？」

「簡単な話だ。プリムラが望むものを与えてほしい」

大きく息を吐いた後、神王が尋ねると矢薙は即座に答えてきた。

「プリムラが、望むもの？」

「簡単ですよ魔王様。どこかに行きたいなら連れて行って、したいことがあればさせてあげるだけですから」

ここまで自分たち追い詰めてまで求めるものが、プリムラに望むものをあたえてあげるといふ条件に、思わず尋ねた魔王には橘花が極限まで噛み砕いた表現で返す。

「だ、だけどな……………」

「こいつのことを『大切に』想っているんなら、できるよな？」

「別に滅私奉公までは求めていませんよ。第一、そこまであなたにたにはできなかつたでしょう?」

「……わかつたよ」

戸惑いと狼狽を見せた瞬間にはすぐさま挑発という名の毒牙で噛みついてくる矢薙と橘花を前に、両王は従わざるを得なかつた。もとより勝てる駆け引きではなかつたことを思い知らされ、二人とも握り締めた拳を隠しながらうなだれてしまった。

壁にペンキをぶちまけたような音に続き、生肉を引きちぎる湿つた音と鈍い衝撃を伴つて突如右肩を襲つた痛みに呻く男の声が響く。

「あ、ぐ……」

「まつたく、人のデイナーにお邪魔するからですよ」

鮮やかなシアン色の刃を赤黒く滑る液体に染め、男の右肩から左の脇腹に向けて袈裟斬りに食い込んだ左手の剣をそのまま真下に振り下ろすと、男の胴体部分は斜めに切り裂かれ、酸化して黒ずんだ溜まりに重く崩れていった。

刹那、少女は返す刃で背後から迫ってきた別の男の首を刎ね飛ばす。さらに別方向から向けられた三つほどの銃口から放たれた銃弾はすべて右手に持つていた剣と手首の返しだけで叩き落とした。

「食べ物への恨みは万国共通で恐ろしいですよ? 西洋の蛮人どもが壊された窓から吹き込んできたパリの涼しい夜風に翡翠の髪をなびかせ、少女は銃弾をすべて防がれて啞然とする男たちに右手の剣の切っ先を向ける。食中食後だったらともかく、少女が襲撃を受けたのはまさにいただきますの直前だったのが、この男たちの命をさらに短いものにさせてしまった。

「今は『雑種』の始末のことだけであなたたちに構っている暇はなかつたんですが……まあ、今日はどこかの誰かの意趣返しとでもしておきましょうか」

「何?」

体内に張り巡らされた回路のスイッチを入れる感覚で力を入れる

と、少女の両手に握られた剣の刀身がぼうつと群青の光を放ち始めた。

「な、なぜお前のような奴が『それ』を　　っ?」

「ここで死ぬあなたに答える必要などないでしょう。……オプスキュリテ」

その名のごとく闇色の柄を握り締めた少女が刃を横風ぎに振るうと、一陣の風がこちらに銃口を向けたまま固まっていた男たちの胴体を真つ二つに切り裂いていた。

「まあ、私自身も『雑種』なんですけどね」

誰も聞き取ることが叶わない言葉とともに、腹部から下に別れを告げた一人の上半身に八十センチ近いシアン色の刃を突き刺すと、少女は返り血にべっとり濡れてしまった上着を脱ぎ、床に投げ捨てた。同年齢の女性よりは一回りも二回りも大きく実った乳房を包むブラー一枚になつてしまつたが、戦闘による興奮に火照つた体には吹き込んでくる夜風が気持ちよく感じる。

「まーたそんな恰好してやがるのか。アネキ」

「あなたも脱いだらどうです?　風が気持ちいいですよ」

音も気配もなく背後に現れた双子の弟に、少女は恥ずかしいなどとおくびにも出さず、むしろ少年にも上着を脱ぐように奨めた。呆れた少年は小さく鼻で笑い飛ばすと、双子の姉の誘いになど歯牙にもかけず、つい十分ほど前までは生きていた男たちの装備品であった自動小銃を手を取った。

「またいつものでしょう?」

「ああ、間違いない。魔法含有弾まで放てるように改造されてやがる」

現存する兵器の中ではおそらく最強であろうこの類の兵器に関する情報収集　ひいてはその活動に従う対象の破壊または回収をこの双子の姉弟は命令として受けていた。だがその命を受けてもう二年。手がかりは全くと言っていいほど掴めず、ご丁寧にも対象の兵器を装備して襲撃してくる黒服や武装隊との衝突を昼夜問わず繰り返す

返している。

「本当、三世界共通でイカしてる輩がいたものですね」

「いずれ『こうなる』ことは十年も前に予知されてたんだ。悲劇どころか喜劇にすらなりやしねえ」

「まったくです……ねっ!」

かすかな殺気を感じた次の瞬間、少女は絶命していた男に突き刺していた双剣の一本を、少年は装備品から奪った自動小銃を握り締め、互いに背中を合わせ、自分たちのいた部屋に繋がる二つの出入口にそれぞれ向けて刃と銃弾を放った。

「殺ったか?」

「もちろんです」

漂う硝煙臭さと短い姉弟の会話としばしの沈黙の後、うちひとつの出入口の物陰から全身に風穴を開けた男が倒れた。今の戦闘で汚れてしまった壁に深々と刺さったシアン色の刃の剣も、薄い壁を貫通して隠れていた男の命を刈り取っていた。

一応生死と装備品の確認を取ろうと少年が隠れていた男のもとへと歩み寄るが、

「なっ?」

「どうしました?」

少年の息を呑む声に少女が駆け寄ると、二人の視界に飛び込んできたのは、シアン色の刃に命を刈り取られた男の左腕。この戦闘で切り裂かれたと思われる袖の隙間から覗く真っ赤に染まった涙を流す鳩の刺青だった。

「ピジョンブラッド?」

少女がやっつとこのことで発した言葉を確認せんと、少年は絶命している男の帽子を急いではぎ取った。そこから見たのは自分たちの形の違う耳。大きさを考えると神族だった。

「どこぞの闇市場マーケットから手に入れやがったか」

「彼らが自ら手を出すとは思えません、これは最悪、三世界の『表』で戦争になりますね」

「畜生。今度はお袋の仲間まで殺さなきゃなんねえのかよ」

少年ははぎ取った男の帽子を壁に叩きつけると、壁に頭をつけて嘆いた。人族の父と神族の母の間に生まれたこの双子の姉弟としては、自分たちが限りなく人族に近い身体を持っているとしても神族はまだ近い存在だった。

もとより命令に従えば、神族だろうが魔族だろうが、果てには親兄弟だろうと対象になった時点で始末しなければいけなかった。それが父親と同じ人族から受けた命令で、二年前に初めて深く親しくなった友人に別れを告げてまで選んだ姉弟の道だったが、それでもこの現実を受け入れがたかった。

「行きましよう。失くしたものを振り返る暇などありません」

「………わかつてるよ」

姉の一言に、弟は素直に従う。今十ある手元から八を捨ててまでも、その八の中にたとえ親兄弟や親しい友人が含まれていようと未来の百を手に入れる。それがこの命令の最大の目的であり成功の最低条件だ。

だがいつその百が手に入るかは未だわからないまま、今まで歩んできた血塗れの茨の道を顧みることなく二人はその場から静かに消え去った。

phase 2: Innocence (後書き)

最後のシーン、久々に生々しいものを書けた気がします。やっぱりこういうシーンが出てくるジャンルの小説を書きたいのですが、「こればかりは二次創作ではやりたくない」、「でもいまいい感じの設定が浮かんでこない」というもどかしさがあります。

とはいえこの双子の姉弟、原案の設定では八年前のアレや十年前のアレ、二年前のあの出来事や　　の過去に深く関わっていた人物なんですよね。今は稟たちと対照的な道を歩くこの二人をはつきりと登場させるにはこの小説の中で一年くらいかかりますけど。

以下、初出の単語群の説明です。

・OKサイン：日本では親指と人差し指で円を作ってみせるのが一般的。だがそれが「あなたを殺します」というサインになる地域があるので、要注意。

・手の甲を向けたVサイン：本文中に記述があったとおりのため、以下略。海外では気分がハイになったときに見られることがあるがこれに限らず、要は「相手がどう受け取るか」を第一に考えて行動してほしいもの。

・オプスキュリテ：obscure? (仏)。一部ケータイなどでUnicodeが見られない方は『e』に右上から左下へのはらい「アクサンテギュがあるものを思い浮かべてください。

フランス語で「闇」を意味するが、ここでは、謎の双子の姉弟の姉が使用していたシアン色の刃を持つ双剣を指す。記述のとおり、

闇色の柄、八十センチ近い刃を持つているうえ、柄に指の防護目的の部分があり、幅広の刃は平たく背側に軽く反っているため、形状は刃の長いカットラスに近い。

そんな得物を少女は軽々と敵の陣中で振り回したり、投げつけたりにしている。

・魔法含有弾：一時的な仮称に過ぎないが、着弾や弾頭部分の炸裂と同時に魔法と同等の効果を持つ特殊な弾丸。現段階において誰がどのように、何の目的でこのようなものを製造し裏ルートで流通させているかは不明だが、姉弟の会話からすると戦争の臭いが感じられる。

・ピジョンブラッド：Pigeon Blood。ルビーの中でも最高級品とされ、鳩の血という名にふさわしい濃赤色をしている。

ここでは前述のアンバーカラーと同じ世界的テロ集団のことを指すが、前者が錬金術や魔法具を用いて神族や魔族を標的にテロを起こしているのに対し、ピジョンブラッドは構成員に神族や魔族をメイソンとして標的を人族に定めており、両者の中は常に最悪である。

また、本来の彼らは純血主義を掲げており、神族・人族、魔族・人族どころか、神族・魔族のハーフとされている人々すらも快く思っていない。特徴は血の色をしたローブや、赤く染まった涙を流す鳩の刺青がある。

Phase 3: Family Gathering (前書き)

第2章もこのフェイズで締めくくりとなりますが、新たな伏線も張られ、話はまだまだ続きます。

では、ごじぎょ。

Phase 3: Family Gathering

「リコリスが、言ったた」

「それで、稟に興味を持ったのか？」

時間はバーベナ学園の授業中。そのとき、授業をサボり屋上で時間を潰していた矢薙は、わざわざ学園まで出てきたプリムラを匿い、稟たちに会わせるために休み時間まで待とうとしていたが、

「うん」

「それで、リコリスって奴は優しい人か？」

「うん」

「大切な人なんだな」

「うん」

間違いなく、そのリコリスという娘がプリムラが一番大切な人だと矢薙は確信した。もちろん確固たる物証など何もないが、プリムラを問い詰めてまで確かめるつもりもなかった。それでもわかった大切な人のことは何でも知っていたいという無邪気な気持ちは絶対的な自信となつて現れる。かつての自分もそうだったように。

「なあプリムラ。ひとつ頼みがある」

「何？」

「少しでいい。俺にお前の時間をくれないか？」

うつろな紫の瞳の奥に覗く闇を振り払うためにシアとネリネ、加えてその親である神王や魔王も巻き込んで、真実を探り出してやろうと覚悟を決めた矢薙は、プリムラ本人の協力のもと、必要な情報を手に入れるために手を打った。

「……………どういうこと？」

「お前が今一番会いたいのは、稟でもネリネでもないんだろ？」

「……………違う」

諭すような口調で尋ねると、最初は否定されてしまった。だが、ここで引き下がって考え直すような暇はなかった。次の休み時間ま

では何としても下準備を始めなければならない。

「本当か？ 嘘ついたら魔界に送り返すぞ」

「違う。稟でもネリネでもない」

少し口調を強め、自分にそんな権限があるはずのない魔界への強制送還を口にする、明らかに動揺がプリムラに浮かび上がった。

即答 送り返されることを拒絶しているその態度だけで十分、魔界で何があつたかは容易に想像できた。

だが虐待の線はまずありえない。もしそうだとしたら神界と魔界の王族のとんでもない闇に触れてしまったことになるうえ、たとえばならバートリ・エルジェーベトのような美女は美女であり続けられる所以があることを認めてしまいかねない。

とはいえ命を懸けて一人の少女の過去を探るには明らかに時間と物資が足りないのだが、足りなければ強引に持つてくればいいだけのこと。矢薙の頭の中ではすぐさま稟や楓、亜沙といった面々が幕を上げる狂言の証人として浮かび上がり、並べられていった。

「で、その会いたい人ってのは、リコリスって娘だろ？」

「うん」

ここは正面突破で尋ねた。感情的に出てきたら慰めて落ち着かせ、否定すれば強制送還の文句を口にすればいい。これじゃ質問というよりは尋問になるな、などと矢薙は頭の片隅で思いながらも質問を続ける。

「どこにいるかわからないんだろ？」

「うん」

「シアやネリネも知らないのか？」

「うん」

「一緒に、いたいのか？」

「うん」

反応が機械的な感は否めないが、プリムラの気持ちや矢薙は把握した。シアやネリネも、リコリスという娘がどこにいるかもわからないのはあくまで現状に過ぎない。わからないけど会いたい、現状

を踏まえたとうえでそばにいたいというのがプリムラの意思だ。ならば、その意思があれば、今の自分ができることはひとつしかない。

「だったら、俺が聞き出してやる」

「え？」

「俺の言うとおりにしてくれたら、俺がリコリスの居場所を聞き出してやる」

それほど難しい発言も特別な行動も矢薙はしていない。ただ、今の言動がプリムラの理解できうる範疇を越えていただけなのだが、個人の理解できうる範疇というものはそのファクターの多くが個人の知識と経験の量に比例する。

理解可能な範囲が狭い人ほどその個人が見えている世界や心は得てして狭い。相手の言動が理解できないのは相手を知らないことでもあり、客観的にその個人が常に一方的視点でしか物を見ていないのではないかと訝しがられ、果てには自分自身をも客観的に見られない愚鈍に映ってしまう。

「でも、リコリスはいないって……」

「それが事実だって言ってたのか？」

「うん」

目の前の現実と自分の持ちうる情報に納得できていない面持ちでプリムラは首を縦に振った。言葉の数こそ少ないが表情は意外にも豊かなのが救いか、懐かれていない矢薙でもプリムラの感情はその顔からおおよそ読み取れる。

だが矢薙から見れば、これはプリムラに限ったことではないが

あまりに感情表現がストレートすぎる。この世には人の感情すら巧みに操り、錯誤を起こさせる輩がいる。言葉ひとつで心を揺さぶられるようでは、人は時代という激流にすぐに沈められ、川底に押し留められるか砕け散るかしか選べなくなる。

「だったら覚えとけプリムラ。百パーセント真実で構成された事実なんて存在しない」

「どついうこと？」

「自分の目で確認するまで真実を真実だと思うな。他人の目や耳を介した時点で、誰かを騙そうと思わなくても真実は曲解されるんだ。お前の見ている世界はお前だけのもので、誰かには誰かにしか見えない世界がある。お前が信じるべき真実はお前だけが見て触れてきたものだけなんだ」

「……………よくわからない」

「まあそうだろうな」

今回ばかりはさすがに自分自身でも難しいことを口にしたと矢薙は振り返るが、言い直すことはしない。プリムラのため、一人の幼稚で痴愚な先達として道標くらいは作ってやろうと思っていた矢薙だが、道を示すだけが先達のすることではない。幸いなことに今、プリムラにはあの頃の自分にはなかった自由がある。「選ばせる」のも重要な経験値稼ぎのイベントだ。

「けど覚えといてくれ。『リコリスがいない事実』は、『リコリスに会えない真実』じゃない。そうじゃないと、もし会えたときお前は周りの人たちに騙されてきたことになる。そんな悲しいことは嫌だろ？」

「……………うん」

「理解してくれたか。いい娘だ」

ともすればバレーボールよりも小さいプリムラの頭を軽く撫でてみると、チャイムとともに授業が終わりを告げた。心なしか開放的な空気が足元から漂い始めたが、矢薙はこのタイミングを逃さずに準備を始めることにした。

そして今。

「あれから俺は魔力を抑制できるっていう魔法具を借りて、お前らよりも先に橘花とプリムラにこの家で隠れてもらい、狂言誘拐を仕組んだ」

「『出かけてくる』の書置きは私がプリムラちゃんに書かせたものです。直筆ですから筆跡鑑定も騙されたでしょう？」

「あとはあくまで穏便に事を運ぶ意図もあった。反王政派の連中の

策略だと神王と魔王を勘違いさせて無駄な寄り道をさせないためにも、俺は稟たちに紛れてうまくこの場をコントロールすることにした」

矢薙と橘花の説明に稟たちが記憶をたどると、確かに単独でもプリムラを探しに出ようとすると稟を最終的に止めたのは矢薙だった。だがあれはあくまで稟を使って両王やシア、ネリネから重要な情報を聞き出すためのブラフ。決して両王の言葉に賛同したのではなく、逆に虎視眈々と隙を狙っていたことになる。

「とはいえ、まあ簡単にナギ兄さんのトラップにはまってくれましたね」

「おめえさんたち、いったい何をしたとおも」

「まだ人界の言葉を教える必要があるのか？　『弱い犬ほどよく吠える』って」

神王の舌打ちをよそに、次々と明かされていく狂言誘拐の舞台裏に稟たちはみな啞然としていた。一介の学生二人が神界と魔界の王相手に博打を打って勝った。そしてその現実には明らかに両王の足を危うくさせている。

「噛みつきたきや噛みついてこい。けどな、その牙をへし折る道具を人間は使えるんだ」

思考の駆け引きだけではない、口論においても矢薙と橘花は両王の一枚も二枚も上手だ。これは文句や言い訳を言えば言うほど二人は真綿で首を絞め上げてくるだろうと、白旗を挙げたくもなかったが、まだ両王は持ち堪える。

「まだ頑張るようですね。お二人とも」

「ま、待ってくれ橘花ちゃん！」

「何です土見先輩？　今になって日和りましたか？」

「決してそんなんじゃない。けどこれ以上はやりすぎだ」

確かに矢薙と橘花がプリムラのことを思って行動してくれたのは稟にとつても喜ばしいことだった。だが二人の行為はあまりに極端に映った。狂言誘拐に些細な言葉のブラフ、人の傷を抉るような罵

倒を使ってまで神王に魔王、さらに言うなればシアやネリネまで責め立てるようなことはしてほしくなかった。

生温いと言われようと、一人の友人・知人のためにほかの友人たちを精神的に追い詰めてまで真実を得るのは何かが違うと稟は感じていた。本末転倒という言葉を使うべきかどうか迷ったが、こういうときの矢薙と橘花は恐ろしいまでに愚直だ。目的のためにあらゆる手札を切り、あらゆるものを踏み台にして、隙のない話術と理論で真実を捕まえてしまう。そしてそこに至るまでの犠牲や代償というものをほとんど気にしない。

だが、

「リコリス」

「……っ！」

橘花を諷める稟の言葉の後に訪れた沈黙を、一人の名前が切り裂いた。

「プリムラが、今一番会いたがっている奴だ」

今までとは打って変わって矢薙の口調から怒気や熱は感じられなかった。だが同時に橘花を除く稟たちは悟った。まるで絶対零度のような視線と口調。丸みを帯びたように見える言葉は相手にぶつかった途端に隠れていた鋭い刃を剥き出し、今まで以上にその傷を抉りだしていく。

「プリムラのために俺が本当に知りたかったのはその娘の居場所だけだ」

矢薙の言葉は現状と希望しか語っていない。だが、この場の空気に見事なまでに溶け込んでしまったその口調は「知っていることを吐け」、「真実をすべて言え」と命令しているような錯覚に陥るほどだった。

「……誰、なんですか？ その娘」

「それは 知ってる奴に聞くんだな」

稟の質問に矢薙は言葉を一旦切り、シアたちをねめつけるように見やる。何も言葉を発さず、舌打ちも不敵な笑みもしていないにも

関わらず、まるで何もかもを知り尽くしているようにその場に立ち
はだかつていた。

そして、

「 ません」

「 えっ?」

「結果だけを申し上げるのであれば、リコちゃんには……
もう、会えません」

か細く今にも途切れそうなネリネの声に、ついに真実を覆い隠し
ていたヴェールに一筋の切れ目が生まれた。

「そんな。会えないっていうのはどうしてなんだ?」

「申し訳ありませんが、稟さまにも明かせません」

純粹に質問する稟にもネリネは頭を下げて却下の回答をする。し
かし、誰もが一樣に浮かぬ表情をしている中、矢薙は冷静に明か
せない理由を三つまで絞り上げた。

ひとつは反社会的言動の刑罰として法によって与えられた拘束の
ため。これが最も安直で簡単な理由だ。法の下に与えられた刑罰は、
理性的な王ならその絶対的とも思われる権力でも歪曲できないと知
っている。

もうひとつはプリムラと会う行為がリコリスの生命活動に多大な
悪影響を及ぼす場合。矢薙は見たこともないリコリスという少女
は決してあのベアトリーチェではないと思うが、それによってプリ
ムラかりコリス、もしくは双方の生命活動に支障を及ぼすようなこ
とがあつてはならない。ましてやプリムラは今まで監視下に置かれ
ていた「奇跡」の集合体だ。神王と魔王の政治的背景や個人的心情
からしても安易にそれを失うわけにいかないだろう。

そして、最後の理由とは。

「存在的に不可能なのか?」

「 っ!」

ビンゴ。悔しいことに矢薙の予想は見事にネリネに息を吞ませ、
それが何よりの正解証明となった。

「存在的に不可能って、それじゃまさか……」

「それで間違いないんだな？ ネリネ」

「……はい」

プリムラの理解のハードルを下げるために確認を取ったネリネの頭が縦に揺れた。亜沙の言いかけた言葉の先こそ真実。誰もが一番望んでいない形だった現実の一部として、ここに証明されてしまった。

矢薙が考えた最後の理由は、死別。数ある神話を紐解いても、時に交わることこそあれど基本的に生者と死者の住む世界は異なっている。それは昔の人間も理解していたことで、ゆえに生者は死者を尊び、偲び、ハレとケの境界が触れる折りにその面影を浮かべているのだが。

「これが、お前らの隠していた真実なんだな？」

絞り出された矢薙の声に、いくつかの首が縦に振られる。稟も楓も亜沙も、質問をした矢薙や追及に協力した橘花でさえもその頭数を数えることなどしたくなかった。会えないことはないはずだった。その人が、自分と同じ世界に生きてくれていさえすれば。だが今はそれさえ叶わなくなってしまった。

プリムラはリコリスに会えない。会うにしても二人の居場所は天文学的な距離をもつてしても測れないほど遠すぎる。足跡を辿ってきたにしても、人は空など飛べない。天を仰いでもそこには際限なく「生きている人間が届かない世界」が広がっているばかりだ。

「ですから ごめんなさいリムちゃんっ。私、騙すつもりなんてなかったんです！」

「私からも黙ってたことは謝るツス。だから……だからせめてリンちゃんだけは許してほしいツス。リムちゃんっ」

儂い期待さえ裏切った真実を前に言葉を失ったのか、今も一言も発しないプリムラに向かって、今までその胸の内に溜め込んできたものすべてを吐き出すような勢いでネリネは折り曲げた膝に頭が着きそうなほど深く頭を下げる。そして、そんな幼なじみで従姉の様

を見たシアも同じように頭を下げた。

「二人とも、そんな……」

「リムちゃん……」

この状況を打開したいものの、シアたちにかけてあげる言葉ひとつ満足に見つけられない楓と亜沙はただ視線を彷徨わせるだけだったが、

「……もういい」

ようやくプリムラが発したのは、諦めに使われる文句だった。

「ネリネもシアも、謝らなくていい」

「えっ？」

「ですが」

「矢薙が言った。『真実を知りたいなら覚悟を決めろ』って」

思わぬプリムラの言葉に、全員の視線が突き刺さった本人は腕組みを解くこともせず、そのままの体勢で何を今さらと言わんばかりに小さく鼻を鳴らす。

「矢薙、言ったよね？ 『もし自分が望まない真実でも、絶対に他人を傷つけるな』って」

「ああ。よく覚えてたな」

確認と賛同を求めるプリムラの紫の瞳に、矢薙は小さくだがしっかり頷いてみせた。

あのととき 時間は再び遡り、休み時間のバーベナ学園屋上で。

「本気ですかナギ兄さん？」

「ああ。最悪、神王と魔王に喧嘩売ってやる」

プリムラの一番会いたがっている人物、リコリスのことを聞き出すためだけに矢薙が考えた狂言誘拐の中身とその実行意志の高さを聞かされ、メール一通で呼び出された橘花は口を半開きにしたまま固まってしまった。

「じ、じゃあプリムラちゃんも？」

「矢薙を、信じる」

「あ、は、はあ。そうですねか……」

やつのことで取り戻した我でプリムラにも確認を取るが、矢薙の制服の裾を握るプリムラを見て、橘花は左手で支えた頭で天を一度仰ぐと、大きく肩を落とした。

こうなると矢薙はもう止められない。それは橘花だけでなく、村に住んでいた近い年齢の子たちなら皆知っている。あの閉鎖的な村における中途の新参者ながら、最終的に全員を引っ張っていただけたの発言力と行動力は今も健在だ。

「わかりました。ナギ兄さんが言うならたとえ黄泉路でも付き合います」

誇張表現に多少の嫌味も織り込んで橘花はプリムラの ひいては矢薙のために狂言誘拐に乗ることを決めた。たった一人の少女のために世界をひとつ統治している権力者に喧嘩を売る命知らずに付き合わされる身としてはたまったものではないが、そんな矢薙だからこそ橘花は誰よりもその思慕を募らせている。

「ああ。お前ならそう言ってくれると思った」

「なっ？ あ、当たり前ですっ」

不満げながらも案に乗ってきてくれたことに安堵の微笑を浮かべた矢薙を見て、不覚にも橘花は顔が爆発しそうになったが、嬉しいやら悲しいやら、妹分としてやはり兄貴分のものも不始末もフォロワーしなくてはいけない。第一、思い返せばいつから橘花は矢薙の妹的存在になっていたかというのはまた別の話だが。

「けどプリムラ。俺たちに協力するにあたってひとつだけ約束してくれ」

「何を？」

プリムラの折れそうな細い肩を掴み、膝をついた矢薙はその瞳の奥に揺れる闇に向かって話しかけた。

「真実を知りたいなら覚悟を決めろ。それがもし自分が望まない真実でも、絶対に他人を傷つけるな。怒りや悲しみを誰かにぶつけたところで真実は決して変わらないんだ」

「わかった」

「どんな残酷な真実でも、お前も俺も過去は変えられないってこと、わかってくれ」

「……うん」

プリムラの確かな頷きを見届けた矢薙はついていた膝を地面から離し、視線を橘花に向ける。

「話を詰めるぞ橘花。今日の放課後にはもう仕掛ける」

「早速ですね。駒は揃っているんですか？」

「ああ。揃えるまでもなく、勝手に集まってくれるさ」

チェスをするにはまず駒となるものが必要だ。盤面などマス目の数さえ合っていればいい。それを理解している橘花の確認の問いに、矢薙は不敵な笑みを湛えて答えた。

そして、そのときの矢薙の言葉がどれだけ重い意味だったのかを、プリムラは今になって身に沁みて感じていた。

「何となくだけど、わかった。ネリネもシアも悪くない。ただ、リコリスにはもう会えないってだけ」

「そのとおりだ。真実は変えられない。あるがまま、なすがままにしか存在しえない」

「うん。だから誰も悪くない。それだけ」

必要なことを何も知らない分、一度教え込んだものをプリムラは純粹に身に着けていた。それ自体は友人・知人としても大変嬉しくもあることだが、同時に何色にでも染め上げられてしまうという途轍もない危険も孕んでいる。今も稟たちでさえまだすべて噛み砕けていないことを、プリムラはそのキャパシティを越えて理解しようとしていた。

「それだけ。ほんとに、それ、だけ……な、のにっ」

そして少しずつ、その容量に収めきれなかった真実による悲しみがプリムラの涙や嗚咽となってこぼれ始めてきた。最初からプリムラの独力で悲しみを受け止めさせるつもりだった矢薙や橘花は別として、シアたちもできることならその受け皿を用意してあげたかつ

だが、今は自分の受け皿さえ危うい状況だった。すると、

「プリムラ。今さらだと思っけど、俺たちの中にリコリスはいないし、誰もリコリスの代わりにはなれない。代わろうとも思わない」
まっすぐ隣に座るプリムラを見つめて稟が発したのは、明確になった事実とこれからの道標を示していた。それはとても残酷な言葉だったが、悲愴な響きは一切感じられない。

それはきつと、

「俺たちにできるのは、そばにいてやることだけだ。一緒にいて、家族になつてやることしかできない」

「か……ぞく？」

「ああ。同じ苦しみや悲しみを共有して、喜びや楽しみも分かち合える。そんな存在のことだ」

「じゃあ、稟は」

受容。矢薙にはできなかったそれが稟にはできる。プリムラを受け入れて、その悲しみを共有して、同じように心を痛めることができる。同じプリムラのためという理由を掲げながらも、稟と矢薙はそのアプローチが全く違っていた。

矢薙は常にプリムラの先に立ち、いくつかの道標を示すだけ。決定権をすべて委ね、時に急かすようなこともする。だが稟はいつもすぐそばにいて、その弱く小さな背中を押し支えたりして、ともに歩んでいこうとする。

今のプリムラに必要なのはどちらのタイプの人間か、それは本人がよく知っていた。

「……おめえさんら、いったい何者だ？」

外にも漏れるほどの嗚咽をわずかなBGMに、神王は密かに帰路に就いた大小二つの背中に尋ねた。

「何者、というのは聊か失礼だな。俺がてめえらと同じレベルに見えるか？」

「私たちはそういう意味で聞いたんじゃないよ」

揚げ足を取り、嘲って尋ね返す矢薙に魔王は真つ向から切り返し、質問を繰り返す。

「なぜ最後まで見届けないんだい？ 元は君たちが仕掛けたものだろう？」

「ああ。確かに仕掛けなきやプリムラはずっとあのままだっただろうな」

「あとは土見先輩が何とかするでしょうし、私たちは御役御免です。曲りも何も王を相手に背を向けたまま、矢薙も橘花も皮肉った答えを返してきた。稟たちと接しているときはまるで違う対応に、神王も魔王もようやく二人の姿勢が掴めかけてきた。」

この二人はとにかく「自分」を動かさなかった。他人をチェスの駒のように盤上で動かし、真実という名のキングを狙おうと、プリムラというクイーンを使った狂言誘拐という大胆不敵な戦法でその首を刈り取った。しかも矢薙も橘花も盤上では一介のポーンを努めながら周囲の駒を手のひらの上で転がし、そこで朽ちていった仲間には見向きもしない。

「結果はよかったものの、そのやり方は気に食わねえな」

「その文句は常にいい結果を出せる奴のものだな」

「それでまた別の人が傷ついたら意味ないじゃないか」

「そうですね・・・だからあのままでよかったです？」

踵を返した矢薙は神王の言葉など軽く彼方へ蹴飛ばし、振り返った橘花も心中を探るような視線で魔王に返す刃で尋ねる。

「そうは言ってねえだろう？」

「ではどのような意味で仰られたのでしょうか？」

「古傷の舐め合いはママの膝の上でだけにしとくんだな。あんたらの娘もろくな大人にならねえぞ？」

「なっ!？」

橘花の返しに合わせて矢薙が両王に突き付けたのは、皮肉も嫌味も一切混じっていない、純粋な警告だった。誰も特別扱いしないと

同時に、誰にも特別な想いを抱かないゆえに、平気で人の心を見透かしてそこに秘めた傷を抉り出した。

「別に獅子のごとく千尋の谷に突き落とせとは言わない。狭い鳥籠の中で純粹培養したいならそれでもいいさ。ただ、特に人の世は残酷だ。広い見聞と仮面のつけ方くらい知らないとすぐに利用されて捨てられるぞ。俺たちみたいな人族がいる限りはな」

恐ろしい。それが素直な感想で、本当にこの子たちは稟や自分たちの娘と歳が近い人間かと思うほど、両王の目の前の二人は聡明で大胆で狡猾で、冷酷なほど理性的だ。その気になれば顔色ひとつ変えずに相手の精神を壊せるくらい感情を排除して追及することができるのではないかと感じた。

確かに開門以後、三世界間の協定が結ばれて今に至るまで、両王は時折人族の隠している裏側に触れてきていた。矢薙が口にした面従腹背とまではないかがないが、裏の裏を読んで、自らの手を汚すことなく相手を利用する術を心得ている人族はいた。ただその頭数が神界や魔界とは違って半端な数ではなかった。政治的駆け引きに自らの家族や人命を平気で持ち出してくる輩もいた。そしてたとえ交渉が破談に終わったとしても笑顔でSPたちを引き連れて引き揚げていく。

最初はこの人界が世界各地に独立した統治国家を持つ統治形態ゆえのものだと感じていた両王も、矢薙と橘花を見てその考えが生温かったのではないかと思うしかなかった。年端もいかない子どもですら自らの表情と言葉を操り、相手の表情と言葉から傷を抉り出す術を心得ているのだから。

「じゃあな。稟たちは任せませ」

「では、失礼しました」

両王が何も言い返せないのを悟ると、矢薙も橘花も軽い挨拶を残し、すっかり暗く染まった夜道に溶けるようにその場を後にしていた。

それから数日後、バーベナ学園の昼休み。

「へえ、それじゃあ明日からプリムラちゃんもここに通う……
・って、あつ！」

そんな寝耳に水な話をシアたちから聞き、橘花は思わず箸に挿んでいた弁当の唐揚げを地面に落としてしまった。すぐさま拾ったがすっかり砂埃がついており、とても三秒ルールを適用できそうになかったので泣く泣くポケットティッシュに包み、捨てることにする。一方の矢薙も、既に食べ終わった昼食の後の安眠を貪っていた中で今の話を聞いていた。いつもなら眠れないから黙ってると言うところだったが、案件が案件なので矢薙も視線だけを稟たちの輪に向けていた。

「それで、橘花さんにもお願いしたいことがあるんですけど」

「え？ 私にですか？」

「えつとですね、実はリムちゃん、橘花ちゃんと同じ年なんですよ」
「へえ……って、ええっ？」

ネリネからのお願いと聞き、楓から加えて聞かされた事実思わず、あんな以下、プリムラのプライドのために規制。なのにと言いたそうになったが、それではまた過去を穿り返してしまうだけなので橘花は喉奥に押し留めておく。とはいえ、同学年の友人が増えるのは心強く嬉しいニュースだ。

「しかも、お父さんたちが勝手に橘花ちゃんと同じクラスにしちゃったらしいッス」

「あ、それは全然構いませんよ。クラスメートも結構フレンドリーですから」

一方、そんな会話を右から左へ流し、笑顔まで浮かべて話を続ける橘花と稟たちを見て、あのときの禍根は残っていないと矢薙はひと安心していると、

「実は心配してた？」

「何を？」

青空を背景に流れる雲を眺める視界に突如割り込んできた顔に驚

くことなく、矢薙は亜沙に尋ね返す。

「シアちゃんたちと、橘花ちゃんの仲」

「別に」

「ふーん」

最初からすべて気づいていながら尋ねてきた亜沙は軽く口を尖らせたが、矢薙は軽い嘘をつかせてもらうことにした。今からいちいち話を広げるくらいなら、午後の授業のために一分一秒でも早く体力温存に走っておくべきだ。

「第一、女の子ってのはそんなもんだろ」

女というものは初対面でいきなり仲良くなつたかと思えば、数日後には仲違いして知らぬ間に仲直りしてより強固な絆を結んでいたりする、そんな生き物だと矢薙は確認している。深い理由など知ったことではないし、知ろうとも思わない。ただ自分のセックスは男で、生憎ジェンダーも男に傾いているようで、セクシャリティにはあまり興味がない。たとえるなら深海魚に遙か上空を舞う鳥の気持ちを理解させるようなもので、わかり合おうにもわかり合えない物事もこの世にはある。

「そこらへん、ナギちゃんに聞くだけ野暮だったかなあ」

「そういうこつた」

亜沙のボヤキに矢薙は小さく笑って返すと、瞼を閉じ、程よい微風と日差しの下、稟たちの楽しそうな話し声を子守歌に寝ることにした。もうすぐこの輪の中に新しい仲間が加わるそのときを静かに待ちわびながら。

Phase 3: Family Gathering (後書き)

近いうちに勤務体系が変わりそうで、作品の制作進行にどう影響するかわかりません。

まあそれはさておき、やっぱり攻撃の手がひとつ多いだけでも盤上のキングの陥落はかなり早いですね。

リメイク前の台本小説だとかなりむりくり両王相手に矢薙に売らせた喧嘩も、橘花がいるだけでここまで楽にチエックメイトできるとは思いませんでした。

人との協力はやっぱり大事ですね、やりすぎかと思うほど次章への伏線も引つ張って来れましたし。

さてこの第2章、章タイトルの「What She's Asked」の原題は「We didn't know what she has asked for」(「彼女が求めているものがわからなかった」)だったんですが、意味のとおり、プリムラの話題がメインとなりました。

各話のタイトルもそれぞれ「声なきサイン」、「無邪気・無知」、「家族の集まり」と訳せるものを用意しました。そして何気なくゲームやアニメで使用された多くの楽曲の曲名やその一部を拝借してみたり……。

以下、恒例の単語群の説明です。

・バートリ・エルジエーベト：あくまで現地のハンガリーに倣って姓+名の順に並べただけ。一般的にはドイツ語のエリザベート・バートリで広まっている、ハンガリー王国の貴族女性。(本人の証言

では) 600人以上の侍女や貴族の娘を誘拐しては監禁し、鉄の刃女などの残虐な方法で殺し、生き血を浴びていたとも。

誤解がないよう言っておくと、文中に用いた『美女が美女であり続けられる所以』とは、こういった「残虐性や狂気を美女はその外面の下に秘めている」ということだが、バートリ・エルジーベトの美貌が世界三大美人に肩を並べられるかと言えば、作者の手元の資料では不明。

ちなみに、彼女がしたとされている針で肌を裂く・指を切断・腹を裂いて性器摘出などのグロテスクな光景も、友人の話だと作者は普通に視聴できているとのこと。

・ベアトリーチェ：歴史上にはたくさん該当者がいるだろうが、本文中では『ラパチーニの娘』に登場するヒロインの少女を指す。植物学者の父を持ったがために毒草の中で育てられ、毒への耐性を身につけると同時に身体に毒を溜めこんだ少女。この作品の詳細は前述した該当項目を参照のこと。

・ハレとケ：民俗学において、ハレ、とは年中行事や冠婚葬祭などの改まった場を指し、ケと呼ばれる日常とは異なる。なお、ハレの場で着るから晴れ着というのは多くの人が知っていることと思うが、特にここでは神聖性のハレを生者の世界とし、不浄性のケを死者の世界として用いている。

・三秒ルール：言わずと知れた、床に落とした食べ物も三秒以内に掬い取れば、洗ったり埃を除去したりすればまた食べられるという暗黙の了解。今の学校ではどうなのかわからないが、作者の義務教育時代はまだこのルールが使っていた。

・セックス：sex。性、性別。学術的には単にオスかメスかの「性」。

・ジェンダー：gender。社会的・文化的役割としての「性」。昔であれば「男は外に出て働いて、女は家の中において家事労働」なのだが、女性の社会進出が進み、育児休暇やイクメンやらの言葉が出てきている今ではその概念も変わりつつある。

・セクシャリティ：sexuality。性的特質。セックスともジェンダーとも違う「性」を指す。単語の意味としては性的関心などが含まれているため、おそらくこれが一般的な「性（的）」のイメージに近いと思う。

ちなみに、作者はフェミニストでも男女平等主義者でもない・・・
・・・と思っている。

Phase : Little Girls - Smile (前書き)

今回の話は、作者が本文で指し込めなかった というか書き忘れたエピソードです。

ある意味、誤植と言えば誤植なので次回から始まる新章や、矢雑の過去への伏線も混ぜて独立させ、再構成しました。

「はぁ………」

茜色に染められた木漏れ日通り。その日、稟は溜め息を溶かしながら家路を辿っていた。原因は言わずもがな、放課後にあの満面の笑みを浮かべた悪友の趣味に付き合わされたことだけだった。結局、頭がいいのは稟も認めるその悪友は補習を命じていたはずの担任教師に倍以上の課題提出を確定させられた挙句、連行されてしまったが。

「………ん？」

学習能力のない悪友にもう一度溜め息をつき、ふと顔を上げると稟の視界に最も新しく加わった新顔二人が見えた。

「どうかしたんですか？ 二人とも揃って」

「ん？ おお、稟か」

「こんにちは。土見先輩」

稟が声をかけると、鞆と軽い食材を詰め込んだのビニール袋を持った矢薙と橘花は揃って視線を稟に向けた。この二人が揃って何を見ていたのか気になった稟もそこへ視線を向けると、新しく入荷されたというクレーンゲームのプライズだった。

「………猫、ですか？」

「はいそうです。猫さんのぬいぐるみです」

橘花は稟と同じく筐体の中に積まれた猫のぬいぐるみに視線を戻すと、

「どうですか土見先輩？ プリムラちゃんにひとつ」

筐体のガラス越しにプライズを指差して尋ねてきた。

「プリムラに？」

「はい。プリムラちゃん、初めて会ったときも猫のぬいぐるみ持ってたでしょう？」

「ああ、そういえば」

よく覚えているものだ。稟は橘花に感心したが、傍目から見るとそれは稟も同じ。考え方や手段こそ違えど、ともにプリムラのことを気に懸けていたのは事実だった。

だが稟はふと思い返した。プリムラが最初に持っていたあのぬいぐるみは所々損傷が激しい場所があった。そして、目立つところはあらかた楓が補修したようだが、そこに至るまでプリムラがなかなか手放そうとしなかったことがあった。

「そうなれば早速ナギ兄さんに取ってもらいますか」

もう猫のぬいぐるみに興味を失っていたのか、いつの間にかその場からいなくなっていた矢薙は近くにあった別のクレーンゲームでお菓子を狙っていた。今ちらと見た限りでも矢薙の腕前はかなりのものだ。プリムラと会ったときにも、シアとネリネを呼び出した詫びとして輪切りした蜜柑を模したクッションを十分もかからず取っている。

だが、

「いや、ここは俺がやるよ」

矢薙や橘花がプリムラのことを気に懸けていてくれるのは素直に嬉しいが、稟としてはここまで譲らせるわけにいなかった。何より、プリムラを家族として受け入れたのは自分だ。その自分がプレゼントするものは自分で手に入れたものだけにしておきたい。

「いいんですか？」

「ああ。だから橘花ちゃんには悪いけど」

「いえ、私はプリムラちゃんの『友達』ですから」

その友達という単語にどれだけの意味が込められているのか今の稟には理解できなかったが、橘花は素直に席を譲ってくれたことだけは理解できた。

「それじゃ私はナギ兄さん連れて帰ります。後は頑張ってくださいね、土見先輩」

夕日よりも鮮やかなオレンジ色の髪を揺らして頭を下げると、橘花は早くも複数個のプライズを手に入れていた矢薙のもとへと駆け

寄っていった。そして橘花から話を聞いたのだから、筐体と真つ向勝負を挑むことにした稟にあえて声をかけず二人とも姿を消していた。

一方、帰り道の矢薙と橘花だったが、

「そういえば、どうやってプリムラちゃんはそのぬいぐるみを手に入れたんでしょう?」

「何が?」

不意に顎に人差し指を当て、小首を傾げながらひとりごちた橘花に矢薙が尋ね返した。

「プリムラちゃんと初めて会ったときに持っていたぬいぐるみです」「ああ、あの小汚かったぬいぐるみか」

橘花の発言を受けて、矢薙はプリムラが持っていたこげ茶がかつた猫のぬいぐるみを思い出す。顔つきはリアルではなかったが、それを可愛いと言ってのける女の感性はどうやっても男の自分には理解できないと感じた瞬間のひとつでもある。

「そんなこと言わないください。ぬいぐるみが可哀想です」

「そりゃ悪かった。で、どうして不思議に思うんだ?」

「あのぬいぐるみ、前に触らせてもらったんですけど、確かにぼろぼろでした」

プリムラのあのぬいぐるみの様相に関して「小汚い」は許されなくて「ぼろぼろだった」は許される橘花の感覚も矢薙は理解できなかったが、

「ただ、『Made in Taiwan』でした」

「は?」

ぬいぐるみのタグを見た橘花の言葉に、矢薙は言葉を失い、ただ尋ね返すことしかできなかった。確か、以前に両王はプリムラが研究所から一步も外には出ていなかったと言っていた。もしその言葉が真実であるとすれば。

「なのにプリムラちゃんは外界のものを持っていた。となると考え

られるのは」

「あのぬいぐるみは誰かが与えたもので、恐らくその人物は……」

リコリス。二人がその人物の名前を出すのは必然ともいえる結果だった。

もし与えたのがシアやネリネであれば、きっと最初に再会したときにぬいぐるみに関しての経緯を口に出していたはずだ。そうすればあのとき隠していた嘘をより強固で崩しにくいものにできていたからだ。それをしなかったのは良心の呵責か、できなかつたか。どちらにしる、これで最有力候補の二人が消え、消去法で残っていたのはリコリスだけだった。

「でも、よほど思い入れがあるんですね」
「そうだな」

それだけの宝物なのだろう、プリムラがまだそれだけのものを手元に持っていることに小さく喜ぶ橘花に対し、矢薙は口調だけを変えず冷めた面持ちで返した。

わかっていることだった。たとえわずかだとしてもプリムラが救われたことは矢薙としても嬉しかったが、同時に腹立たしかった。結局リコリスに会わせてあげるとは叶わず、その残酷な真実の前に泣かせてしまった。シアたちが腰を挙げなかつた時点でこれくらいは予測しておけたかもしれないが、今さら何を言おうがすべて後出しの言い訳にしかならない。ほとほと稟には感謝しておかなくていけない。

君は何も救えない。

いつかの日のその言葉が突き刺さったままの胸をこれでもかと掻き毟りたくなる衝動を必死に抑え込みながら、矢薙は前を見る。ここから先、自分は果たしてあとどれだけのものを失えば望みを叶えられるというのだろうか。無邪気さを満喫できた幼い日々も、笑顔と温もりを与えてくれる家族も矢薙は最初から奪われてきた。そして今までも知らないできた。

唯一、昔から知っているのは指折り数えるだけの温かな記憶と、あの頃いつもそばにいてくれた一人の黒髪の少女の笑顔だけだった。

Phase 1: Lonely Siren (前書き)

さて今話から新章突入ですが、この章では橘花に頑張ってもらおう予定です。

ヒロインたちは言わずもがな、橘花も設定上はノーマルなのでまさかのガールズラブ展開にはならないと思いますが、予期せぬフラグを立ててしまうかもしれません。

まあ、立つたら立つたで回収できるように……したら徹底的に同性愛を描いてしまいそうなのでアウトな気がしますが。

そこらへんはご要望でもあれば、プロットを差し替えますので。

Phase 1: Lonely Siren

南フランス。スペインの国境近く。

「もう八年も前ですか」

双子の弟が運転するバイクの後ろに乗りながら、ふと視界に飛び込んできた薄い青の布を見て双子の姉は呟いた。嫌になるくらいの快晴の下に広がるのかな田園風景には、色とりどりの洗濯物とワイナリーが育てる葡萄棚を覆い尽くさんとする緑の葉が風に揺れる。

「何か言ったか？ アネキ」

「いえ何も」

「そうか」

簡略した答えに双子の弟は簡単な相槌を返し、舗装されていない田舎道を進み続ける。ただ、お気に入りのリボンを失くした日を思い出ただけです、と心中で答えの残りを呟き、いつの間にか追い越され大きくなっていった双子の弟の背中に頭を当てた。

そう。幼い頃、大きな黒いリボンはこの少女のトレードマークであった。

八年前の夏、あの日までは。

「ここ、どこ……？」

彼女は道に迷っていた。初めて来た別の世界、初めて来た知らない街、初めて見た様々な建物、そして初めて見た自分とは違う人たち。だが、ふと気づけば一緒に来ていた大人たちは彼女の視界から消えていた。

今より遥かに幼かった彼女にとって、頼れる人がいないことは大きな痛手だった。しかし、通り過ぎていく人波は無情にもそんな彼女に気をかけることもなく、自らの目的を果たすためにだけ動いていた。

知っている人が誰もいない環境に放り込まれ、足場を奪われるよ

うな恐怖に襲われた彼女がいつの間にか逃げ込むように来ていたのは、住宅街ならどこにでもあるような十字路だった。

「・・・・・・・・つく、うう・・・・・・・・」

立ち止まれば寂しさが涙腺を崩壊させてしまいそうだったが、幼かった彼女には涙をこらえる力も、涙が涸れるまで走り続ける体力もなかった。そしてついに溢れ出した涙で滲んでしまった世界に、彼女は一人膝を抱えてうずくまってしまった。

そのときだった。

「あなた、なぜ泣いているの？」

「・・・・・・・・え？」

「一人なの？」

「・・・・・・・・つ、うん」

彼女が顔を上げると、つばの広い白い帽子をかぶった一人の少女が心配そうに見つめていた。小首を傾げ、彼女と同じくらいはあるであろう長い髪をなびかせる少女の頭の後ろで大きなリボンが揺れる。

「お父さんかお母さんは？ 一緒じゃないの？」

「それが・・・・・・・・つ、あ、わ、私、迷子になって・・・・・・・・つ、ああ」

帽子の少女から冷静に保護者の居場所を尋ねられ、彼女は自分が今置かれている状況を思い出してしまった。いきなり見知らぬ少女から声をかけられた驚きで止まっていた涙が堰を切ったように再び溢れ出してくる。

「落ち着いて。泣いてばかりじゃ誰も助けてくれないよ」

「・・・・・・・・つく」

「あなたが出会うべき人は、もつと先にいるから」

「もつと・・・・・・・・先？」

背格好から見るに年齢はほぼ変わらないというのに、少女の声は彼女を創り出した大人たちに負けないほど大人びて響いた。そしてすうっと動いた少女の指先が示したのは、アスファルトに舗装され

た道の先にわずかに見える小さな緑の群れだった。

「あその公園に行けば、あなたの大切な人が来てくれるよ」

「ほんと？」

一人きりだった現状で混乱を続ける彼女の頭では少女の言葉を疑うことなどできず、そこに何かあるのかさえわからなかったが、そこに公園があると教えてくれたうえに大切な人　すぐに浮かんだ家族の顔　が来ると知った彼女は尋ねる。

すると、少女は首を確かに縦に振り、

「そうね。これをつけていたらもつと目立つんじゃない？」

自分の髪をまとめていた黒いリボンを解くと、少女は自分がしていたのと同じように後ろに流していた彼女の薄い蒼の長髪をいくらか束ね、慣れた手つきで結んだ。

「あとはあなたの行動次第だよ。自分から動かなきゃ未来は変わらないからね」

「うんっ」

いつの間にか涙は止まっていた。ここまで優しい人族がいることはあの娘に教えておかないといけないなと思いつつながら、彼女はさまざま踵を返し、少女が教えてくれた先の公園へ向かっていった。

一方、そんな彼女の背を見送りながら、穏やかなだけの表情を浮かべる少女のそばを日本の夏独特の湿った熱風が通り過ぎ、翡翠色の髪を揺らす。

「じゃあ頑張つてね。……もう一人の『王女様』」

そうひとりごちると、踵を返した少女は耳の形が異なる彼女と反対方向へと歩んでいった。このままの未来ではもう二度と紫の瞳をした彼女に会うことはないとなりながら。

「え？　返却されたんですか？」

「は、はい。リンちゃんでも胸が余るそうでした……」

その日の放課後、何とも言えない苦い顔をする楓の前に、橘花は先日プリムラに着せていたゴシック調の服を返してもらった。当の

本人はすっかり忘れていたのだが、やはり誰も着られないとなると、この服の行く末は古着屋か廃棄しかない。こうなると恨めしいのは今や真下を向いても足元が見えないまでに育ってしまった自分の胸で、いい加減、村の誰もか認めたおっぱいの神様がいたら本気で成長を止めてほしいと願うばかりだ。

とはいえ肝心の神様とやらがあのような様では　と橘花は諦めるしかなさそうなのだが、このままでは本気で上体を反らしただけでトップスを突き破ってしまいそうで、下着さえ金銭と手間暇がかかるオーダーメイドになってしまう。

「む、胸の辺りだけ何とかすれば着られるようなんですけどね」
「でも芙蓉先輩。私、裁縫はあんまり得意じゃないんですよ」

料理、掃除洗濯、裁縫などに分類できる家事のうち、全般的に得意な橘花でもやや苦手にしているのが裁縫だった。お下がりのおひつでもあれば裾の解れくらいは自分で何とかしていただろうが、生憎橘花は一人っ子であり、着衣は主にトップスを中心に常に新しいのに買い替えていた。もちろん、なぜトップス中心なのかは聞かないであげてほしい。

すると、

「楓お姉ちゃん。電話、麻弓から」

廊下の奥から姿を見せたプリムラが端的に用件を告げる。ちょっと待っていてください、と丁寧言い残して楓がその場を離れると、代わりにプリムラが橘花の前に来た。

「お姉ちゃんって呼ぶことにしたんですか？　リムちゃん」

「うん」

聞くところによると、今まで不安定だった魔力が安定してきたというところで、プリムラがバーベナ学園に通うことになり、橘花と同じクラスになるに当たり、橘花もシアたちに倣って少しでも他人行儀を失くそうと「リムちゃん」と呼ぶことにした。丁寧な言葉遣いだけは直りそうもなかったが、もとより村でも矢薙や橙次、林檎などの年上と多く付き合ってきたうえ、ここ光陽町でも稟を始めとし

て橘花より年上が多い。多少の丁寧語は友人関係を築くのに大した支障にはならなかった。

「何かおかしい？」

「いいえ。家族ならそれでいいと思いますよ」

間が空いたのが気になったのか、プリムラが怪訝そうに尋ねてきたが、橘花は口元から漏れる笑みを隠して答えた。良くも悪くもと言えれば問題がありそうだが、矢薙の思惑通りにプリムラはこの芙蓉家に順応しつつあるようで、それは矢薙の思惑に乗った橘花にとっても嬉しいことに間違いないかった。

するとそのとき、

「えっ？ 麻弓ちゃんも無理になっちゃったんですか？」

廊下の奥から、驚く楓の声が聞こえた。それから二言三言会話が続けられ、受話器を置く音に次いで楓が橘花の前に戻ってきた。

「何かあったんですか？」

「はい、実は」

橘花が尋ねると、どうやら次の休みにプリムラの服を買おうという流れになったのだが、肝心のメンバーが見事に集まらないというシアは神界で、ネリネは魔界での行事があるために外せないというのは仕方ないことだが、

「別に、土見先輩一人いればいいんじゃないですか？」

「その……、実は稟くんも約束させられていたとかで」

「は、はあ」

小さく苦笑する楓の前に、橘花は恐らくその言い回しからするとあのナンパ先輩に間違いないだろうとすぐに正答を導き出す。と同時に昨夜、矢薙も矢薙で「次の休みは台風女に引っ掻き回されてくる」とぼやいていたのを思い出した。とても残念なことに橘花の記憶に該当する「台風女」は一人しかいないので、きつと「見ちゃいけない先輩」と三人でどこかに出歩く予定を決められてしまったことは容易に推測できた。

だが、稟、シア、ネリネ、亜沙に麻弓までアウトとなると、楓と

プリムラが揃って面識のある頼れそうな友人・知人となると　　ま
だ一人残っていた。

「あ！　もしよかったら橘花ちゃんも一緒に行きませんか？」

「私ですか？」

「はい。橘花ちゃんなら安心ですよね？　　リムちゃん」

「うん」

私なら安心とはどういうことだろうと思う節を探す橘花をよそに、プリムラも首を縦に振り、楓と二人で話を進めていってしまった。とはいえ、次の休みの橘花の予定といえ、いつものとおり食材の買い出しと時間的制約のために普段掃除できない箇所を掃除するしかないのだが。

「私はナギ兄さんや土見先輩みたく荷物持ち兼ボディーガードにはなれませんよ？」

「でも橘花、クラスの女子で一番力持ち」

「う、ぐう」

プリムラの返しに、橘花はやつとのこととでぐうの音を吐き出した。確かに調理実習の時間に満タン近くまで水が入った寸胴を片手で持ったかもしれない。体育の授業での体力テストで大人げなく女子用の砲丸を十五メートルくらい飛ばしてしまっただかもしれない。だからといって熊女や怪力女などと呼ばれるのだけは橘花のプライドとしても勘弁してほしいところだった。それでも村では非力なほうに分類されていたのだから。

「す、凄い……ですわね」

苦笑どころか引きつった笑みを覗かせる楓に、それは何に對しての感想なんですか、と突っ込んで尋ねてみたくなった橘花だった。

話を戻すが、橘花としてもプリムラの買い物に付き合いたくないわけではなかったが、次の休みには矢薙も亜沙に引っぱり回されてしまったため、一人で家のことをすべてやらなくてはいけない。もちろん先延ばしにすることもできたが、これから梅雨に入る以上、休日の晴れ間は途轍もなく貴重である。

しかし冷静に考えると、その外的要因は楓にとっても同じ。むしろ、矢薙も祖父から教えてもらっていただけあって家事ができ、手伝ってくれるほうだ。一から十までをこなしている楓と比べると橘花の苦勞はさほど苦勞と呼べないのかもしれない。

「別にいいですよ。次の休み、空いてますし」

結局、自分の髪の毛を弄りながら橘花は仕方なさそうな振りをしてそう答えていた。

芙蓉家を後にし、返された服が入っている紙袋を振り回す橘花は溜め息をつきながら帰路に就いていた。

だが、もう何度目の溜め息をついたときだろうか。ふと、聞き慣れない音が聞こえてきた。すっと耳から入り込んでくるのに身体の奥深くに残る。歌声だ。誰かが窓を開けてコンポから垂れ流しているのだろうかと思っただが、アカペラだったおかげもあり、長らく自然を相手に遊び回っていた橘花の耳はその声質を生音声だと判断した。

誰が歌っているのか確かめてみたくなった橘花は、その歌声のするほうへ足を向けてみたが、突如声が消えてしまった。それでも構わず住宅街の反響具合から場所を絞って特定していくと、近くにぽつんとあった公園に辿り着いた。ブランコと砂場しかない小さな公園だったが、生垣で仕切られた空間の中に一人のよく見かける後ろ姿を見つけた。

「何してるんですか？ 先輩」

声をかけると、その人物は橘花のほうへ振り返った。

「橘花ちゃんか。何でもないよ」

「そうですか」

とりわけ取り繕ったように答えた稟に橘花は関心がない素振りでも返すが、それが何でもないわけがない反応だということは風もないのに揺れているブランコを見て確信した。間違いなくここには稟以外に誰かがいて、歌声の主もその誰かの可能性が高い。

あの歌声はソプラノ。となると相手は女性だが、生憎眼前の先輩に対して橘花は美少女に囲まれているか男子生徒に追い回されている印象しか浮かばない。よくもまあここまで両極端な日常を過ごせるものだと呆れを通り越して感心すらしてしまいそうだった。

「それで、橘花ちゃんはどうしてここに？」

「これです。結局誰も着られなかったそうなので」

よほど話を別物にしたかったのか、稟の質問に橘花は手に持っていた紙袋を見せ、話にひとまず乗った。矢薙のように強引に口を割らせるほどの威圧感が放てない以上、橘花は下手に出て相手の感情や理論の矛盾を引き出さなければいけない。

「それは残念、と言えればいいのかな？」

「胸だけが大きな服を買い取ってくれる店があればいいんですけどね」

橘花の自虐的な皮肉に稟は小さく笑みを漏らす。だがその隙を見逃さず、橘花は珍しく速攻に転じた。

「で、ここに誰がいたんですか？」

「えっ？」

「いましたよね？　ここで歌っていた人が」

「それは……」

一度驚いた稟の表情筋がさらに強張ったのを見て、橘花は自分の耳と推測が間違いでなかったと確信した。矢薙から聞いた見立てどおり、稟だけでなくシアたちもひっくりくるめてわかりやすすぎる人たちだ。人は皆つけているはずの仮面をつけずに今まで生活できていた理由なども橘花は気になったが、このまま社会の表舞台に出ても病的なほど蔓延する毒気の中であられ、心や精神がやられてドロップアウトを命じられるだけだ。

「ま、これは私の勝手な好奇心ですからいいですけど」

先程から一度も交錯しない稟との視線に引き際を感じ、橘花はすつと一步下がり、身を翻す。矢薙ほど上手にはいかないが、楔は打ち込めた。いずれ暇なときにでも追及していくことにした橘花は小

さく頭を下げ、稟を置き去りにするように公園を出ていった。

低い雲の混じる夕焼け空に、聞こえていた悲しそうな歌声をリフレインさせながら。

その日の夜、矢薙と橘花の住むマンション。

「ふーん。それじゃまるで歌声の主はセイレンだな」

夕食後の食器の片付けをしながら橘花から夕方の件をかいつまんだ話を聞き、矢薙は一言、大皿を食器棚に片しながらそう答えた。

「セイレンというと、あの海の魔物ですか？」

その名前くらいは橘花も知っていた。歌声で船乗りを魅了して海に引きずり込むギリシア神話に登場する魔物だ。だが、セイレンは人魚と違って下半身は鳥であること、そして一説には三姉妹であるらしいということは矢薙から蘊蓄を述べられるまで知らなかった。

「ですけど、なぜ喩えがセイレンなんです？ 確かにあの歌声は綺麗でしたけど」

「セイレンではないけど、そっちはローレライの伝説だ」

流し台の中の掃除も終わった橘花が蛇口の水を止めて尋ねると、こちらもちょうど食器の片づけが終わった矢薙は食器棚のガラス戸を閉めて答えを返した。

「まあ、それも複数の説があるけどな。その中でも『Ich weiss nicht was sollen bedeuten』の歌い出しで始まる詩が一番有名だけど、ローレライのヒロインは最後、恋人に裏切られた末にライン川に身投げするんだ」

「そう、なんですか」

とはいえ、橘花は詩人ハイネも、矢薙の口にしたドイツ語がハイネの『歌の本』に収められた詩の冒頭であることも、ローレライの伝説さえも今初めて知ったのだが、確かに身投げした女性の歌となると悲しそうな歌声という率直な感想も的を射ており納得できる。

思えばセイレンと混同されてしまわれがちな人魚も、人間の足を得る引き換えに綺麗な声を失った『人魚姫』は王子様に募る想いを

伝えることも、今までの日々を取り戻すために王子様の命を奪うこともできず、自らが海の泡となって消える道を選んだ。声など感情を表現する道具のひとつでしかないが、言葉にしなければわからないものというのは確かに存在すると再認識させられる寓話だ。

「どうしてあんな悲しそうな歌声だったんでしょう」

「俺はその歌声を聞いてないからわからないけどな、その歌声の主にとつても『Ich weiss nicht was soll es bedeuten』だとしたらかなり面倒な状況だ」

『何がそうさせるのかはわからないが』　ローレライの伝説にまつわるハイネの詩の冒頭に出てくる文句の意味を確かに受け止めた橘花は、風呂に入ってくると言い残した矢薙の背中を見送ると、悲しい歌声と、ローレライの岩山からライン川へその命を投じた女性がそのとき抱いていた深い悲しみと絶望を思い、小さく身を震わせた。

翌日、授業が終わった三年B組教室。

程よい解放感に包まれた空間の一角で一人、矢薙は先の授業で嫌になるほど見させられていた五線譜の上で踊る音符と睨めっこを続けていた。

苦手なのはわかっている。歌や音に囲まれた生活などしてこなかったからだと言いつけにならない言いつけをしたところで、指導要領で決まっている音楽の授業は毎週一回はやってくるのだから、矢薙もこれだけは諦めるしかないのだが、

「でもさ、ナギちゃんにも苦手なものってあったんだね」

「うるさい。俺だって人間だ」

「そういえばそうでしたわね」

「今思い出したような台詞だな。おい」

今だけでも横槍を入れてくる亜沙とカレハだけはどうにかしてほしい。そう思つて戻した視線はこれまた嫌になるほど間接的に音痴だと罵られた原因となった歌の楽譜。知識や音感・音量はあるのに、

音程を取るのが壊滅的に下手。それが先の授業でクラスメイト全員が矢薙に抱いた感想だった。

「まあ、この世に完璧超人なんていないってことだよ。ね？ カレハ」

「そういうところがまた、矢薙さんらしくていいのですけれど」

普段は完璧だが時折あと一歩が抜けていたりするのが自分だと言われると、それはフォローどころかむしろ傷つく発言だ。今さらながら矢薙は自分が周囲からどう見られているのかがわかったが、思えばそれを今まで気にしたことがなかったのも事実だった。

「くそ。反復練習とかマジで勘弁願いたい」

知識とは別にセンスまで要求されるようなものは人の頭で理解しきれないのだが、先天的な素質の有無を嘆いても仕方ないことで、それなら後天的に飛躍できる点を伸ばすべきだが、先の授業ほど他人の目を気にしたのは初めてだったかもしれない。

「てか、俺は村でも音痴を披露し続けてきたのか？」

「そうなるよね、必然的に」

思わずひとりごちた恥ずべき過去にまたもや横槍を入れてきた亜沙を軽く睨んだが、平まれた当人は視線をそらし、素知らぬ振りをするばかりだった。だが、矢薙も亜沙の適応能力の高さには驚くばかりで、出会って知り合った経緯のせいもあるのか、クラスメイトの中でも矢薙に対して全く壁を作っていないのは亜沙くらいだった。

「はあ、まあいいや」

音楽で食っていくわけではないだし、と諦めをつけた矢薙は閉じた教科書を机に突っ込む。次の授業は矢薙が唯一心待ちにできる科目だ。人間万事、塞翁が馬ともいう。楽あれば苦もあるならその逆もあっていいはずだ。

「矢薙さん、この授業のときだけは真面目ですわね」

「へ？」

そういう雰囲気は滲ませていたのだろうか、だがカレハの言葉に尋ねるまでもなく理由はわかっている。単に興味があるだけだ。村

にいた頃はなかった科目、魔法学というものに。

「あー、次ってそれかあ」

しかし、矢薙の隣席の少女は心底気だるそうにぼやくと、

「それじゃナギちゃん、カレハ。代返とノートはお願いっ」

そんな言葉を残し、亜沙はいつものようにどこかへと行ってしまった。

「あれはサボるって宣言だよな？」

「まあ、いつものことですし」

亜沙が出て行った教室前側の出入口を見ながら、矢薙とカレハは日常風景を見届けていた。最初は魔法学がどんなことをやっているのか事細かに説明してくれた亜沙も、矢薙がその授業内容を理解するに比例してその真剣さを失い、仕舞いには授業中に寝たり、今みたいに授業をサボったりようになっていった。

「俺、何か悪いことしたか？」

「さあ………。私にもさっぱり」

他人の目を気にする以前に、この間の亜沙の態度の変化は気になった矢薙はカレハに尋ねるが、大の親友であるはずのカレハも小首を傾げるばかりだった。

しかし昼休み、昼食時間。

「あ、やっぱりそうだったんだ」

「学校の空気が音楽をあまり重要視していませんでしたからね」

何ともまあ、矢薙の予想どおりの行動だったとはいえ、魔法学のサボリから復活した亜沙は早速橘花から村にいた頃の矢薙の音楽の成績を聞き出していた。それだけならまだしも、いかにもな憐れみと軽い嘲笑を混ぜた笑みを浮かべられたのは少し癪に障る。律儀に代返とノート取りなんてしてやるんじゃないかと悔やみつつも、矢薙は亜沙への仕返しを考えることにした。

「でも橘花は音楽が上手」

「私は比較的インドアでしたから。ピアノもそこそこ弾けますし」
プリムラがそう言うと、箸を持ったまま橘花は両手でピアノを弾

くような手の動きをしてみせる。あの村において備えつけのピアノがあったのは橘花の家だけだった。まだ橘花と知り合う前には矢薙橙次、林檎の三人で誰がこのピアノを弾いているのだろうかと妄想を張り巡らせたりもしていた。

「でもこれはある意味、矢薙先輩の歌が聴いてみたいッス」

「うわ、怖いもの知らずだねシアちゃん」

楽しそうに話に乗ってきたシアに、亜沙はおどけ半分にも聞き捨てならない台詞を返す。

「そ、そんなに酷いんですか？」

「待て亜沙。人の欠点誇張すんじゃないねえ」

「欠点の自覚はあるんだね」

「だからお前……いや、お前らは俺を何だと思ってんだ？」

先の時間、完璧超人などいらないと言っていたはずの当人の言葉に、楓まで驚き半分の表情で尋ね返してくる。ここに常識人はいないのかと疑いたくなる反応を示してくれる稟たちに矢薙は改めて自分どう認識されているのか尋ねたが、

「強引」

「遠慮しない」

即答した亜沙とプリムラには後で何かしらの報復をするとして、

「え、えつと……」

「キレると怖い人、つてところでお願いするッス」

「ま、真面目な方だということ」

戸惑う楓に、首を傾げながら答えるシア、苦笑するネリネはまだ空気を読んでくれたということ、ひとまず態度は保留。ちなみに矢薙はこのとき後でシアにはキレると怖いのは誰でも同じだと言っておこうと決めた。麻弓からの噂に聞くとお前の隣の少女は魔法でこの屋上を吹っ飛ばしたらしいじゃないか、と。

そして、

「いろいろ無茶する人、ですな」

「ナギ兄さんはナギ兄さんですから問題ありません」

無茶しているのはお前のほうだとツツコンでおきたくなる稟の答えと、どこか答えになっていない橘花の答えはスルーすることにしたが、久しぶりに橘花のピアノの話が出てきたせいも、ふと矢薙は昨日の会話のせいもあって思い出したことがあった。

この世界では、人は目に見えないものから感情を揺さぶられることがある。そしてそれは、ひどく俗物的なドラマで物質的・精神的な別れのシーンを見たときよりも、宝物を誤って失くしてしまったときよりも激しく人の心を揺さぶり、混乱させ、たとえようのない喪失感や後悔などを呼び起こすものだ。

「でもナギ兄さんはいつもみたいにすればいいじゃないですか。歌の上手な人を見つけて」

「ああ、それは考えてる」

「え？ 先輩。それってどういうことですか？」

とはいえ、いつまでも音痴のレッテルを恣にしているわけにもいかないの、その対策をしよう矢薙と橘花が話をすると、その本筋が見えなかった稟がふとその会話に混じって尋ねる。

「実はですね土見先輩。ナギ兄さんは人真似も得意なんですよ」

人に限らず、動物の行動は周囲の真似・模倣から始まる。親の、大人の行動を真似することから始まり、技術や危険などを学習し、自らの心身に会得させていくのだが、

「つまり、自分のものにするのが早いということなのか？」

「そうなんですよ。一度やり方を見てしまえば、ナギ兄さんはどんなことでもできちゃいますから」

なぜ自分ではなく、橘花が制服のボタンを弾き飛ばしそんな胸を張って自慢するのはわからないが、稟に説明する手間は省けたので矢薙はこれでよしとしておく。最初は気恥ずかしかったこれも慣れたら何てことはない。

「なので今、ナギ兄さんに必要なのは歌の上手な人というわけなんですよ」

人差し指を立てて説明仕立てにまとめあげた橘花だが、矢薙はそ

うそう簡単に歌がうまい人など見つかるわけもないと思っていた。頭のよさというのはある程度の一元性があるために他人に触れ回れるが、歌の上手さには客観性といった心理的要因だけでなく歴史背景や文化などの外的要因という無数の漠然としたものが大きく影響しているためだ。

しかし、

「あ、それなら適任者がここにいるッス」

「本当か？」

思わぬシアの発言に矢薙は身を乗り出し、その言葉に飛びついた。普段のシアの言動からは芸術性のげの字も窺い知ることはできないが、この娘にはあの父親がいる。恐らく与えられてきたものの質の高さは期待してもいいはずだと踏んだが、

「何を隠そう、リンちゃんの歌声ならきつと間違いなく受け入れてもらえるはずッス」

「へえ……」

これは予想の斜め上。まさかシアが細やかに万人受けするかどうかまで考えてくれていたとは思わなかった。矢薙はその点への関心も含めて感嘆を漏らす。

「でも、そうなると実際に聴いてみたいよね」

恐らく何の意図もなく、ただその会話の流れに従っての発言だっただろう。だが、亜沙のその発言で矢薙は微々たる空気の変化にはつきり気づけた。

今、とにかく寒くなった。どこかから足元に流れ込んでくる否定、拒絶、遮断といった冷たい感情の根源を視線だけで追っていくと、すぐにわかった。

「ねえリンちゃん。落ち着いたらでいいから、久しぶりに歌ってもらえないかな？」

「私も聴いてみたいです」

その少女がこの場を冷やす感情を放っていることに気づかず、シアに乗っかる形で楓もその根源へと歩み寄り、そして、

「申し訳ありませんが」
矢薙がほぼ予想したとおりの反応が返ってきた。

その一方で、

「何を隠そう、リンちゃんの歌声ならきつと間違いなく受け入れてもらえるはずッス」

「へえ……」

矢薙が感嘆を漏らした理由はシアが万人受けという点まで考慮していたせいもあることを見抜いていた橘花だったが、

「でも、そうなると実際に聴いてみたいよね」

亜沙のこの発言に、橘花は言い知れぬ不安を覚えた。理由はわからないがただ、地雷の起爆スイッチを踏んでしまったような感触足を離せば最悪下半身ごと命を吹き飛ばされるような恐怖や不安が作り出した心の隙間に流れ込んでくる。

ちらと矢薙を見ると視線が泳いでいた。やはり同じ感覚に囚われたのだろうか、突如足元に漂い始めた冷たい空気の放出元を探しているようだった。

「ねえリンちゃん。落ち着いたらでいいから、久しぶりに歌ってもらえないかな？」

「私も聴いてみたいです」

「申し訳ありませんが、私、もう人前で歌うのはやめたんです」

シアと楓の要望にも、言葉上は丁寧でも口調をそうは見せずに断ったネリネは、まだ半分近く残っていた弁当を片付け、一人先に屋上を後にしてしまった。

啞然とする稟たちをよそに、本人がそう言う以上は仕方ないとさつさと踏ん切りをつけた矢薙はまだ残っていた弁当を口に運び、プリムラもネリネが立ち去った先にちらと視線を送っただけで黙々と弁当に箸をつけていた。このまま時間が経ったとしてもただ昼休みが終わるだけだと橘花もおかずに箸を伸ばそうとしたが、そこでふと気づいた。稟だけが今の会話に加わっていない。しかも、ここま

で異様な空気が流れたにもかかわらず、だ。

土見先輩は何か知っている。あのとき楔を打ち込んでおいたのは正解だったと歌声繋がりで思い返ししながら、橘花も残っていた弁当をつまんでいくことにした。

昨夜の話になるが、橘花は矢薙からセイレンが生まれた説のひとつに罰を与えられたためという説があることを教えてもらった。元はペルセポネに仕えていたニンフだったが、ペルセポネがハデスに誘拐されるのを許したことをケレスに責められ、鳥に変えられたというものだ。だがそうだとしても、仕えるべき主を拐されて憤慨しない従者がいないわけがない。それを思うとあの悲しい歌声の主はローレライの少女ではなく、本当にセイレンだったのかもしれないと橘花は思った。

Phase 1: Lonely Siren (後書き)

さて、双子の姉である翡翠色の髪の少女は過去、蒼髪と紫色の瞳をした少女と出会っているわけで……。

今回はちょっと単語や比喻が回りくどい気がします、後々まで続く伏線もありますのでこれで勘弁してください。

とはいえ、原案が複数話のシリーズもののため、この話だけで回収されない伏線もあるんですけどね。

以下、初出の単語群の説明です。

・砲丸を十五メートルくらい：橘花が体育の授業で行われた体力測定で叩き出した砲丸投げの記録で、正確には16m29（あくまで授業の一環だったため、非公式記録）。

ちなみに実際の女子砲丸投げの国内記録は2004年に出された18m22。また、ジュニアで15m75（1998年）、高校で15m53（1997年）、中学で16m41（2005年）となっており、実際に大会で使用される砲丸も四キロであるため、橘花はこの時点で近い年代のトップクラスに食い込むことができる。

・セイレン：siren（希）。英語のサイレンの語源で、セイレンとも表記される。本文中に登場したように、下半身が鳥、上半身が女性のギリシア神話に登場する海に棲む魔物だが、下半身が魚である人魚と混同されがち。

本文の最後にあつたとおり、セイレンの誕生経緯についてもいくつかの説や解釈があるが、何より特筆すべきはその歌声の力であり、引き込まれた漁師たちの死体が島になるほど山となっていたともさ

れるが、混同される人魚の歌声も同様の魅力を持っており、どちらがオリジナルなのかはわからない。

・ローレライの伝説：ローレライ（英表記：Lorely）とはドイツ、ライン川に突き出た形で存在する岩山。付近の水面下に無数の岩礁が潜んでいたためにかつて船の往来が危険だった箇所で、伝説は船が沈む事実が魔女伝承と結びついたもの。

悲恋に打ちひしがれた女性が身を投じたとされる岩山は今もあり、そこに向かって叫ぶと木霊が返ってくる。また、言い直すようだがローレライに棲むのは矢薙の言つたとおりセイレンや人魚ではなく、魔女である。

・ハイネ：ハインリヒ・ハイネ（1797 - 1856）。ドイツの詩人で、『ローレライ』が収録された『歌の本』の著者。ちなみに『ローレライ』にもフリードリヒ・フィリップ・ジルヒャーによって曲がつけられている。

・ライン川：スイスに源流を発し、ドイツ、フランス、オランダを通り北海に注ぐ国際河川。全長約1223km。うちドイツを約698kmが流れており、ドイツ国民から「父なる川」と呼ばれている。

余談だが、かのルール工業地帯はルール川とこのライン川に挟まれた箇所にある。

・『歌の本』：前出のハインリヒ・ハイネの著書のひとつ。1833年刊行。

余談だが、本文中に登場した『Ich weiss nicht was soll es bedeuten（訳：何がそうさせるのかはわからないが）』から始まる前出のローレライの伝説について描かれている詩が含まれる節の名は「ききょう（＝帰郷）」で

ある。

・『人魚姫』：1836年に発表されたハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話。この作品は二次創作に厳しいアメリカの某ブランドのアニメ映画に限らず、誰でも絵本などで知っていると思う。

Phase 2: Pieces of Pray (前書き)

今話、一部登場人物の行く場所が場所だけにフェイズのタイトルの綺麗さの割には特に性的にエグい表現が見受けられるかと思いません。

まあ、そのコントラストがあってより日常と非日常の差が際立つと思うんですけどね。

そして、矢薙の過去に触れる一場面も……………。

Phase 2: Pieces of Pray

わかっている。

人魚姫の恋も、叶わなかったように。

だから、これでいい。

ローレライの少女のように、私は身を投げたのだから。

深く暗い、遠すぎる過去の後悔の中に。

八年前。季節は確か夏だった。

「落ち着いて。泣いてばかりじゃ誰も助けられないよ」

気づけば迷子になって、独りぼっちになって、泣くしかできなかった「私」に声をかけてくれたのは人族の少女。その声はとても冷静で、透き通っていて、大人びていて、不安と恐怖からこぼれた涙で腫れていた「私」の心を優しく包み込んでくれた。

「あなたが出会うべき人は、もつと先にいるから」

そして、その少女が示してくれた小さな公園で「彼女」は出会うべき人と出会った。しかしそれから間もなく、その人の名残と思えるものを「私」の中に見つけた「彼女」は「私」を残して、一人で消えてしまった。

本来、ここにいるのは「私」ではなく、「彼女」だったはず。

だから、「私」は。。。

その日、かつての白い都市はその一部だけが昔のように破壊と流血、殺戮に染まっていた。

「もう逃げ場も救いの手もねえぞ？」

「さて、それじゃあ改めてお付き合いいただきましようか」

スペイン、サラゴサの一区画。ここが住宅街から離れていた

ところにあつたのはこの双子姉弟としても好都合だった。

「貴様ら、こんなことをしてただで」

「済むとは思つてませんよ」

二重三重にも手足を縛られ、床に転がされた男の言葉を遮り、双子の姉は愛用のシアン色の刃を男の喉元に突きつける。目隠しもされているとはいえ数多の人の血を吸った刃が持つ独特の雰囲気はわかるのだろう、男は脂汗に塗れた喉元を反らし小さく唾を飲み込んだ。

「けど、俺たちは本気だ」

まだこの男に唾を飲み込めるだけの余裕があることが気に入らなかつた双子の弟は右手に構えた愛用の銃の口を男の後頭部にキスさせ、わざとゆっくり音を立てて撃鉄を下ろした。確実に下ろされたその音がこの双子姉弟の意志の高さを窺わせる。

同時に、弟是最奥の部屋にあつた嚴重そうな金庫を破壊して強奪してきたA4サイズの茶封筒を姉に見せ、そのまま手渡した。表面に大きく「X」と書かれているそのいかにも怪しい雰囲気、封筒を開き、姉はその中に入っていたいくつかの資料に目を通していく。

「何をふざけたことを。貴様ら二人だけで何ができる？」

「そうですね……」

言葉上だけでもまだ反抗する力は残っている男が吠えたが、姉は資料に目を通したまま相槌ひとつで受け流す。が、

「ならばレコンキスタでもやってのけましょうか？」

「何っ？」

「この世界は私たち人族のもの。ヘレシーどもには消えてもらいますか」

「ま、待てっ！」

資料を茶封筒に戻しながら姉は冷淡な瞳で見下ろした男に向けると、無様に伏臥する男を嘲る口から「始末」の一言を告げた。尋問のひとつでもあるかと思いきや、その段階を踏まずに話を打ち切られたことに焦る男は今まで双子姉弟が葬ってきた者たちと同じよう

に命乞いの文句を口にしたが、既に遅かった。

「わ、私を殺したら、お前らの知りたがっていることはわからないままだぞ？」

「だから何です？」

「そんなもん、別の奴に聞くさ」

二人揃って男の言葉を払いのけたと思うと、弟が男の後頭部にキスさせていた銃口から鈍い鉛の弾が吐き出された。もう二度と動かない男の頭の下からじわりと床に広がっていく粘稠性のある赤黒い液体をひとしきり眺めた後、無言のまま二人はその場を立ち去った。「まったく、なぜよりもよってこんな街にまで」

「そんな理性を奴らに求めるほうが間違ってる」

他人の血と硝煙の臭いを拭い去り、二人はサラゴサ市の紋章を思いながら戦闘で火照った身体を鎮めようと世界遺産、サン・パブロの教会塔の上から深い夜色に染まった街を眺める。だがここに来てまでも漏れるのは世界遺産やその背景の歴史への感嘆句ではなく、終わりの見えない血塗られた争いへの愚痴だった。

始まりがあれば終わりがある。だが、既に始まっていたものを引き継いだだけに過ぎない二人にこの道程はとても艱難すぎた。今もこうして火照りを鎮める度に数年前の思い出さえ抜け落ちてしまっている感覚に囚われ、学校生活など半世紀も遠い昔のことのように。まだあの頃の呼び名だけは忘れていないのが救いだということにしておかないと、失ってしまった思い出の数に比例した重量の十字架に押し潰されてしまいそうだった。

「……ねえさんたちは、元気なんでしょうか」

「さあな」

夜風に流れていく姉の独り言に、弟は小さく相槌を返すが、「でも、戻ってみたいですね。あの頃に」

姉の言うあの頃がいつなのかは容易に想像がついた。放課後の調理室、当時直面していた問題への対策を相談しながら結局はカードゲームをして遊んでいた日々と些細な嘘で構築された世界を思い出

した弟は、その独り言だけは耳に届かなかったことにしておいた。

ようやく訪れた休日。そのときが来るまで平穩に過ごしていた矢薙には、退屈すぎる学校生活のちよつとしたアクセントになっているはずだったが、

「それじゃナギちゃんはこっちのほうが好み？」

「んなことは俺じゃなく稟に聞け」

ライトグリーンとパールピンク、二種類の下着を手にする隣席の少女を前に腕を組みながら即答。そして矢薙は天然なのか計算高いのかわからない亜沙との即座に会話をシャットアウトさせる。できたら視界もシャットアウトしたいところだが、目を閉じていると逆に怪しまれる気がしたのはここが木漏れ日通りにあるランジェリーショップで、周囲を幾数人の女性と女性用下着に囲まれているからか。

最悪なことに店内に見受けられる男性は自分だけ。なぜ休日こんな辱めを受けなければいけないのかと思いつくと、去る数日前に特に考えることもせず、に亜沙からの誘いを受けてしまった自分の過失に行き当たった矢薙は小さく溜め息をついた。

「ボクはナギちゃんに聞いてるんだけどなあ」

「だったらこんなのでどうだ？」

それでも懲りずに、矢薙の心情など無視して絡みついてくる亜沙に、矢薙はやや店の奥にあった上下の下着一式を手に取り、放り渡す。危うく稟にも雌猫の一匹くらい飼いたい願望はあるはずだと自分の性癖と男女観の混じった毒を吐きそうになったが、何とか喉奥に押し返した。稟は自分とは違って綺麗すぎる。元より比較すべき対象でもない。

「こ、これはちよつとキワドいんじゃないかな？」

「だったら俺に尋ねるのはやめろ」

「う……うん」

いつの間にか自身の言動に棘が生まれ始めたことに違和感を覚え

ながらも、矢薙はビビッドな赤と黒を基調に縁をレースで彩られたTバックの下着を手に顔を赤らめている亜沙の手からハンガーを奪うように取り返した。

そりゃあ白昼から細く白い喉を鳴らして雄猫を誘う文句も知らない子猫には早いだろうな。素直にハンガーから手を離れた亜沙を横目にそう思いながら、それを元あった場所に戻し　やはり今日の自身の言動に棘があるのはあの日々のせいだと確信できるほど、矢薙は先程から頻繁に脛の裏にちらつく夜伽の光景が煩わしく感じていた。

「矢薙さんは大人びた印象のほうが好きなんですか？」

「さあ？　どうなんだろうな」

「では、どんなのが？」

「当ててみな。当てたら同じのを買ってやる」

どうせ純粋なカレハに自分の歪んだ性的嗜好を当てることなど無理だろうと踏んだ矢薙は、カラフルな下着に彩られた店内をぐるりと見渡しながら挑発的に返す。

村に住んでいた　毎夜あの淫蕩に塗れたあの数年の間、矢薙はまだクロツチ部分に黄色い染みや恥垢がこびりついた綿の白パンツからボンデージ、赤蠟に縄化粧まで見てきた。だが結局触れてきたものは服や下着など身にまとうものではなく、普段は隠されている心と身体だ。地位や名誉などではない人間の本质とはそこにあり、隠すものを失った男と女が行き着く先は肌や吐息を重ね、空虚な理性と醜く淀んだ衝動がごちゃ混ぜになった快樂の共有なのだと思わせるに十分すぎた時間と経験を積んでしまった矢薙には、この森羅万象に蔓延する穢れに触れてもいないというのに可愛い下着で何を隠すのだろうかと逆に尋ねてみたくなった。

その一方で、年齢的に許可が下りていた橘花が両親の意向である場に一度も足を踏み入れていなかったことだけは若干の心残りがあり、同時にわずかに残っている矢薙の良心にとっては救いでもあった。

「同じのって……まさかこうなの？」

カレハとの会話に混じってきた亜沙がそう言って指差したのはマネキンが着ていた下着。バストアップや姿勢の補正効果やらのポツプや脇に置かれた14型の薄型液晶ディスプレイからエンドレスリピートで流れるCMがうるさかったが、とにかく最初に矢薙の目についたのはその値段だった。

「……亜沙。お前は体型じゃなくて性格に補正かけるほうが先だ」

「うわ、さりげなくセクハラだよ。ナギちゃん」

「カレハ。ここらでいい精神科医は？」

「さ、さあ？ 私にはさっぱり縁がなくて」

「それは残念だ」

「申し訳ありませんわ」

わざとらしく反応する亜沙は無視し、まだあまり知らない光陽町の病院についてカレハに尋ねると、カレハもさりげなく乗ってきてくれた。もちろん周囲の友人知人にも精神科医には縁がないほうがいいうえ、今の矢薙の発言に性的なものが含まれていたとしても真っ先に高額な商品に目をつけた亜沙には一秒でも早く紹介しておいたほうがいいと感じた。

「な、何なの二人揃って！」

溜め息まじりに考え込む矢薙とカレハに、亜沙は自分にも意識を向けさせたが、

「ん？ さっきのを着たいんだつたら買ってやるけど？」

「いい。遠慮する」

話をすり替え、視線を先程店の奥に返したあの下着に向けて尋ねると、亜沙はそれ以上何も言わずに口をつぐんでしまった。

「ああ、そうかい」

やはり亜沙もカレハも自分と比べたらまだ子猫。矢薙は斜から見下した言葉を心中で吐き出す。これは幸いか、自身の女としての顔の着飾り方も、心ここにあらずの男をしなやかにベッドルームに誘

う仕草や口説き文句も二人はまだ知らないようだ。

思えば昔、矢薙は夜伽の場で強かな女は内側で狙った男を落とすていくものだと教わったが、どこが女の内側で、そこをどう使つて落とすのかまでは理解できなかった。異性と身体を重ね、性器を介してひとつに繋がっていたのはただそれが気持ちいいからというだけで、そこに快樂はあつても愛情はない。あつたとしてもあからさまなフェイクだった。

「どっちがガキなんだかな」

ひととおり改めて店内を見渡し、矢薙は思わず呟く。そして、店の入口付近にディスプレイされていた、天使がまともでも違和感がないほど洗練されたデザインの白い下着が似合うであろうあの少女を、今でも自分は忘れていないことを実感した。

その頃、同じく木漏れ日通りの服屋。

「あ、あの……。橘花ちゃん？」

一方こちらはプリムラの服を買いに来た面々　だったが、

「ん〜っ、やつぱりこっちのチェックのスカートもいいですけど、

ここでこのベルトに合わせたパンツにするのも悪くないですよねえ」

「……。楓お姉ちゃん。助けて」

「す、すみませんリムちゃん。私には無理です」

楓に救いを懇願するプリムラを等身大の着せ替え人形のごとく扱ひ、もはや暴走と呼べる域にまで達してしまった橘花を前に、楓もプリムラも人選を大きく間違えたと後悔せざるを得ない状況に追い込まれていた。

「さ、次はこれと合わせてみますか。リムちゃん」

「き、橘花。もうそろそろ勘弁してほし　」

「何言ってるんですか。可愛いものはいくらあつても困りませんよ？」

いつの間にか持ってきたのか、右手にボトムス、左手にはトップスを三着ずつ手にして笑う橘花の言葉は間違つてはいはないはずだ。事実、橘花同様に楓も可愛いものをより可愛くするのも、それを見

ているのも楽しい側だったが、橘花のこれは聊か限度を超えている。そう言えば　と、楓は亜沙づてに矢薙から聞いた橘花のエピソードを思い出した。常に下手から丁寧語で静かに話すスタンスの橘花は、一度でも強く押し込んでくるのを許すと、普段とのギャップから大抵の人間は抵抗できないまま押し切られる、と。しかも押し切られたのはあの矢薙もだというのだから、説得には骨が折れるのを覚悟するしかなかった楓だが、もはや自分では全身骨折しても足りないくらい橘花が勢いづいてしまっているのは目に見えて明らかだった。

「い、いや、でも服はかさばって」

「さあさあ！　早く試着してみてくださいリムちゃんっ」

一方で、結局六本のハンガーを手渡されると同時に試着室に押し込まれ、カーテンを外から閉められたプリムラは、橘花の強い願望と期待の眼差しを背後のカーテン越しに感じつつ、眼前にある鏡に映った自分の精神的に疲れた顔を見てただ溜め息をつくしかなかった。

だがこんなことをしていても何の問題解決にもならない。腹を決めるように何度目になるだろうかわからなくなった橘花チヨイスの服を脱いでいくプリムラだったが、

「あ、そういえば芙蓉先輩。リムちゃんのブラとかもまだですよね？」

「えっ？　あ、そ、そういうえはまだですね」

「じゃあ次はそこですね」

カーテンの向こうから聞こえた橘花と楓の会話に、この苦痛はさらに加速してまだ続くことが確定したプリムラの手は確実に止まっていた。

昼過ぎ。一通りの買い物を終えて、案の定二人分の荷物を手にした矢薙が少し足を伸ばす亜沙とカレハの後をついていくと、視界が開けた。中央には噴水。その周囲もベンチや石畳などしっかり整備

されている公園だった。

「それじゃカレハとナギちゃんはここで待っててね」

いくつかあるベンチの前でそう言つと、亜沙はさつと踵を返し、何やら向こうに停車しているピンク色の車の周囲にできている人だかりに向かつて駆け出して行つた。時折ふわつと風に流されて甘い香りが人だかりのほうから漂つてきた。そこから離れていくほとんどの人たちの手にはクレープが握られている。

「矢薙さん。座りませんか？」

「ん？ あ、ああ」

少しばかり遠ざかる亜沙の背中と甘い芳香に意識を持つていかれた矢薙に、先にベンチに腰かけていたカレハの声がかかった。自分の右隣を手のひらで軽く叩いている。カレハの左隣にも一人分のスペースができていることも踏まえると、これはここに座れと言つことだろう。矢薙は遠慮なく腰を下ろした。

公園内をぐるりと見渡すと休日のせいか人影も意外と多い。ほとんどが女性だけのグループかカップルかという有様だけはどうにかしろと思つたが、それを具現化したところできつとこの光景がむさ苦しくなるだけだ。

「わざわざお付き合ひさせてすみません」

「いや、たまの気分転換にはなつた」

「それでも、あまり人ごみが好きではないように見えましたわ」

せつかくの休日を潰され、九割が社交辞令でできた言葉を返す矢薙の言葉に、カレハが鋭い意見を返してきた。

「そりゃあ前住んでたところと比べると、な」

人酔いと言うほどではないが、少なくとも村にあつた商店街はあんなに洒落て活気あるものではなく、公園も砂地か野ざらしで雑草は生え放題だった。そういえば橙次や林檎姉さんは元気でやっているだろうか、矢薙がふと村に残っている友人のことを思い返している、

「……何が見えているんですか？」

「え？」

不意を突く形で尋ねてきたカレハに尋ね返すと、本当に鋭い一言をさらに投げ返された。

「今もそうですわ。矢薙さんは時折、目の前にあるものを見ていないように思えてしまっています」

「何だよ。俺だってたまには妄想に浸りたくなるさ」

目の前にあるものを見ていない。カレハが口にしたその言葉に矢薙は嫌というほど心当たりがある。だが今それを話したところで何になるというのか。また鼻をくすぐってきたクレープの甘い香りに混ぜて、矢薙は冗談めかして話を終わらせることにした。

「ですが、矢薙さんは私たちの向こう側に別の誰かを見ていませんか？」

用法は間違っているだろうが今日三度目の正直というべきか、カレハがついに核心を突いてきた。はつきり言うのと、油断していた。

単に妄想癖の強い女ではなかったと改めてカレハの印象を塗り替えたが時既に遅し、カレハの視線はわずかばかりの動揺を示した矢薙をしつかりと捉えていた。

「いずれ……、いずれそのときが来たら話す」

好奇心ではなく心配の色を浮かべるカレハの瞳から矢薙は一旦視線を背けると、絞り出すように答え、左手で頭を抱えながらすがりつく視線を振り切るように返して瞼を閉じる。

矢薙としてはできるなら稟たちの前からは無言で消え去りたかったが、それが無理なら離別の台詞と一緒に送りつければいい。当然のごとく返ってくるであろう質問にはもちろん答えるつもりなどないが、「そうなる」ことくらい最初から覚悟を決めている。だからそれまでは口にしたくない話題だった。

だが、その間もずっと頭の中ではもう一人の　あの頃のままの自分が悲鳴をあげていた。

「……ちゃん？ ナギちゃんっ！」

自分の名を呼ぶ声にふと我に返ると、目の前が暗かった。それが

いつの間にか戻ってきた亜沙の影が原因だと理解するのに数秒の間を要した。

「どうしたの？ 具合でも悪い？」

「いや、何でもない」

「ほんとに？」

「ああ。来週の音楽の授業のことで鬱になっただけだ」

疑り深く再度尋ねてきた亜沙に矢薙は適当な言い訳をつけて返した。とはいえ嘘はついていない。実際、音痴を自覚した以上、音楽の授業は確かに苦痛になっていた。

「ふうん。で、音痴のナギちゃんの対策は？ その音痴をどうするつもり？」

わざと音痴を連呼するのは嫌味以外の何でもないが、あの頃を思い出すような話題からは少しでも遠ざかりたかった矢薙はそれも構わず、亜沙からお礼だと奢ってもらった飲み物に口をつけた。

「とりあえず他人が聞けるくらいにしとかねえとなあ」

溜め息まじりに矢薙は対策における自己本位の合格点を見出したが、

「そうだねえ。リンちゃんには断られちゃったし」

「それはともかく……亜沙。お前はなぜ俺の隣に座る？」

「何か問題でもある？」

「あるから尋ねているんだが？」

「ボク的には全然だけど？」

「それがお前だけだから問題あるんだが　もういい」

空いているはずのスペースはカレハの左隣だったはずなのに、なぜか亜沙は矢薙の右隣に座っていた。なぜ亜沙とカレハに両側を挟まれないやならないのかと思った矢薙だったが、どうしてか一歩も引かない亜沙の前に、これは自分が折れるしかないと悟った。むしろ、早く折れたほうが左隣で放たれ始めた妄想オーラの収束が手っ取り早く済むためだったが、

「でもまあ、あそこまで言われるくらいだから、歌は本当に上手な

「んだらうな」

「ええ。それはもう『天使の鐘』と呼ばれていらしたほどですから」
「へえ、そうなの……か？」

どうやって来週の音楽の授業を乗り越えようかと考える矢薙の耳に、まだ現実世界に足を着けていたカレハの言葉が飛び込んできた。まだ妄想世界に羽ばたいていなかったことにも矢薙は驚いたが、何より魔族にその愛称はないだろうと思ったのが率直な感想だった。
「なあカレハ。いくつか聞きたいことがあるんだけど、いいか？」
そして同時に、脳内に浮かび上がってきたいくつかの疑問を矢薙はカレハに尋ねることにした。

夕方。

既に表情筋にこびりついてしまったかのような苦笑を浮かべる楓と、対照的に疲れ切った顔を隠そうともしないプリムラに別れを告げ、橘花は芙蓉家から家路を辿っていた。一日の約三分の一は買い物に使ったにも関わらず、橘花が購入したのはどんな服装にも合うようなワンポイントのアクセサリーひとつだけだったが、休日を思い切り満喫できた感触のほうが大きかった。

だが次の瞬間、ふと風に乗ってきたその音に橘花の頭と心は急速に醒め、冷静さを取り戻した。セイレンの歌声。その音源へと近づくにつれ、神経が寒さを訴えている。日も傾いているが、まだ気温は高い。となると考えられる理由はその歌声があまりに悲愴な色を持っているからで、そうなるなら橘花の思いつく声の主は一人しかいなかった。

「……やっぱり、あなたでしたか」

こないだと同じソプラノ、こないだと同じ公園で同じような時間帯。ただ、前と違っていているのはそこに稟はおらず代わりに歌声の主がいることと、橘花が確信を持ってその歌声の主を声をかけていたことだけだった。

「き……つか、さん？」

「まだ、こんにちはで通りますよね？ ネリネ先輩」

「そ、そうですね……」

気配も足音も気づかないまま接近を許し、驚くネリネに対して、橘花はいつもと何ひとつ変わらない姿勢を装う。だが、いつもとは意味の異なる橘花の微笑の意味を敏感に感じ取ったネリネも頭の中で橘花の打ってくるであろう手への対策を即座に、確実に講じていく。

しかし、頭がいいことと、頭の回転が速いことはイコールではない。

「先輩の歌を『また』生で聴けるとは思いませんでした」

この一言で、ネリネが講じていた橘花の追及への対策は根底から崩れた。橘花は相手の出方を窺い、うまく論理的矛盾を引き出してその隙をついてくる持久戦スタイルであることは先のプリムラの件でネリネはそう理解していたが、今橘花が取ったのは矢薙のような強襲・急戦型の追及方法だった。

やっぱり。鎌をかける意図もあつたが、意外性を狙って先手に出た発言に驚くネリネを前に内心でほくそ笑みながら、橘花は誰よりも間近で見えてきた矢薙の大立ち回りの再現を始めた。

「歌うのはお嫌いではなかったんですか？」

今度の橘花のスタイルは下手。だがネリネはその口調に寒気すら覚えた。今までのたつた二言三言の間に、完全に目の前の後輩に心中を掌握させられたことを実感したからだ。

「あ、別に実演しなくてもナギ兄さんは理論だけで理解してくれたりもしますよ？」

今度は掘り返してきた矢薙の音痴対策。だが橘花の言葉は少しずつ自身を取り囲む檻を高くしているようにネリネには感じられ、同時に少しずつ近づいてくるチェックメイトの言葉が恐くなる。

「それとも、その歌声は王子様のためだけのものでしたか？」

「そ、それは……」

ついに橘花から隠していた刃を喉元に突きつけられた感覚に陥っ

たネリネの言葉は続かない。それに業を煮やしたのか、橘花の口元が苛立ちでわずかに歪んだ。

「あなたは人魚姫にでもなりたいんですか？」

「人魚姫、ですか？」

「綺麗な声を失って人間になっても、好きな人に想いを伝えることもできず海の泡になるんです。悲恋だと盛り立てる人もいますけど、愚かしい物語と思いませんか？」

「お、愚かしいとはどういうことですか？」

「だってそうでしょう？ 愛情表現の前に言葉など道具のひとつにしか過ぎないんですよ。ましてやは今は人工声帯に留まらず声にする言葉以外の伝達手段も発展しているんです。確かに文字だけでは気持の軽重を測りきれないかもしれませんが、声となった言葉自体にも軽重はありますし、それはあくまで信頼の薄い他人同士の場合、友人の残した乱雑なメモ書きと詐欺師の熱弁を天秤にかけるようなものです」

「遠い昔から受け継がれてきた有名な童話のひとつである『人魚姫』を一蹴した橘花にネリネは返す刃で尋ねたが、橘花は平然と、むしろ矢筈のように他人を嘲った反応で返す。

言葉などなくても愛情は対象との確固たる相互信頼関係があれば存在できる。橘花はそう言いたいのだろうとネリネも察知できた。が、聡明で大胆で狡猾で、冷酷なほど理性的。今、ネリネの眼前に立ちはだかるように構える少女は自身の父親からもそう評された一人。素直にその言葉を受け取るのは詐欺師の熱弁を鵜呑みにするよりも危険だと訴えるもう一人の自分がいることもネリネは自覚できた。

「人魚姫の件が嫌いならセイレンでも構いませんか？ 自身を大切な人を奪われた罰として下半身を鳥に変えられた哀れなニンフだと認めるなら」

「っ！」

橘花はネリネのプライドを煽り立てるように発言したが、それで

モネリネは息を呑んだまま反論してこなかった。ここは沈黙が金であることにネリネが気づいてしまったと感じた橘花は追及の手を緩め、話を変えることにした。

「まあ、どちらにしろ私はネリネ先輩がナギ兄さんに音痴にならない歌い方を教えてくれるとは思ってませんし、むしろ今のままでは教えてほしくないですね」

「えっ？」

「あんな悲しい歌声を毎回聞かされては、船乗りも海に飛び込まないで鬱になるだけですから」

いつも矢薙のことを思っている橘花には、内心ネリネだけでなくシアたちも稟と楓のような関係性と性格を感じていた。しかしそれは大きな間違いで、押しに弱い節がある楓とは違い、橘花はたとえ常識的なことでもためにならないことは自身の持つ論理的観点から見たうえで平然と否定してみせる。冷酷なほど理性的と感じるのはそのためだ。

「それでは、また」

そして、セイレンの逸話になぞらえた皮肉を残した橘花は、いつもの一礼もせずに躊躇なく踵を返すとその場を後にした。

夜になってようやく矢薙が帰宅してきた。ちょうど夕食の支度も整っていたので、二人は早速いつもの休日よりは遅めの夕食を摂ることにしたが、

「なあ橘花。俺、何となくお前の言っていた歌声の主がわかったかもしれない」

「えっ？」

ゴールデンタイムのバラエティーに紛れながらの矢薙の言葉に、橘花は危うく箸に掴んでいた魚の切り身を落としかけた。矢薙が昨日のことを少しでも気に懸けていてくれたのは橘花個人として嬉しかったが、自分はいずれ先程その本人を突き止めて、話までしてきた。しかし、今はまだ「そうだった」経緯を知らないため、橘花はその

まま矢薙の話に乗ることにする。

「それで、ナギ兄さんは誰だと思っただんです？」

「それは　その前にこれを見てほしい」

橘花の問いに、矢薙はそう言うと言いつつ今日着ていった上着のポケットから数枚の写真がプリントされた紙を取り出し、橘花の前に差し出した。

「これは？」

プリント用紙に目を落とすと、そこには正装した成人男性数人とその足元で笑う複数の子どもたちが写る写真がプリントされていた。耳の形を見るに、人族も神族も魔族もごちゃ混ぜだった。

「八年前の、三世界間の協定が公式に結ばれた日の夜のパーティーの写真らしい。非公式のパーティーらしかったんだが、案の定、こういうのに目敏いジャーナリストは昔こゝろからいるもんでな」

「そうですね。良くも悪くもそれが人界ひとの伝統です」
「でも、もちろん上も黙っちゃいなかった。そういう類の写真はことごとく非公式に抹消され、ニュースにすらならないうちに逮捕・拘束者まで出したらしい。非公式のパーティーの最中だったというだけで、あるはずのない公人としてのプライバシーを理由にしてな」

箸を起き、矢薙は口をつけた湯飲みの縁を指先で叩く。苦々しい顔と合わせて推測せずとも、権力者の理由なき規制　代償を弱者に支払わせようとする圧迫をとにかく嫌っている矢薙の機嫌が著しく悪くなっていることを橘花は察知した。

「で、ではナギ兄さんはどうやってこれを？」

「簡単だ。一度ネット上にはらまかれたものを回収するのはどんな魔法でも不可能だろうからな」

「ああ、そういうことですか」

抹消されたはずの写真データをなぜ矢薙が持ち出せたのか、そして不敵に笑う矢薙の帰りがなぜこれほど遅くなったのかも把握した橘花は一旦箸を置いてお茶を喉に流し込んだが、

「で、これが最大の証拠だ」

矢薙が見せたのはまだ一枚残っていたプリント用紙。だがそこには橘花もよく見かける人物　神王と魔王、そしてその娘たちが映りこんでいた。

「これは……シア先輩たち、ですよね？」

「ああ。髪の色とかからして間違いなくシア『は』写っている」

最後の一口を飲み込み、お茶で口腔内を潤した矢薙は軽く頬杖をつきながら答える。

「俺たちが稟たちと知り合ったとき、あいつらは八年前に稟と出会っているって言ってたよな？」

「え？ あ、はい。そうでしたね」

思い出せばあのとき、シアとネリネがこちらに来たのはそのときの出来事が理由で恋に落ちたという甘いことを言っていたと橘花は思い出した。甘いことと捉えている時点で冷めている女なのだろうかと自己を顧みたりもしたが、どんな出会いであれ、この世の現実などは易々とシンデレラを夢見させてくれるほど甘くない。ガラスの靴など長時間の労働でむくんだ足では入らず、歩きづらいただけ。

しかし、

「どつという経緯があったかは知らない。けれど稟と出会ったのはそこに映っている『二人』で間違いはない。当時の新聞記事を開いても両王が連れてきたのは『一人娘』と書かれていたからな」

「……え？」

矢薙の言葉に、橘花は視線を手元のプリントアウトされた写真に再度落とす。

「プリムラの持っていたぬいぐるみが人界製だったのもこれで理解できた」

だが写真に写る紫の双眸を見て理解したのは橘花も同じ。プリムラが虎玉と呼んでいるあのぬいぐるみをプレゼントしたのは誰だったのかも思い出した。しかし、一本の糸になるくらい材料が揃いながらも、良心に偽装した何かか呵責を起こし、真実を導き出す邪魔をしていた。

「けどこれが真実だ。八年前、人界に来ていたのはネリネじゃない。リコリスのほうだ」

戸惑いと躊躇を見せる橘花に自身の結論を告げると、矢薙は自分が使った分の食器を流しの中で水に浸し、自室へと引き上げていった。

「そ、んな……」

改めて思い知らされた。橘花は自分が八年も前の、関与すべきことではないことに触れてしまった。動き出してしまった船に一人乗りこんでしまい、これからどうすべきなのか悩み始めた橘花の耳に、耳障りになるくらいの笑い声をテレビが送り届けていた。

phase 2: Pieces of Pray (後書き)

さて、歌うのは音痴な矢薙も、PCの操作は音痴ではなかったようです。むしろ、こつこつ裏表隈なく情報を収集することは大得意だったりしています。

実際、ネット上にばらまかれた個人情報などは一生かかっても回収不可能と言われています。そうしてあらぬ誹謗中傷を生み、果てにはその人の人生をも破壊してしまうことになりかねないのでみんな注意しましょうね、という話でした(全く違う)。

さて、次話でこの章も終了する予定ですが、次話の更新は年末最大イベントの初日の10:00とします。ぜひサークルの行列やイベントの待ち時間潰しにお読みください(笑)
もちろん、そんな軽い感じの話ではありませんけどね。

あ、今のところは百合に走る気配もないので安心(?)してください。

それでは以下、初出の単語群の説明です。

・かつての白い都市：スペインの都市、サラゴサ(英: Zaragoza)のこと。現在スペイン北東部アラゴン州の州都でサラゴサ県の県都であるここはかつてよりトゥールーズ(フランス)やマドリッド(スペイン)などへの交通の要所であったが、白い都市というのはイスラムの支配下に置かれていた際に呼ばれていた「メディナ・アルバイダ(Medina Albaida)」の直訳に相当する。当時はサラクスタ(Saraqusta)とも呼ばれていた。

ちなみに双子姉が「こんな街にまで」と呟いたのは、サラゴサ市の紋章に『非常に高貴、王家に忠実、英雄的、敬虔なる、常に英雄的かつ永久不滅』の頭文字が記されているためで、その誇りを忘れてしまった人間がいることを嘆いたためである。

・レコンキスタ：reconquista（西）。718年から1492年まで行われたキリスト教国家によるイベリア半島の再征服活動の総称。日本では「国土回復運動」の訳が一般的か。正確には718年以前よりムスリムのウマイヤ朝はイベリア半島に侵攻していたが、キリスト教徒が蜂起してアストウリアス王国を建国したその年をレコンキスタの開始とみなしている学者が多い。

双子姉がこの言葉を用いたのは、このレコンキスタと同じ一連の行為を自分たち「も」行うという決意が秘められているようだが……。

全くの余談だが、コットンソフトから発売された18歳未満遊戯禁止のゲームに同タイトルの一品があるのだが、そこで扱われた題材は個人的に作者の大好物である。また、YURIAさんの歌うED曲も秀逸なので、ぜひ。

・ヘレシー：heresy（英）。訳は「異端・異教徒」だが、この双子姉弟は「最後に頼れるのは自分だけ」と神や悪魔を否定しているため、本文中では「（自分たちの住む世界における）異物・異分子」の意味合いが強い。

・中央には噴水。その周囲もベンチや石畳などしつかり整備されている公園：光陽公園のこと。矢薙が名前を知らなかったうえ、知ろうともしないためにこんな面倒な表記をする羽目になっただけ。次回以降はちゃんと明記する予定。

ちなみにクレープの芳香の根源は時折出没する「パルクレープ」とかという移動式屋台だとか。

Phase 3: The Angelus (前書き)

さて、今回は月曜0時更新ではありません。

本日は12月29日、コミクマーケットの初日ですね。人ごみ嫌いな私は行きたくても行けませんけど。

とにかく第3章もこのフェイズで終わります。

と同時に次章の前振りもしています。

橘花の頑張り、もう少しで終わりますので見守ってください。

Phase 3: The Angelus

ほら、時間だよ。

うん。早く目覚めないと、怒られる。

誰に？

それは、あの人たちに。

誰のこと？

それは。

鳥籠という表現すら生温い。ここは監獄だ。うつすらと緑青を帯びた無機質な天井、壁、床は常時綺麗に磨かれてはいるものの、見たことのない自らの姿を映す鏡とまではならない。与えられるのは毎日三回、規則に定められた一時間ずつの食事と八時間の睡眠。そして十二時間の労働と、その最中一時間ごと与えられる十分間の休憩だけ。娯楽と呼べるものはここには一切なかった。

外に出ると、地平線が見えるほど広い。しかし、どこへ向かおうとも現れるのは悠に十メートルはあるうかという重厚な壁。斑なく塗られた漆黒がさらなる重苦しさを奏で、超えてはいけないという強迫観念まで植えつけてくる。

アンジェラスさえ聞こえない狭く閉ざされた世界だけが、あの頃のすべてだった。

あんな悲しい歌声を毎回聞かされては、船乗りも海に飛び込まないで鬱になるだけですから。

この言葉から察するに、気づかれているのは間違いない。それでもまだ真実には至っていないようだったのが唯一の救いだっただ。いや 救いというのは語弊がある。救われるのは「私」ではなく、「彼女」であるべきなのだから。

人魚姫にでもなりたいんですか？

昨日、出会って間もない後輩から言われた言葉をネリネは思い出

した。なれるのであれば、きっと魔女には違うことを願っていた。

綺麗な声を失って人間になっても、好きな人に想いを伝えることもできず海の泡になるんです。悲恋だと盛り立てる人もいますけど、愚かしい物語と思いませんか？

それでも、「彼女」ならきつと、その思いを成就させることだろう。

セイレンでも構いませんよ？ 自身を大切な人を奪われた罰として下半身を鳥に変えられた哀れなニンフだと認めるなら。

人魚姫の件をネリネは詳しく知らないが、橘花からそう見えるのであればそうなのだろうと認めることにする。

けれど、認めたところでもう遅い。認めても「私」は「私」にしかねれない、変わらない。海の上の世界で王子様への恋に落ちたのは「私」ではなく、「彼女」なのだから。

翌日、放課後。

「あれ？ そういえばネリネは？」

「あ、確かにいないッス」

「どこでしょう？」

ついに始まってしまった新しい一週間、ブルーマンデーに塗れた中でようやく訪れた解放の瞬間、早速帰ろうと思っていた稟はそこに物足りなさを感じ、その原因についてシアたちに尋ねるが、シアも楓も首を傾げるばかりだった。

「まさか」

「あ、もしかして心当たりでもあるの？ 稟くん」

「本当ですか？」

「あ、いや……」

ふと一昨日に打ち込まれた楔が疼き、稟の脳裏に過つたのは一人の後輩の言葉だった。あのときは勝手な好奇心だからと言い残して切り上げていったが、たとえそれが勝手なものだろうと好奇心は猫を殺せる。それも、相手が大胆で狡猾であればあるほどすぐに飽き

足りなくなつて次の標的の猫を探し始めるだろう。

「　っ、悪い。シアたちは先に帰つてくれ」

思い返せばホームルームの直前、ネリネは自分のケータイを見て顔を強張らせていた。聡明かつ冷酷なほど理性的な犯人からの案内は電波に乗ってきたと見て間違いない。嫌な予感に背中を押されるように、稟は鞆を自分の机に放り出したまま教室を出て行つてしまつた。

その頃　。

「時間どおりですね。さすが礼儀作法はしっかり叩き込まれているようで」

二つ折りのケータイを閉じ、ブランコから腰を上げてネリネを迎えた彼女は、ネリネよりも高いその身長のせいもあるが、後輩というには似つかわしくない威圧感混じりの雰囲気を放っていた。

「皮肉を言いたいですか？」

「そう身構えないでくださいよ。ただ、私はネリネ先輩とお話をしたいだけです」

ローファーだということにもかかわらず、器用にブランコを囲むようにある低い鉄柵の上に跳び乗り、さらに背を高くした橘花はネリネを見下ろす。その視線はあのプリムラの件のように見た、他人の心を見透かすようなものだった。

「でしたら今でなくとも」

「ケータイの電源を切ってください。今すぐに」

「えっ？」

「ちよつとしたお願いです。切ってください」

台詞こそ丁寧でもそこに含まれる威圧感と命令口調に、ネリネは思わず橘花に従つてしまった。そして、その動作を一部始終確認すると、改めて橘花は話を始めるが、

「あのですね先輩、私は少し思ひ出話を聞きたいだけなんですよ」

「思ひ出話……ですか？」

「はい。八年ほど前に、この公園で起きた出来事の思い出話です」
「っ！」

「話して、いただけますよね？」

寒気どころか、今の橘花の笑みにネリネは怖気すら催した。プリムラのときは矢薙のサポートだったというのに、今はたった一人だというのに、ネリネは橘花を前に明らかな劣勢を把握する。今回の橘花の手法は得意とする下手からの持久戦。次々と手札をめぐって攻撃を仕掛けて反撃する気持ちすら奪う矢薙とは真逆の、ゆっくりと手札をめぐってじわじわと逃げ場を奪い、追い詰めていく嫌らしい手法だ。

「それは……」

「話したくないのならこのままでどうぞ。ギャラリーが増えるだけですから」

言葉に詰まるネリネに、橘花は早速一枚のカードをめぐってみせた。

「っ！？ まさか橘花さん。稟さまたちに……」

「土見先輩たちには言っていませんよ。もちろんナギさんにもです。ただ、ここが地理的にどんな場所かくらいはご存知ですよね？」

柔らかい満面の笑みの仮面の下に悪魔の高笑いを浮かべ、橘花は公園の出入り口に目をやる。緑公園 地理的にここは稟たちが帰る道沿いにある。木漏れ日通りなどで買物するにしても、いずれここを通る可能性は非常に高い。これはある意味、帰宅する稟たちを時限装置に見立てた橘花の戦略だった。

「私は誰に聞かれようと構わないのですけど、さすがにリコリスさんの名前が関わるようですから、リムちゃんには黙っておきたいですよね？」

昨日は金だった沈黙も、本気で猫を殺しかねないほどの好奇心を剥き出しにしてきた今日の橘花には何の意味もなさない。時限装置までセットしたうえで橘花は表情に笑顔を貼りつけたまま真綿でネリネの首を絞めてきた。

「申し訳ありませんが、橘花さん。それだけは絶対に言えません」
それでもしばらくの無言の後、ネリネは首を絞める手を振り払って答えを返す。

「そうですね。まあ、私が知りたいのはただの好奇心からで、事の真相を探ったところで私は何も得をしませんからね。けどあなたは他人と繋がりを生み出し、維持できています。親も家族もいて、信頼できる友人も多く持っているでしょう？ そんな人たちを心配させて何が楽しいんですか？ あなたは私やナギ兄さんとは違うでしょう？」

「……え？」

自分たちとは違う。その件にネリネは低い鉄柵から跳び下りた橘花の言葉が理解できなかった。確かに鋭い状況判断力や理解・推測の能力はあれど、ネリネからすれば矢張り橘花も稟や楓と同じ人で、自分たちと同じ人間だ。まるで自分たちは人間ですらもないような橘花の物言いには違和感を覚えざるを得なかったが、その違和感は橘花自身が素直に答えてくれた。

「ああ、これはナギ兄さんも知らないんですけどね、私、本当の親の顔を知らないんですよ」

まるで他人事のように明かした自身のつらい過去に痛みすら抱いていないように、橘花は呆然とするネリネの前で言の葉を紡ぎ続ける。

「本当のお父さんとお母さんは私が物心つく前に死んでしまいました。今のお父さんとお母さんは、私の生みのお母さんの数少ない友人だったそうです。ですけど、引き取られて以降ずっと私は本当の親子のように愛情を受けて育ってきました。それでも お父さんとお母さんの意向もあつたんでしようけど、私はそのせいであの村の因習に参加することも叶わず、ずっとナギ兄さんたちと線を引かれてきたんです」

「そんな……」

自嘲まで混じえて話す橘花に、ネリネはようやく言葉を喉奥から

絞り出した。血の繋がりが無いだけで参加できない因習などネリネには想像もできなかったが、常に近くにいてくれる人と線を引かれるのはどれだけつらいことかはそれとなく理解できた。

だが、

「前に言ってみましたよね？ ネリネ先輩、昔は身体が弱かったと。リコリスさんがあなたの代わりに人界に来たのはそれが原因なんでしょう？」

自嘲で細められていた橘花の双眸はいつの間にか心中を見透かすものに戻っており、改めて会話の主導権は記憶力も素晴らしい橘花の手元から微塵も動いていなかったことをネリネは認識させられる。「土見先輩と出会ったのも、ネリネ先輩でなくリコリスさんのほう。それからどういう経緯があったかなんて知る由もありませんが、『天使の鐘』なんて呼ばれるほどだったネリネ先輩が人前で歌うのを避けた理由も踏まえると、さしずめネリネ先輩はセイレンで、リコリスさんは人魚姫ですね」

「どういうことですか？」

矢薙に負けず劣らずの推測展開にネリネが尋ね返す。

だが橘花としてもやはり人の粗を探すのは何度やっても心地が悪い。ネリネがその事実を隠そうとしているのが見え見えなだけに、余計に胸が苦しい。だが一度、たった一度だけでも触れてしまった。もう引き返す理由はない。

橘花は軽く閉じた瞼を開くと、じつと赤い瞳を見て答えた。

「それは　綺麗な声を失ったのは人魚姫で、罰を受けたのはセイレンだからです」

人魚姫も、セイレンも、ともに似て非なる二つの物語から生み出された幻想の産物。それゆえに橘花は目の前にいる少女にローレライの伝説に沿ったシナリオを歩ませるわけにはいかなかった。恋人に裏切られた程度、本当の絶望ではない。本物の絶望はもつと悍ましく歪んでいて、いかほどの信仰を捧げていたその神や仏も情け容赦なく見捨てて立ち去っていく状況にある。

「だから……、だから何だと言っんですか？」

「だったら、ネリネ先輩の気持ちを教えてください」

「えっ？」

人魚姫は結局、最後まで想いを伝えることができなかった。王子様を殺して元の世界に戻るといふ救いも自ら断ち切り、海の泡となった。だがもし橘花の眼前に立つ少女にそっくりな人魚姫が別の理由で海の泡になったとしたのなら、きっとこの聡明なセイレンはしっかりと自分のことを理解し、把握している。そして、そのうえで苦しんでいる。

「わかっているんでしょう？ あなたはあなたにしかありません。誰の代わりもできません。誰のどんな想いを受け継いで背負おうとも、最後の決断はあなた自身が下さなければいけないはずです。誰のためとかではなく、あなた自身のために」

独善的と言われようとこれが橘花の考えだった。生みの親の顔を知らない橘花に背負わされたのは名前だけだったが、自身の出生を知った橘花は改めて「鳳仙橘花」として生きていくことを決めた。誰でもない、誰も代わりができないその人物になって今まで生きてきて、これからもそう生きていくつもりだ。

「それとも、先輩は誰かのために他人に恋をするんですか？」

「そんなわけ」

「だったら教えてください。あなたの気持ちはどこにあるんですか？」

岐路となる質問をネリネに投げかけ、橘花は返ってくる答えを待つ。

生憎、橘花は自分が自分自身のためにしか生きられない人間だと知っている。他人を求めるのは人が決して一人で生きられないゆえに必要なものからで、男女間に生まれる恋愛感情もその延長線上にあるものだと思っていた。そして、友情と愛情はともに別々のものとして存在しても、同一対象に友情と愛情を同時に与えられないのはそのせいだとも。

同時刻、一方で稟はまだ学園内に残っていた。教室を出て真っ先に昇降口に向かったが、ネリネの外靴が残っていたので校舎内を探していたのだが、どこにもその姿が見当たらなかったのだ。すると、「あ、矢薙先輩！」

校舎内を一回りして昇降口に戻ってきた稟は、何か知っているであろうその先輩の名前を呼ぶ。今日は亜沙もカレハも料理部のほうに出払っているせいか一人だったのもあって、気兼ねなくその名前を口に出せた。

「ん？ よう。どうした？」

名前を呼ばれて靴棚から外靴を取り出す手を止めた矢薙は、足元に落とした靴に足を差し込みながら尋ねてきた。

「その、先輩は……ネリネか橘花ちゃんを見てませんか？」
「橘花は先に帰るってメールがあっただけど、ネリネは知らねえな」

友人を疑うことなどしたくはなかった稟だが、迷わず本来探していた人物と最も怪しい人物の行方を尋ねた。しかし、矢薙が返した言葉は稟の目的を達成する足がかりにはならなかった。

「そうですか」

今さらになって稟が思い返したのは、あの日、「初めて出会ったとき」と同じようにネリネが一人歌っていた場面に遭遇した後、どこから歌声を聴きつけた橘花と出会ってしまったことだった。あのとき、橘花は歌声の主を探ることを自分自身の単なる好奇心だと言っていたが、間違いなくあのときの橘花の瞳は猫を殺す意思を宿らせていたことを稟は思い出していた。

「どうした？ 橘花に用事でもあるのか？」

「あ、いえ 少しでも、個人的に気になることがあったので」

「……なるほどな。お前は歌えなくなっただけ人魚姫探してんだろ？」

「え？」

橘花の名前を出したせいかわ薙の態度が幾分か柔和になっている

ことに気づかず、稟は橘花を怪しんでいた自分を諫める意味でも言葉濁して返したが、稟の言動から何かを察したと見られる矢薙の答えに稟は言葉を失った。歌えなくなつた人魚姫　その話はその場にいなかつた矢薙には、いやむしろ後からあの場に來た橘花にも知られてはいないはずの八年前の昔話だつた。なぜそれを矢薙が知っているのか稟が呆然としてみると、矢薙は小さく溜め息をついて話を続けた。

「いずれ気づくことだからお前には話しておくけど、俺は橘花に頼まれてネリネの靴棚の中身を別の娘のと差し替えた。あいつがネリネ相手に何か仕掛けるとは思つてはいたが、お前を学園に足止めして時間稼ぎするための偽装だつたとはな」

「どうして、そんなことを・・・」

まんまとしてやられた。矢薙がこうして打ち明けてくれなければ、稟は橘花の考えた一分もかからない偽装工作に騙され続けていたことになる。途轍もない敗北感が稟の両肩に重くのしかかり、背中を冷やす。

「あいつもあいつなりにネリネのことを思つて・・・いや、おそらくリコリスが関わつてきた時点で、プリムラのためにも動いたかもしれないな」

「リコリスも、ですか？」

「ああ。でもここから先は俺の推測にしか過ぎないし、これに関しては橘花のほう詳しく知ってるだろう」

ちらと夕日に照らされたグラウンドに目をやり、多少履き潰れた踵を直して矢薙は爪先で昇降口の地面を叩くと、稟に視線を戻して告げた。

「だから稟、今度はお前がネリネを救うんだ。歌えなくなつた人魚姫の行く末はわかつてるんだろう？」

「・・・はい」

矢薙の問いに稟は覚悟を決めた言葉を返すと、出入り口から昇降口に差し込む夕日を背にする矢薙の脇をすり抜け、外に駆け出して

行った。

幼い頃、稟も絵本で見た『人魚姫』。その結末はいつも。

「だったら答えてください。あなたの気持ちはどこにあるんですか？」

返ってくる答えを待っていた橘花は、まるで線香花火の終わり際のようになってしまった弱々しい太陽を見つめる。あれから細かい時間はわからないが、時間稼ぎもそろそろ限界。時限装置が足音立ててシアたちを連れてくる頃だと踏んだ橘花は、ゆっくりとした口調ながら答えを急かすことにした。

「どんな綺麗事を言おうとも、人は自分のためにしか生きられないんです。いなくなった人の想いを受け継ぐことはできても、その人の想いを果たせるかどうかはあなたの行動次第だったはずですよ」

「それは」

「もうこの世にいない人にはできないことがあなたにはできるんじゃないんですか？　それでもなければ、今私の目の前にいるあなたはいったい誰なんですか？　八年前に出会ったのが偽りであっても、今ここにいるあなたが土見先輩を好きだと公言したのは誰の気持ちで、誰の行動なんですか？」

誰もリコリスの代わりにはなれない。あの日プリムラに向けられていた稟のその言葉がネリネの脳裏をかすめていく。八年前に稟と出会ったのはリコリスで、そのとき恋をしたのもリコリス。けれど、この気持ちはいったい誰のものなのか。それに答えを出すのを憚るネリネの前に、橘花は小さく手を差し出して続けた。

「もう終わりにしませんか？　このままその胸の中、リコリスさんの面影で自分自身を縛りつけるのも苦しいだけじゃないんですか？」

「っ！」

息を呑んだネリネの反応からついには件の核心を抉ったことを察した橘花は、弱々しく差し出した手を引くことにした。今だけはネリネを一人にしても大丈夫なはずだ。それに自分は外殻を壊しただけ

で、本心を晒されたネリネに手を差し伸べてあげるべき人は自分ではないと橘花は自覚していた。

「生憎、私はネリネ先輩みたいに人を愛するという気持ちがあまく理解できていませんけど、人が人を好きになる理由に貴賤はないと、そう思っていますから」

そう言い残し、橘花は口元に手を当て嗚咽を漏らすネリネの脇を通り抜け、公園を後にしていった。

「橘花ちゃん！」

公園を後にしてほどなく、橘花の名前を呼ぶ声が聞こえた。息を切らして駆け寄る声の主、橘花の期待していた時限装置。シアや楓、プリムラは引き連れていなかったうえ、若干期待よりも遅く作動したようだったが。

だがこの広い街でネリネを探すためにどれだけ走り回ったのだろうか、荒れた呼吸を整える稟を前に、橘花は感情を殺した声で尋ねた。

「八年前、土見先輩は『紫色の瞳』をした娘と出会っていませんか？」

「それ、は……」

「気づいていたんですね？　あなたは、あの日出会ったのがネリネ先輩ではなかったことに」

「……すまない。けど」

「私は気にしていませんよ。土見先輩も土見先輩で、ネリネ先輩のことを案じていたのであれば、何も」

事の真相に最も近かったのはやはり重要な場面に遭遇していた稟だったが、橘花はそれをいちいち追及することをやめた。今回の件はその代わりとしてネリネの外殻を破壊しただけにしておこうと心中でまとめた橘花は、やはり自分が自分自身のためにしか生きられない人間であることを再確認した。稟たちを騙してまでネリネと膝を突き合わせて話す時間を稼ぎ、リコリスの面影から解放した今回の行為も、結局、橘花自身が満足したかっただけだ。ただこれ以上

苦しんでいる人を見ていられなかったただけだ。だが。

「私は人に優しくするのが苦手ですから」

「えっ？」

「早くネリネ先輩のところに行つてあげてください。八年前に『二人が出会つた』あの公園にいますので」

ふとひとりごちた言葉に乗つてきた稟を振り払うように端的に告げると、橘花は稟をその場に置いて家路を辿つていく一方で、稟が駆け出していく足音が遠ざかつていくのをその耳でしっかりと聞き届けていた。

翌日。バーベナ学園、一年教室。

「橘花。お客さん」

休み時間、移動教室から戻ってきた橘花に、同じく戻ってきたプリムラが声をかけてきた。そして同時に教室。特に男子勢がやけに色めき始めたのだが、プリムラに注意が向かっていた橘花はそれに気づいていない。

「お客さん、ですか？」

「うん。そこで待つてる」

橘花に尋ねられたプリムラが避けた先、その視線の先には昨日も見たあの蒼い髪が揺れていた。

「で、用事というのは何ですか？」

「実は、お伝えしたいことがあります」

「あの場じゃ無理だったんですか？」

「はい。これは『特別』ですから」

「特別……」

理由を尋ねても本題を濁すネリネの後をついていき、橘花が到着したのは学園の屋上。一瞬、暑ささえ感じる風が通り抜けていったが、そこには既に二名ほどの先客がいた。

「あ、橘花ちゃん」

「やっぱりお前もか」

「橘花さん。今回の件は、本当にご迷惑をおかけしました」

橘花より先にそこにいたのは稟と矢薙だった。おそらくともに呼び出されたのだろうが、その理由を未だに教えてくれない呼び出した張本人は、理由を打ち明けるところかいきなり橘花に向けて大きく頭を下げた。

「え？ 何がですか？」

「昨日、橘花さんがあそこまで言うてくださらなければ、私はずっとセイレンのままでしたから」

「……あ、ああ。そういうことですか」

昨日のこととセイレンの単語を聞いて、橘花はようやく昨日ネリネの眼前で自分が言い放った辛辣な言葉の数々を思い出した。下手すれば今日という日は存在しないくらいの打ち首獄門を覚悟していたが、どうやら稟がうまく丸く収めてくれたのだと橘花は理解した。そして、

「それで、お礼と言っては何ですが……」

「あ、そういうことか」

「では、お願いを聞いていただけのんですか？」

ちらとネリネがベンチに座る矢薙を見た時点で、稟と橘花はすべてを理解し、同じくそれを理解した矢薙は若干ながら驚いたような表情をしていた。今ここで、一度は拒否した矢薙の最大の弱点であるその音痴を直す方法を実演してみせようということだった。

「何にせよ、するかしないかを決めるのは俺じゃないだろ？ ネリネ」

「はい。私はもう、大丈夫ですから」

実は明日という日にその音楽の授業が迫っていた矢薙だったが、あえてそれは誰の決断かを問う意味も込めて尋ね返すと、ネリネの口からしっかりと返ってきた言の葉に、稟も、矢薙も、橘花も、確かに口元を緩めて受け入れることにした。

「では、何の歌にしましょうか？」

「何でもいい。俺は稟に任せる」

「私も土見先輩にお任せです」

「お、俺が決めるんですか？」

決まったとなると次の問題は時間。休み時間は有限だ。そして、曲目を問うネリネを前に、すぐさま矢薙と橘花から選択権を丸投げされた稟は最初こそ焦っていたが、答えをすぐに返す。

「だったら、出会ったときに歌っていた曲がいいな」

「出会ったときの、ですか？」

「ああ。ネリネとリコリスの思い出の歌が聴きたい」

稟の選曲に、なかなかに粋な演出だと矢薙も橘花も心中で稟に親指を立てる。そして、そのリクエストを受けたネリネは大きく息を吸い込むと、旋律を紡ぎ始めた。

芸術性の高い作品や、綺麗で神秘的な光景を拝謁したときの「言葉を失う」感覚とはこういうものなのだろう。だが、今心地よく耳に響いてくるこの歌声はその芸術性や神秘性も超越している。その証に三人とも一度立った鳥肌がなかなか収まらなかった。

「これが、ネリネ先輩の歌……」

「まるでアンジェラスだな」

「アンジェラス、って何です？」

「キリスト教の祈りを告げる鐘だ。どこまでも淀みなく心に響く天使の鐘の音だよ」

ふと漏れた矢薙の聞き慣れない単語の意味を知った稟は、改めて目の前、暗い影を振り切って伸び伸びと歌うネリネの歌声に、リコリスがあの日言っていたとおり『天使の鐘』は間違いなく存在していたと感じた。

この歌声、リコリスも聴いているんだろうか。ふとそんなことを考えた稟の意識を取り戻させるようにふわりと通り過ぎていった風が、綺麗な旋律を奏で続けるネリネに一瞬だけ、ほんの一瞬だけリコリスの面影を重ねさせた。

しかし、その頃。

「あ……」

突如聞こえてきた天使の鐘に、ちょうど花を摘み終えた彼女は口に啜っていたハンカチを手洗い場の中へ落としてしまった。

「そっか。リンちゃんも」

蛇口から流れる水にすっかり濡れてしまったハンカチのことも忘れ、彼女は親友が長年抱えていたわだかまりが拭い去られ、変わったことを察した。いち親友としてその変化を喜ぶ半面、同時に彼女自身も長年抱えてきた冷たい決意が心の中で芽吹き始めた。

変わらなければ。鏡に映る自身の姿を見て彼女はそう心に誓う。

始まりがあれば終わりがある。夢を見るには長すぎた幸せな時間を噛み締め、彼女が一度閉ざした瞼を再び開けた瞬間、目の前の鏡には大きく亀裂が走り、彼女の輪郭を歪ませていた。

Phase 3: The Angelus (後書き)

百合に走らずに第3章の「人魚の歌（意識）」、走破できました！
まあ、フェイズ2の執筆が終わった時点で「これで百合展開はありえねーよ」的状況に運べたので、そのまま謎の青年に少女、双子姉弟のことなどすっ飛ばして駆け抜けた感じになってしまいました
が。

てなわけで、次の章は最後の場面から誰のシナリオかは想像できるようにして、と。

ですが実を言えば、ここまではできるだけ原作のシナリオの結末どおりにまとめてきたのですが、第4章以降は結末が少し変わります。シナリオ展開は原作沿いながら、後々の、元々別サイト様に投稿していたシリーズ本編に繋がる伏線となる結末を用意したいと思っています。

まあ、個人的にこのシナリオが一番好きってのもあるんですけどね。ゲームやってて泣きましたし。本当、あの頃はつくづく純粹だったと思います、今や単なるラブコメには拒絶反応起こしてますからね。

さて、第3章では橘花を活躍させたので次は矢薙の出番です。
他人からの「否定」や「拒絶」をその身をもって知る矢薙の言葉は、果たして否定された「彼女」に届くのでしょうか……？

以下、初出の単語群の説明です。

・猫を殺す意思：本文中では橘花が自ら「好奇心から」と理由つけてネリネの過去を探ろうとした一連の行為のこと。

猫を殺すという比喩は諺の『Curiosity killed the cat (訳：好奇心は猫を殺す)』から拝借したものだ
が、この諺の省略された箇所も含めると『Don't your
realize that curiosity killed the cat? (訳：好奇心は猫を殺すことをわからないのか?)』
となるため、本来は知りたがりを諷めるときに使用されるものである。

なので、作者としては第2章のフェイズ1における双子姉弟の発言、「逃げた猫」プリムラ」の解釈をここで当てはめないでいた
きたいところ。

・アンジェラス：the Angelus (英)。キリスト教における、お告げの祈り。一日三回、朝、昼、夕に捧げられる。本文中ではその祈りの時間を知らせるために鳴らす『天使の鐘』(『Angelus bell』)の意として使用している。

・ブルーマンデー：学生、社会人、はたまた主婦・主夫も関係無しに訪れる「憂鬱な月曜日」のこと。日本ではハッピーマンデー法のおかげで土・日・月と三連休になるのも珍しくはないが、それは単に憂鬱な曜日が火曜日になるだけのことだと作者は個人的に思っている。

・あの村の因習：矢薙と橘花が住んでいた村(次話で名称登場予定)における、一定の知識・素養、体格などを身に着けたとみなされた子どもが村の大人と同等と扱われるための儀式で、その内容は主に祝詞(神様による祝福)と祝宴(大人衆からの祝福)と性交(子孫を残す能力向上と研鑽)の三つに分けられるが、儀式終了後も性交だけは毎日のように繰り返されているため、もはや乱交の域に達している。

矢薙の異性関係の在り方や女性観の多くがそこで築かれてきたた

めに、フェイズ2で語られたように一般論と大きく歪んでいるのはこれが原因である。

ちなみに、儀式を受ける基準が「知識・素養、体格などを身に着けたとみなされた」時点であるために、儀式を受けるまでの年齢や日数には個人差がある。なお矢薙の親友の間では、一歳年上だった林檎、体格の良かった橙次、そして矢薙の順番でこの儀式を通過しているが、橘花が両親の意向でこの儀式をすべて通過していない（祝詞と祝宴は受けているが性交だけは未経験）ことから察するに、厳格な戒律や暗黙の了解が存在しているわけではなく任意の部分もあるとも考えられる。

・花を摘み終えた：「お花を摘んでくる」という婉曲表現から拝借ぶつちやけると女性がトイレで用を足してくるということですから言わせないでください。

*注：賢明な読者さまはわかっているとは思いますが、矢薙と橘花が育った村の儀式の模様（特に最後の三分の一）を詳細に描くとこの作品が18禁になるため原文から省略しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4270w/>

開花日和 -Memory With You-

2011年12月29日10時56分発行